
神村律子自選短編集

神村律子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神村律子自選短編集

【Nコード】

N7580I

【作者名】

神村律子

【あらすじ】

神村律子の今までの作品からの自選短編集です。宜しかったら覗いて下さい。

慎重に……

人間を「慎重派」と「うっかり派」に分けるとすれば、私は間違
いなく「うっかり派」だ。

私を知る人間が全員同意するだろう。

そんな私が慎重に事を運ばなければならない「仕事」を仰せつ
かった。

「うっかり」ではすまない「仕事」だ。しくじれば大変な事にな
る。

本当に私にできるのか？ 何度も自問した。答えは「NO」だっ
た。

誰かに代わってもらえないだろうかと考えたが、今更それもでき
ない。

他者に頼むには時間がないのだ。決断を迫られた。

やるしかない。逃げれば私は二度と「仕事」をさせてもらえない。

重い足取りで現場に向かう。

思いの他早く着いてしまった。しばし考え込む。

ハッと我に返り、作業に取り掛かった。時間がないのだ。悩んで
いる暇はない。

ターゲット確認。風もない。誰も私の存在に気づいていない。

ゆっくりとトリガーに人差し指をかけ、祈りながら引いた。

プシュ……。

小さな発射音が聞こえ、次の瞬間ターゲットが倒れるのが見えた。

上出来だった。私はプレッシャーに打ち勝ち、「仕事」を完遂したのだ。

すぐさまその場から駆け出す。追っ手が来るのは時間の問題。

逃走経路の確保はしてある。まず捕まる事はないだろう。

その時携帯がなった。今回のクライアントからだ。早速情報が入ったのだろう。

私はニヤリとして出た。

「大変だ。何者かが我が党の大統領候補を狙撃した。貴方への依頼を変更したい。狙撃者を見つけ出し、始末してくれ」

その日来る

怖い。やり切れない。何であんな事をしてしまったのか？

後悔ばかりが頭の中をよぎる。

今日は「死刑執行」の日。遂に来てしまった。

一日一日とその日が近づいて来るのを恐れていた。

その日が来る前に死んでしまいたいほど恐ろしかった。

しかし私が悪いのだ。誰のせいでもない。全て自分の責任だ。

もうどうしようもない。諦めるしかない。

今日がその日。係官が歩いて来る足音が聞こえる。

その冷たい響きはまさに「死神の笑い声」に聞こえた。

ガチャンと重い鉄の扉が開く。

「時間です」

係官の無機質な声がした。私はその声にビクツとした。

「さあ、立って」

私は顔を上げて係官に従い、死刑執行室に向かった。

何度も足がすくんで動けなくなった。

そのたび係官が私を抱き起こすようにして歩いた。

執行室の前まで来ると、私は暴れた。

「嫌だ！ 絶対に嫌だ！」

係官は遂に応援を呼び、私は引き摺られるようにして中に入った。

「やっぱり嫌だ！ 死刑なんて嫌だ！」

私はまた尻込みして暴れた。係官の一人が私を羽交い絞めにした。

私は抵抗するのをやめ、脱力した。

「嫌なんだ。死刑は嫌だ。嫌だ」

それでも言葉では抵抗を続けた。

「今更そんな事を言われても困る！ あんたが望んだことだろう？」

業を煮やした係官の一人が怒鳴った。

「あんたはあんたの奥さんを殺した犯人をその手で殺したいと望んだんだ。早く電気椅子のスイッチを押しなさい！」

巡る思い

私は裕福な家庭に生まれ、「お嬢様」とメイドや執事に言われる生活をしていた。

学校も幼稚園から始まる私立の有名校に入学した。

自分で言うのも可笑しいものだが、成績は常に学年一番、クラブ活動にも積極的に参加し、都大会、全国大会と勝ち進んだ。

当然のことながら、就職は父親の経営する商社に入社、コネで入ったと言われるのが嫌なので周囲の気遣いを一切排除し、一営業から始めた。

生来の社交性と積極性から、私は常に社内でも営業成績トップの座を守り続けた。

女のくせにと陰口を叩かれる事もあった。

しかしそれをさらに飛躍のバネにして、組織の上へと昇った。

気がついてみると営業一課の課長になっていた。二十代での課長就任は破格だった。

そのため、「コネだ」と囁かれた。悔しかったが気にせず仕事に打ち込んだ。

その甲斐もあって、今まで私に批判的だった人達とも和解し、課はまとまった。

そんな仕事一筋の私だったが、ある時燃えるような恋をした。

人事部の人だった。

今まで恋愛に全く興味がなかった私が、自分でも不思議なくらいのめり込んで行った。

相手も私の積極さに最初は戸惑っていたが、やがて私達は結婚を意識する仲になった。

私は父に彼を紹介し、父も彼を気に入ってくれた。

式の日取り、新居の建築と次々に決まった。幸せだった。信じられないくらい。

???

私は何故幼少の頃からの事をこんなにいろいろと思い出しているのだろうか？

昨日、確か彼の浮気が発覚し、相手の女性が妊娠していると知って……。

思い出した。私は何もかも嫌になって会社の屋上から飛び降りたのだ。

ああ、地面が迫って来る……。

あの世入門

俺は死んだ。

死因はわからない。

何故死んだとわかったのかというと、死神が現れたからだ。

死神というと黒マントに骸骨で大鎌を持っているイメージがある。

しかし俺の前に現れた死神は、会社の営業マンにしか見えなかった。

「私、天国の新死人担当の死神です。どうぞよろしく」

「ああ」

愛想良く名刺を差し出されたが、何かシツクリ来ない。

死んだ人間に対してそんな陽気な挨拶はどうなのかと思った。

「新死人て何？」

俺は名刺を見たままで営業マンにしか見えない死神に尋ねた。

「ああ、死んでから二十四時間以内の方の事です」

「なるほど。ところで俺は何で死んだんだ？」

「世の中知らない方がいい事もございまして」

妙に嬉しそうに言われたのが癪に障る。

「何だ、そんな悲惨な死に方なのか？」

「はい、ある意味」

「ある意味？ どういうことだ？」

俺は死神を睨んだ。それでも奴はニコニコしながら、

「貴方は会社の飲み会で悪酔いして、トイレで戻している時に足を滑らせて……」

「ああ、もういい！」

俺はそれ以上詳細を聞くつもりはなかった。確かに「ある意味悲惨」だ。

「それですね、今後のことをご検討していただきたいと思ひまして」

「今後の事？ 天国か地獄かっていう事か？」

俺が真顔で尋ねると、死神は大笑いして、

「いえいえ。貴方は天国に行きます。私は天国所属ですから。そういうことはありません」

「そうか。なるほど」

「ご希望なら、地獄所属の死神を呼んで、体験ツアーもできますが」
俺は目を丸くした。

「体験ツアー？ そんな気軽に行けるのか、地獄って？」

「はい。でも内容はハードでして、大概の体験者の方のご感想が『死ぬかと思った』でして」

俺は頭が痛くなりそうだった。こいつは本当に死神なのかと疑いなくなった。

「これからどうすればいいんだ？」

「まずはコースを選択していただきます。上級、中級、初級とございまして」

「試験でも受けるのか？」

俺は死んでまで勉強はしなくなかった。すると死神は、

「違います。試験ではございません」

とイラつく愛想笑いで答えた。

「上級は神になるコース、中級は天国の高級官僚になるコース、初級は死神になるコースです」

「随分と開きがあるな。それにしても、天国も官僚支配なのか？」

「はい。但し官僚がいるのは日本管轄の天国だけで、他国管轄の天国にはおりません。その代わり独裁体制の天国もあります」

死神は申し訳なさそうに、でも嬉しそうに話した。

「どのコースにお進みになりますか？」

「その前に内容を説明してくれ」

「それもそうですね」

死神は「しまった」という仕草をしたが、まるで昭和の芸人だった。

「こんな感じになりますね」

大きな黒いバッグの中からパンフレットのようなものを取り出し、俺に手渡した。

「神のコースは……。毎日難行苦行か。神になれば年棒が……。凄いいぜロの数だな」

「はい。でも選択された方で実際神になれた方は全体の0・001%ですね」

「そうだろうな。俺はこんな難行苦行はいくら積まれてもしたくない」

そう言いながら次に「高級官僚コース」を見る。

「神に比べれば年棒は安いが、結構な収入だな。でも何だこの、ハ
イリスクハイリターンていうのは？」

死神は揉み手をしながら愛想笑いをし、

「誘惑が多いという事です。神コースの難行苦行は官僚が監視・判
定するのですが、贈収賄が後を絶ちません」

「死んでもそれが。で、収賄がわかるとどうなるんだ？」

「地獄行きです」

「それでも収賄する奴の神経がわからないな」

「しかし、それを逃れるために地獄でも収賄が後を絶ちません」

「生きている人間の社会より酷いな」

「所詮天国も地獄もその大半は人間ですから」

俺は溜息を吐いて「死神コース」を見た。

「これには特にコメントがないが……。どというコースなんだ？」

「今私がしているような事が主な仕事です。要するに営業ですね」

俺はうんざり顔で、

「死んでも営業かよ。仕方ないな。死神コースにするか」

「ありがとうございます。では早速研修に行ってもらいます」

俺は驚いた。

「おいおい、いきなり研修かよ。事前説明会とかないのか？」

「ありません。事前説明会の代わりが今の私の話ですから」

「そうか。で、どこに研修に行くんだ？」

「たった今死んだ人がいるんです。その人のところに行つて私と同じ事をして下さい」

死神は突然大きなバッグを俺に差し出した。

「無理だよ。そんな急に言われてもさ。間違つたらまずいだろ？」

俺の不安を他所に死神はニコニコ顔でこう言った。

「大丈夫です。相手も初めてですから何もわかりやしません。二度三度来る人はいませんからやつつけ仕事でいいんですよ」

それもそうだと妙に納得してしまった自分が情けなかった。

夢で逢えたら

最近初恋の人の夢ばかり見る。

付き合っていたのはウン十年前。

先に結婚した私は、夫の仕事の関係で遠くに引っ越した。

もうずっと会っていない。

彼は同窓会にも出席しないから。

お互い会えばがっかりするほど容姿も変わってしまったはずだ
けど。

会わずにすむこともいいのかも。

でも夢に出て来る彼はその当時のままで、私もその当時の姿だ。

いつもの店で、いつものクリームソーダを1つだけ頼んで、スト
ロー2つで飲む。

体温がわかるくらい彼の顔が近い。

私は思わず赤面した。

彼はそんな私を見て優しく微笑む。

今までで感じた事のないほどの幸せな気持ち。

充実した心。

彼が何か語りかけているが、聞こえない。

私は「何？」と聞き返そうとするが、声が出ない。

彼は照れ臭そうに笑い、席を立つ。

私も慌てて立つ。

そこで目が覚める。

そんな夢が一週間ほど続いた。

数日経った夜、私はまた彼の夢を見た。

ずっと見続けていた夢の続きだった。

席を立ち、店を出た。

そこで彼は私を見て、

「さよなら」

と微笑んで言った。

「え？」

私は意味がわからず、歩き出す彼を追いかけた。

しかし、追いつけなかった。

そこで目が覚めた。

何故か私は泣いていた。

翌々日、一通の黒い縁取りの葉書が届いた。

彼のご両親からだった。

彼が亡くなったという知らせ。

ああ、あれは彼が最後のお別れをしに来たのだと感じ、泣いた。

葬儀の時、驚いた。

彼は独身のままだった。

ご両親に彼が大切にしていたものを見せてもらった。

それは私が出した葉書。

会えなかったけど、ずっと新年の挨拶と、暑中見舞い、残暑見舞いと出していた。

彼はそれを全部年代順にファイルし、保管していた。

一度も返事をもらえなかったので、何度もやめようと思った。

迷惑なのかな、とも思った。

でも、そうじゃなかった。

それがわかって嬉しかった。

私の初恋はこうして終わった。

鏡の中から

私は「泣き虫」とあだ名される涙大量生産の中学生の女子。

また今日も学校で嫌な事があって泣いてしまい、家に帰っていつもの「儀式」をした。

「儀式」と言ってもそんな大それた事ではない。

部屋にある姿見に写る私に愚痴を言うだけだ。

この鏡はおばあちゃんが使っていたもので、お父さんがお母さんと結婚して今の家を建てた時、おばあちゃんから譲ってもらったものだ。

古いものだが、私は小さい頃からこの鏡が好きで、中学生になった時にお母さんにねだって自分の部屋に移してもらったのだ。

私はいつものように鏡の中の私に話しかけた。

「また泣いちゃった。こんな私をどう思う？」

鏡の中の私が答えてくれるわけではない。

それでも私は言いたい事を言うと、姿見にカバーをかけて、部屋を出ようとした。

その時だった。

「もっつんざり」

私はその声にびっくりして振り返った。

誰もいない。

「気のせい？」

私はドアノブに手をかけた。

「気のせいじゃないよ。いつもあんたに下らない愚痴を聞かされてうんざりって言ったのよ」

「！」

私はまさかと思ったが、姿見の前に戻り、カバーを外した。

そこには、ムスツとした顔の「私」がいた。

「ええええ！？」

私はパニックになりかけた。

思わず鏡の裏側を覗いた。

誰もいるわけがない。

「何探してんのよ？ 私はここ。この中」

鏡の中の「私」が言った。私はポカーンと口を開いたままで、「

私」を見た。

「あのさ、あんたの愚痴を毎日聞かされる私の身にもなってよ。ホント、冗談じゃないわよ」

「う、ごめん」

私は「私」に謝った。

「それがダメなの。もっと強くなりなさいよ」

「でもさ……」

私は言い訳をしようとした。すると「私」が、

「後ろばかり向いてたら、何かにぶつかって怪我するよ。前を見な
よ」

「うん……」

私のイジイジぶりに「私」は切れたみたいだ。

「あんたは毎日自分の弱さを私に愚痴って来たけど、今日は私が愚痴るわよ」

「はい……」

私は思わず頷いてしまった。

「私にあんたの虚像だけど、あんたの相談役じゃない。あんたは自

由にどこにでも行けるけど、私はこの中であんたが来るまでジッと
してるだけ」

「……」

私は泣きそうになったが、何とかこらえた。

「1日だけでいいから、私と交代してくれない？」

私はギクツとした。「私」はニヤリとして、

「もう決めた。交代しよう」

「え？」

鏡の中から「私」の手が伸びて来た。その手が私の右腕を掴んだ。

「さあ！ 交代してよ！」

「！！！」

私は声もなかった。でも必死に抵抗した。

「交代してよ、1日だけでいいんだから！」

私は遂に声を上げた。

「嫌よ！ 私は交代なんかしたくない！」

途端に「私」の手は離れ、鏡の中に戻った。

「それでいい。あんたに必要なのは、自分の気持ちを声に出すこと。泣いているだけじゃ、何も変わらないんだよ」

鏡の中の私は、ニツコリ微笑んで言ってくれた。

「ありがとう……」

私は泣いてしまった。また怒られると思って、ハツとして「私」を見た。

「そういう涙はいいんだよ。でも、言い訳のために泣くのはもうおしまいでしょうよ」

「うん」

私は涙を拭ってもう一度「私」を見た。

でもそこにいたのは私だった。

行っちゃった？　ありがとう、「私」。

またいつか助けてね。

そう思いながらカバーをかけ、ドアに近づいた。

「助けるのは今日だけ。これからは自分で何とかしな」

「私」の声がした。

「
うん！」

強くなれそうな気がする。

私はお母さんが呼ぶ声に答え、部屋を出た。

医者はどこだ？

その町で一番の大金持ちの男は、焦っていた。

「医者だ！　どんな重症患者でも絶対に助けられるという医者だ！」

彼は野獣のような風貌で、まるで雄叫びを上げるかのように怒鳴り散らしていた。

「只今国中を探しております。もうしばらくお待ち下さい」

執事が丁重に頭を下げて答えた。しかし男は納まらない。

「国中だと？　ダメだ！　ダメだ！　ダメだ！　世界中を探せ！　何としても見つけ出すんだ！」

「はい」

執事や他の使用人達は、男の剣幕に圧倒され、言われるがままだった。

彼は金を惜しまず使い、世界中に人を送り、医者を探させた。

何百人という人間が動き、使われた金は数十億に達した。

周囲の人々は、彼の精神が破綻したのではないかと心配したほどだ。

そして一週間後、捜索チームは、絶対にどんな瀕死の重傷患者でも助けられるという医者を見つけ出した。

男はすぐにその医者を自分の屋敷に呼び寄せた。

「患者はどこです？」

紳士然としたその若い医者は穏やかな口調で尋ねた。

「死んだよ」

男は何でもないことのような調子で応じた。

「死んだ？ 間に合わなかったのですか？」

医者言葉に男は激怒したようだ。彼は医者を睨みつけた。

「死んだよ。一ヶ月前、旅行先で事故に遭い、絶対助けると言った貴様の手術を受けてな！ だから今日、貴様にその後を追ってもらうのさ！」

5時まで男

「私はある企業の営業課長である。

今年入った新人の中に非常に優秀な男がいたので、即戦力として我が課に引き入れた。

そして私が直接指導し、営業のいろはを教えた。

彼はそれを思った以上に理解してくれた。

10年に1人の逸材だと思った。

しかし、彼には致命的な問題があった。

残業を拒否するのだ。

様々な理由をつけて、定時に退社する。

仕事には支障がないのだが、他の社員の手前、あまり好ましい事ではないので、私は彼に話をする事にした。

使っていない会議室で待っていると、彼は正確に指定した時間に来た。

「何でしょうか？」

彼は真っ直ぐな目で私を見て尋ねた。私は咳払いをしてから、

「君はいつも定時に退社するね。どうしてなのかな？」

「仕事は全て滞りなく終わらせています。何も問題はないと思いますか？」

予想通りの返答だ。確かにその通りだ。しかし私は、

「君は同僚との夜の付き合いを一切していないそうだね？」

「はい。それも仕事には支障ありません。普段は問題なくやり取りしております」

「……」

要するに仕事さえキチンとこなしていれば、後は関係ないという主義か。

最近そついう人間が増えているらしいが、私はそうは思わない。

「人付き合いが苦手なのかな？」

「いえ、そのような事はありません。休日の集まりには参加しています」

確かに彼は日曜のレクリエーションやスポーツには参加している。

「残業が嫌なのかな？ 遅くなるのが困るのか？」

私は何故この男がそこまで早く帰りたいがるのか不思議だった。

私はむしろ、居場所がない我が家には寝に帰るだけで十分だと思
っているくらいだ。

彼は両親と同居でまだ独身。

家に早く帰りたい理由は何か、興味が湧いた。

「はい。遅くなるのが困るのです。夏は多少の残業はできますが、
秋から冬にかけては、定時前に退社させていただきたいのです」

「え？」

私は呆氣に取られた。

何を言っているんだ、この男は？

逸材と思った私が愚かだったようだ。

こいつは自己中心的な人間なのだ。

説得は無理だ。

惜しい気がするが、そこまで甘い考えだと、この先何か問題を起
こしかねない。

「そのような考えでは、この先難しいな」

「そうかも知れません。しかし、私が残業すると、皆さんに多大な
ご迷惑をおかけすることになります」

「どういう意味かね？」

こいつ、実は頭がおかしいのか？ そう思い始めた時だった。

彼はおもむろに両手で頭髮をつかむと、それを引き剥がした。

「何だ？」

私はその行為に啞然とした。

「む？」

私は彼の頭部にあるべき頭皮の代わりに、黒いパネルのようなものがあるのに気づいた。

「私は実は太陽光で動く人間なのです。ですから夕方や夜は活動できないのです」

私はその「言い訳」に激怒した。

「ふざけるな！ 言うに事かいて、何だ、その言い草は！？ 今日は何が何でも残業してもらうからな！」

私は彼を強制的に残らせる事にした。

そして、午後6時。

本当に動かなくなった彼を見て、呆然としている私がいた。

渴き

……！

あまりにも強烈な喉の渴きに、目が覚めた。

何だ？

別にそれほど蒸し暑かった訳ではない。

汗も特別かいた訳でもない。

しかし、一刻も早く水分を補給しないと枯れてしまいそうなほど辛かった。

俺はベッドから飛び出し、キッチンに走った。

「フーッ」

冷蔵庫にあったスポーツドリンクを飲み、渴きは収まった。

まだ明け方の四時だ。

もう一度ベッドに横になり、眠ろうとした。

えっ？

そんな。

もう堪え切れない渴きが襲って来ている。

一体どうしたんだ？

もう一度冷蔵庫に行き、今度は炭酸飲料を口にした。

「うっ」

炭酸が喉に染みる。痛いくらいに痺れた。

「何なんだよ」

俺は少しイライラしながら、再びベッドに近づく。

「……」

また堪え難い渴き。

もしかして奇病に罹ったのか？

眠れなくなった。

いろいろ考えてみるが、何も思い当たらない。

糖尿病は喉が渴くと聞いた事がある。

しかし、それにしても度が過ぎている。

ベッドに戻るまでに堪えられなくなる渴きつて、一体何だ？

俺は出勤時間の七時になるまで、水分を補給し続けた。

キッチンは空の缶とペットボトルが散乱し、酷い状態だった。

俺は会社を休もうと思ったが、現在進行中の企画は、俺が責任者なのでそんな簡単に休む訳にもいかない。

俺は水筒に麦茶を入れ、出かけた。

駅までわずか十分のアパートに住んでいるのに、改札を通るまでに水筒は空になり、駅の売店でレジ袋一杯にスポーツ飲料を買い込んだ。

電車の中でも、周囲の乗客が離れてしまう程、俺は飲み続けた。

あれほど買い込んだスポーツ飲料が、下車駅に到着するまで保たなかった。

俺は再び駅の売店で大量に買い込んだ。

会社でも止まらなかった。

いや、止められなかった。

渴きは朝より酷くなり、飲まないでいると喉が焼かれたようになる。

同僚や上司にまで心配された。

皆口々に医者に行った方がいいと言い始めた。

しかし俺は作り笑顔で、

「大丈夫です」

と応え、企画会議を始めた。

この企画は我が社の社運を左右するような大きな仕事になる。

砂漠に緑を。

大きな貯水池を。

俺の長年の夢でもある。

！！！！

その時、俺はとんでもない事に気づいた。

ああ、何て事だ。

そして少しホッとした。

そういう事か。

原因がわかると、喉の渇きも堪えられるようになった。

そしてその日は、上司の指示に従い、定時に退社した。

そしてどこにも立ち寄らず、アパートに戻った。

「そうだよな、怒るよな」

俺は蛇口をひねってコップに水を入れ、テレビに近づいた。

「ごめんな、俺が悪かったよ」

テレビの上の枯れかかった観葉植物に水をやりながら、俺は詫びた。

喉の渇きは収まった。

しかし、ホッとする間もなく、次に俺は強烈な腹の痛みに襲われ

た。

同棲

ああ。

信じられない。

ずっと夢だった。

叶えたいと思っていた。

でも到底叶わないとも思った。

それが信じられない事に叶ってしまった。

子供の頃から憧れていた同棲。

その何となく後ろめたくて、それでいて眩しいような言葉。

ずっとずっと好きだった高校時代の同級生。

その彼に偶然街で出会った。

彼も私の事を覚えていてくれて、嬉しさのあまり、

「一緒にお食事でも」

と思い切って誘ってみた。

彼は快諾してくれた。

私は有頂天になった。

デートでも何でも無い。

只単に昔の同級生に久しぶりに会ったから、というだけ。

彼の心の中は、その程度だと思う。

いや、そうだ。

きつとそうだ。

それでも良かった。

幸せだった。信じられなかった。

夢なら冷めないで、と思った。

でも夢じゃなかった。

「楽しかったよ」

別れ際にそう言われた。

失神するかと思った。

それくらい私の心は高揚した。

そして今、更に信じられない事に私はその彼と同棲している。

私の狭いアパートに二人。

もう何もかもが輝いて見えるくらい嬉しい日々。

でも一つ困った事がある。

彼自身。

同棲を始めて一ヶ月。

そろそろ何とかしないと。

強力な防臭剤、どこかで見つけて来ないとね。

じゃ、仕事行って来るね、ダーリン。

当選確実

選挙期間二週間。

全力で戦い抜いた。足が棒になるまで歩いた。

多くの有権者達に声をかけ、握手して回った。

厳しい戦いだった。土砂降りどころか、集中豪雨のような状態。

逆風が吹きつける中、休む事なく走り抜けた。

当選確実が見えて来た。もう一息か？

しかしまだ気を緩めるわけにはいかない。

これからが正念場だ。

今まで何回も味わった事がある。

「当選確実です」

選挙速報でたびたび耳にした。

しかし、土壇場で逆転、当選しなかった。

そんな事が想定されるから、例えテレビの速報で「当確」が打たれても安心は出来ないのだ。

やがて選挙活動は終了した。

後は本当に天命を待つばかりである。私に出来る事は全てやり尽くした。

私は、共に戦って来た後援者達と食い入るように選挙速報を見た。

次々に他の選挙区で当確者が発表される。

遂に私の選挙区の速報が入った。

私達は固唾を吞んで見守る。

「G県第四区の当確が出ました」

テレビのキャスターが告げた。

私はギクツとして両手を握りしめた。

当確を出したのは、相手候補だった。

私は天を仰いだ。

涙が流れた。

心の底から、こみ上げて来るこの感情。

押さえる事が出来ず、叫んだ。

「やったぞ！ やった！」

選挙事務所に木霊する万歳の声。

喜びを分かち合い、握手を交わす後援者達。

私は感動のあまり、何も言えずにお辞儀をし続けた。

そんな中、ニュースキャスターが告げた。

「以上で第二十回人柱選挙の当確者速報を終了致します」

臨死体験

俺はスクープ専門のフリーライター。

と言うと聞こえがいいが、本当はフリーター同然のしがない物書きだ。

全く仕事がない。

あらゆるツテを頼って探したが、何もオコボレを頂戴できなかった。

食つに困り、飲食店のゴミ箱を漁る日もあった。

コンビニの裏口で、店長に廃棄処分する弁当を譲り受けたりもした。

生きている意味があるのか？

そこまで思いつめた事もある。

しかし、死ぬ「勇氣」がない俺は、何も出来ないまま、おめおめと生きていた。

そんなある日、いつものように公園の滑り台の下で寝ていると、

「起きろ」

と肩を揺すられた。

「うん？」

目を擦りながら起き上がると、以前何度かレポを掲載してもらった雑誌の編集者が目に入った。

「ああ、よくここがわかりましたね」

俺は編集者を見上げた。編集者は呆れ顔で、

「有名だよ、あんた。ホームレスライターだって。ここのネグラも、業界じゃ知れ渡ってるさ」

俺は苦笑いをした。

「で、何ですか？ まさか俺を笑いに来るほど暇ではないですよね」

「もちろん。仕事の依頼に来たんだ」

「仕事？」

話を聞いてみた。

どうやら仕事は「臨死体験」らしい。

臨死体験をした人達を取材するのかと思ったら、

「そういう仕事なら、他の奴でも出来る。でも、この仕事はあんたじゃないと出来ないんだ」

「俺じゃないと?」

俺限定? 妙な話だな。俺は眉をひそめて編集者を見た。

「そう。何しろ、臨死体験してもらうのだからな」

「えええええ!？」

この頃すっかり達観して、物事に動じなくなった俺もさすがに仰天した。

「死ぬんですか?」

「いやいや、死ぬんじゃないよ。そんな仕事ないって。あくまで臨死体験だ。死後の世界をちょっとだけ覗いてくるという仕事だよ」

言葉で言いくるめようとしているようだが、冷静に考えれば「死ぬ体験」ではないか。

「俺じゃないと出来ない仕事っていうのが、ちょっと引っかかりますね」

俺はムスツとして言った。すると編集者は悪びれもせず、

「別にいいんだよ、やりたくないのなら。こんな企画、ボツにすればすむことだからさ」

と開き直った。

「そう言われると弱いなあ。やります、やらせて下さい」

「そう。悪いね」

俺は編集者の狡猾な笑みに、「嵌められた」と思った。

しかし、取材は拍子抜けするものだった。

山奥の修験者もどきのジイさんが、臨死体験をさせてくれるというものだったが、見事に失敗。

と言うより、嘘つきジイだったのだ。

俺達取材班は散々な思いで山を降りた。

結果として俺はそれなりの報酬は得たが、釈然としなかった。

そしてまたホームレスな暮らしに戻った。

いつものようにコンビニに行き、廃棄処分の弁当をもらい、小料理屋の板前から料理の残りを分けてもらった。

わずかに残った酒をチビチビ飲みながら、寂しい夕食を頂いた。

しばらくして、俺は胃袋を鷲掴みされたかのような激痛を味わった。

「グウウ」

俺は地面をのた打ち回った。

やがて意識が遠のいた。

気がつくと俺は花畑の中にいた。

大きな川の向こうでは、奇麗な女性達が追いかけてっことをしていた。

この光景は？

臨死体験？

今更遅いぞ。

いや、そうだ。

これをレポートして雑誌社に持ち込めば、金になる。

俺は女性達に取材しようと川にかかる大きな吊り橋を渡った。

「あの、ちょっといいですか？」

女性達はニコニコしながら、俺に近づいて来た。

よし、これで記事になる。そう思った時だった。

「あれ、あれあれ？」

俺の身体は勝手に後ろに動き出し、女性達から離れてしまった。

「はっ！」

目を開けると、そこは病院の手術室だった。

「良かった、蘇生したぞ」

そこにいた医師と看護師達が喜ぶ中、俺は、

「何で助けたんだよ！？ 臨死体験中だったんだぞ！」

と叫んだ。

俺はその後脳の検査もされてしまった。

返したくない

僕は只今恋愛真っ只中。

会社の同僚の女の子と付き合っている。

彼女は可愛くて、気が利き、仕事もできる。

誰もが羨むカップルだ。

もちろん、やっかみや妬みもある。

それを全て2人の愛で乗り越えて来た。

将来を誓い合った。一生一緒にいようと思った。

お互いの親にも会った。皆祝福してくれた。

もうすぐ結婚する事になる。

そう思っていた。

しかし、それは僕の独りよがりだったことがわかった。

ほんのちょっとしたことで、僕らは怒鳴り合ってしまったのだ。

僕のアパートでの出来事だ。

夕食の準備をしていた時、それは始まってしまった。

「返したくない」

僕は強硬に主張した。

しかし彼女も譲らない。

「ダメよ。今すぐ返して。でないと私、もう貴方とは付き合えないわ」

「そんな大袈裟な。それ程の事なのかよ」

「ええ、それ程の事よ、私にとってはね。お金持ちの貴方にはわからないでしょうけど」

何だ、この女は。案外我が儘な女だったんだな。

僕は彼女に幻滅した。だから引き下がらなかった。

「絶対に返さない。誰が返すものか」

「絶対に返さないですって？ 何て恥知らずな。貴方がそんな傲慢な人だとは思わなかったわ」

彼女は涙声で僕を罵った。

「もう別れましょう。ここまで考え方が合わないのでは、この先幸せになれるとは思えない」

「ああ、そうだな」

僕は売り言葉に買い言葉で、そう言ってしまった。

彼女はバックを掴むと、部屋から出て行った。

僕はフーツと溜息を吐いて呟いた。

「目玉焼きをひっくり返さないだけで別れ話かよ」

私は鬼部長

私は仕事の鬼。

人生の大半を会社に捧げ、出世より会社のためを何よりも優先させて来た。

そのため、多くの部下に恐れられ、「鬼」に例えられた。

私はそれを褒め言葉と受け止め、誇りに思っていた。

会社に到着した。

受付の女の子が、私を見て真っ青になり、走り去ってしまった。

おいおい、それは大袈裟だぞ。

しかし、心の広い私はそんな事では怒ったりしない。

私が怒るのは、会社のためにならない事をする連中に対してだ。

誰彼構わず怒りをぶつけて来た訳ではない。

エレベーターを待つ。

いつもなら混み合うホールが、今は私だけだ。

到着音がして、目の前の扉が重々しく開いた。

そこには社長と専務がいらっしゃる。

私は脇に退き、頭を深々と下げて、

「おはようございます」

と挨拶した。

しかし、応答はなく、お二人は玄関へと走り去ってしまった。

どういう事だ？

私は何か失礼な事をしてしまったのだろうか？

いろいろ思い返してみたのだが、何も心当たりがない。

エレベーターが五階に着く。

私は扉が開くのを待った。

スーッと開く扉。

その向こうにいる私の部下達。

何故か全員腰を抜かさんばかりに驚き、走り去った。

何事だ？

一体この会社はどうなってしまったのだ？

社員ばかりでなく、社長と専務のご様子のおかしい。

私はこの疑問を解消するため、第一営業部のフロアに急いだ。

「おはよう」

私がフロアに足を踏み入れると、全員が私を見て絶叫し、部屋の反対側に走った。

さすがに我慢強い私も、この意味不明な一連の行動に怒りを感じた。

「何事だ？ 何をしている？ 君達の私に対する態度はどういう理由があるのだ？」

私は怯えている社員を見渡し、第一営業課長の茂森の顔を見つけ、

「茂森君、説明したまえ」

と命じた。そう、まさに命じたのだ。

すると茂森はガタガタと震えながら、

「ぶ、部長は昨晚、クモ膜下出血でお亡くなりになったはずでは…

…」

えっ？

記憶がフラッシュバックする。

ああ、そう言えば……。

私はすでに自分が死んでいた事を思い出した。

そして、社員達を見渡し、

「いや、私が悪かった。そうか、昨日病院で死んだのだな、私は。すまなかった、驚かせて」

と告げると、その場に倒れた。

死んでしまったのを忘れる程、私は会社を愛していたのである。

木霊小僧

皆さんは「木霊小僧」という妖怪をご存じでしょうか？

あまり知られていないマイナーな妖怪なので、知らない方が多いと思います。

ここで一つ、木霊小僧のお話を致しましょう。

あるところに木こりの男が住んでいました。

男は木こりの仕事が嫌で、いつか辞めたいと思っていました。

しかし、辞めたところで他に出来る事もなく、男は悩んでいました。

「畜生！ どうすりゃいいんだよ！？」

彼は森の中で大声で叫びました。

「畜生！ どうすりゃいいんだよ！？」

「？」

木霊が聞こえました。

でも妙です。声が幼くなっています。

「誰だ、お前は？」

男が叫びました。すると、

「誰だ、お前は？」

とまた子供っぽい声が応じました。

「妖怪だな、お前？」

男が尋ねると、

「妖怪だな、お前？」

とまだトボケています。男はニヤリとして、

「隣の客はよく柿食う客だ」

と早口言葉を言いました。すると、

「とにやりのかくはよきかくきうかくだ」

と何の事やらわからない木霊が返って来ました。

「言えてないぞ。それでも木霊か？」

男は腹を抱えて笑いました。

「言えてないぞ。それでも木霊か？」

とまたトボケています。男は少々ムカついて、

「武具馬具武具馬具三武具馬具、合わせて武具馬具六武具馬具」

と非常に難しい早口言葉を言いました。

「ぶぎゅばぎゅぶぎゅばぎゅ……」

遂に木霊は途中で言うのを止めてしまいました。

「情けない木霊だな。出直して来い」

男は大声で笑いました。

そしてその夜の事です。

男が山小屋で寝ていると、夢枕に巨大な身体の物の怪と思しき者が現れました。

「僕はこの山の木霊の元締めだ。昼間、貴様にからかわれた木霊小僧が、舌を噛んで仕事ができなくなってしまった。お前にその責めを負ってもらおう」

「何だと？」

男が抵抗する間もなく、木霊の元締めは男の舌を大きなヤットコで引き抜いてしまいました。

「おーっ！」

男はその痛さで目を覚ましました。

夢かと思ったのですが、彼は本当に舌を引き抜かれていて、それ以来何も話せなくなってしまったのです。

木こりの間では、木霊小僧が現れても決してその返しの拙さをからかったり笑ったりしないというのが決まりでした。

でもこの木こりの男は、普段から他の木こりと仲が悪く、年寄りの木こりの忠告も聞かず、勝手気ままに仕事をしていたため、その事を知らなかったのです。

皆さんも、山や森の中で、木霊小僧に木霊を返されても、絶対にからかったりしないで下さい。

もしそんな事したら、どうなるかわかりませんよ。

同級生

私はある企業のOL。

就職してすでに四半世紀が経つ。

一番良かったのは、バブルの頃だろうか？

毎日男をとつかええひつかえ……。

嘘はいけない。そんな事実はない。

それがあつたのは高校の同級生の優香。

どういう縁か、就職先も一緒になった。

彼女は毎日ポケベルが鳴っていた。

私のポケベルが鳴るのは、緊急の出社の時か、休日の変更の時のみ。

持っている意味あるのか？ 家族と同居なのに。

家の電話でいいじゃん。

でも、それは僻みだったのかも知れない。

優香は入社直後に同僚の恋人ができ、三年後に結婚。

その一年後には第一子出産。

時の経つのは早くて、もうすぐその子が結婚するらしい。

「優香さ、四十代でおばあちゃんかもよ」

そんなことを同窓会で聞いた。

その同窓会も出席するのが嫌だ。

同級生で結婚していない女子は私と由美だけ。

但し、由美はシングルマザー。そこが違う。

私は、聞いた話では「パーフェクトシングル」なのだから。

何だそれは？ 結婚しない事がいけない事なのか！？

「できない」と「しない」は違うよ、と言われた事がある。

その言葉が一番悔しい。

私は結婚できない女ではない。しない女だ。

どこまでも強がりと言う。そう思われても仕方がない。

「お前さ、ブスじゃないのにどうして結婚できないのかな？」

同窓会で無神経なバカ男にそんな事を言われた。「ブスじゃないのに」は褒め言葉なの？

「どうしてだろうねえ。不思議だねえ」

その時は笑っていたが、本当は激怒していた。

それって、「性格が悪い」と言われているようなもんじゃないのよ！

ああ。

こんな発想がいけないのかも知れない。

同窓会はお開きになり、親しい者同士がそれぞれの二次会に繰り出して行った。

私は誰からもお誘いがなく、そのまま帰宅する事にしてタクシーを探した。

「雨宮」

私の苗字を誰かが呼ぶ。振り返ると、高校の時密かに憧れていた八木君が立っていた。

「あ、八木君。二次会には行かないの？」

「ああ。俺、今傷心中でさ」

「え？」

私はその時、八木君が同級生の香と離婚したばかりなのを思い出した。

香は当然同窓会には来ていない。

「でさ、慰めてほしいかな、なんて思ってたんだけど」

「……」

私はどう反応したらいいのかわからず、只立ち尽くしていた。

「頼むよ」

八木君が照れ臭そうに微笑む。私は、

「し、仕方ないな。カラオケでいい？」

「どこでもいいよ」

八木君がごく自然に私の肩に手を回した。ドキッとした。

「行こうか、雨宮」

「うん」

できれば下の名前で呼んで欲しい。

そう思った。

探し物は何ですか？

私はごく普通の主婦。毎日夫と子供達の世話に追われ、自分の事に気を使うゆとりがない。

ある日の事。

私は自転車で近所のスーパーに買い物に出かけた。

いつも道をいつものように進んで行く。

スーパーまであと百メートルくらいまで来た時、私はおばあさんが身を屈めて側溝を覗き込んでいるのに気づいた。

「どうしましたか？」

私は自転車を停めておばあさんに声をかけた。

「はい、ここに落とし物をしてしまいました。見つからないのですよ」

おばあさんは側溝を覗き込んだままで答えた。今にも落っこちてしまいそうなくらいの態勢だ。

「何を落としたんですか？」

「大事なものなんです。あれがないと困るんですよ」

「そうですか。私も一緒に探しますよ」

お節介が服を着て歩いているような性格と夫にいわれる私は、自転車を降りておばあさんに近づいた。

「どの辺に落としたんですか？」

「多分この辺なんですけど。見えないのでよくわからないんです」

「そうなんですか」

私も側溝のそばに膝を着き、中を覗き込んだ。

おばあさんは側溝の水の中に右手を突っ込み、バシャバシャとかき回すようにしている。

そんな方法で見つかるのだろうか？

私は不思議に思いながらも、目を凝らして水面を見た。

それにしても何を落としたんだろう？

「探し物は何ですか？」

私は見当をつけるためにおばあさんに尋ねた。

「すみませんねえ、見ず知らずの方にそこまでしてもらって」

私は側溝に転げ落ちそうになるくらい驚いた。

「目玉を両方落としてしまったんですよ。見えないから見つけられ

なくて」

おばあさんはニッコリ笑って、空洞になった目の部分を私に向けた。

アキハバラ君日記

僕は秋葉原光義。

その苗字から会社の同僚達に「オタク」とあだ名されている事を知っている。

酷い話だ。

確かに僕は、スポーツが苦手で、マンガ好きで、美少女アニメに目がなくてガンブラが好きだけど、決してオタクではない。

何故なら、オタクの聖地である秋葉原には一度も行った事がないからだ。

その話を同僚達にすると、

「それはまずいよ。早く参拝しないと、バチが当たるよ」

などと言われ、からかいのネタにされる。

そんな僕だけど、会社の仕事はキッチリこなしている。

どこからもクレームをつけられた事はない。

どちらかと言うと、優良社員に入るはずだ。

しかし、生来の要領の悪さから、同僚の失態を僕の責任にされてしまう。

前にも、同僚の目黒由利子さんが発注ミスした鋼材の件で、目黒さんは、

「秋葉原君に確認してもらって先方にお送りしたんですけど」

などと平気で言い訳した。僕は課長に呼びつけられ、皆の前で叱責を受けた。

横目で目黒さんを見ると、ニヤニヤしていて、全く悪びれた様子がない。

腹が立ったが、目黒さんは部長の愛人という噂があるので、あまり事を荒立てられない。

僕はストレスが溜まる一方だった。

目黒さんに責任転嫁されたのは、一回だけではない。

そんな事を数えるほど執念深くないし、几帳面でもないのに、正確には何回かわからないが、片手では足りないくらいのはずだ。

お詫びにデートくらいしてくれてもいいと思う。

そう。

僕は目黒さんが好きなのだ。

彼女に言えないのは、それが最大の理由。

部長の愛人だろうと関係ない。大好きだ。

彼女は性格に問題があるけど、美人で明るいから、そのマイナスを補って余りあるのだ。

バカだと思う。

絶対に実らない恋なのに。

そんなある日。

僕はまた要領の悪さから、一人残業を押し付けられ、会社にいた。

もう十時だ。今日は金曜日なのに、一人でいる。

同僚達は、飲み会だと言っていた。

ああ。何か、涙が出て来た。パソコンの画面が滲んで見えない。

その時だった。

「だあれだ？」

と突然目を覆われた。

「え？」

その声に聞き覚えがあった。何で彼女が？

「目黒さん？」

「せえかあい！」

目黒さんは陽気な声で言った。振り返ると、ほろ酔い顔の目黒さんがいた。

「何よお、アキバ君、何か文句がありそうねエ？」

目黒さんはその可愛らしい唇を尖らせて言った。

「べ、別に文句なんかないよ」

僕は慌てて言った。

「どうしてよ？」

「え？」

突然目黒さんが泣き出した。

ええええ？ 「どうしてよ」は君の方だよ、目黒さん。

「どうしていつも私に何も言わないで、自分だけで怒られてるのよ？」

目黒さんが何を言いたいのか、よくわからない。

「カッコつけるな、アキバア！」

いきなり抱きつかれた。酒乱なのか？

「カッコつけてなんかいないよ。僕が怒られてすむのなら、それでいいから……」

僕は目黒さん突き放して説明した。目黒さんはまだ泣いていた。

「バカ。不器用にも程があるぞ、アキバア！」

「ごめん」

僕は笑って言った。すると目黒さんも釣られて笑った。

「ごめんは私の方。アキバ君、うつん、秋葉原君、今までごめんなさい」

「あ、いや……」

改めてそんな事を言われると照れ臭い。

「でも、何でなの？ どうして私に何も言わないのよ？」

「君が好きだから」

うわ、言っちゃった。目黒さんはビックリした顔で僕を見ている。

これで呆れられてしまうな。そう思った。いや、キモいって言われそうだ。

「そうなんだ。私の片思いじゃなかったんだ……」

今何て言われたの？ 聞き取れなかった。

「私も秋葉原君の事が好きよ」

「……」

僕は頭をハンマーで殴られたかのような衝撃を受けた。

えええ？ 目黒さんが僕の事を好き？

好き？ S U K I ? スキ？ すき？

「良かった。ありがとう、秋葉原君」

そう言うつと、目黒さんはフロアを出て行ってしまった。

僕はその後しばらく茫然としていたため、仕事を片付け終えたのが一時過ぎだった。

そして月曜日。

幾分冷静になった僕は、あの日の出来事は目黒さんが酔っていたからだと結論付けた。

フロアに行くと、目黒さんがいた。

「おはようございます」

普通に挨拶をかわす。

やっぱり彼女、覚えていないようだ。

その方が気が楽でいい。

我ながら思い切った事を言ってしまったと後悔しているのだから。

結局その日一日、目黒さんとは会話をかわさないまま過ごした。

そしてまた僕は一人残業。

同僚達は定時退社。課長が出張なので、皆早く帰ったのだ。

「あーあ」

溜息が出た。何でこんなに要領が悪いんだろう？

その時だった。いきなり目を覆われた。

「だあれだ？」

「え？」

また目黒さんだ。でも、今日は飲み会はないし、まだ七時前だ。

「目黒さん」

「正解！」

振り向くと、目黒さんがいた。やっぱり綺麗な人だ。

あれ、目黒さん、怒ってる？

「何よお、私の事好きって言うてくれたはずなのに、私が現れても全然嬉しそうじゃないのね」

「え？」

覚えてたんだ。うわあ、気まずい。

「さ、どこかで食事しましょ。フレンチがいいな」

目黒さんは僕を強引に机から引き離した。

「ちょ、ちょ！ 片付けるから、待ってよ」

「はい」

妙に素直な返事にドキツとする。

「はい、行きましょ」

僕は仕事を途中で投げ出し、強引なデートに行った。

翌日、主任に怒られるだろうけど、かまわないや。

もしかして、恋？

僕にもそんな事が巡って来たのかと、とても驚いている。

言靈男（前書き）

山羊ノ宮先生のご推薦を賜りました。

言霊男

私はある理由から無口でおとなしい小学生だった。

学校にいじめっ子がいた。

理由はわからないが、そいつは私を執拗に苛めた。

やり方は陰湿。かばんの中を水浸しにしたり、上履きに泥を入れたり。

椅子が隠された事もあった。

先生に言ったが、取り合ってくれない。

私は耐えるしかなかった。

でもそれにも限界が訪れた。

私はそいつが通る道の途中で待ち伏せし、

「お前なんか交通事故に遭ってしまえ！」

とだけ叫ぶと逃げた。

そいつはせせら笑っていた。

翌日、そいつが交通事故で怪我をしたことを学校で知った。

そいつの取り巻き達が一斉に私を見た。

しかし何も言わない。

もし私が「死ね！」と言え、本当にそうなってしまおうと思ったからだ。

そいつらは急に私に媚びるようになった。

私は全然嬉しくなかったが、苛められなくなったのでホッとしていた。

翌日、私の噂がクラス中に広まっていた。

皆の私を見る目が違う。

誰かが喋ったのだ。

私はいじめっ子連中を疑い、睨んだ。しかしそいつらは必死に否定した。

俺達は喋っていないと。

私はそいつらに私の正体をばらすメリットはないと思い、信じて

あげた。

その日の下校時、「真犯人」が現れた。

同じクラスの無口の奴だった。今まで一度も話したことがない。

「お前、言霊使いだな？」

「ことだまつかい？」

私は初めて聞く言葉に驚き、そいつを見た。そいつは私を見てニヤツとし、

「俺もそうなんだよ。言葉に念を込めて放つと、それが現実になる。お前も俺と同類、仲間だ」

「・・・」

私はそいつを相手にするつもりがなかったので、無視して歩き始めた。

「おい、俺と組まないか？ この力をうまく使えば、思い通りだぜ。欲しいものも、好きな女も全部自分のものだ」

「何言ってるの、わけわからないよ」

私はそれでも無視して歩き続けた。

「待てよ！ 俺を誰だと思ってるんだ。成りはガキだが、言霊使いの中では最上級の力を持っているんだぞ」

「関係ないよ」

「貴様！」

そいつは激怒して私を追いかけて来た。そして、

「俺の奴隷になれ！」

と叫んだ。私は振り向かずに、

「全部お前に還る」

とだけ言った。

「え？」

奴の放った言霊は奴に帰り、奴は私の奴隷になった。

私はそれ以降その力を封印し、二度と使うまいと心に誓った。

しかし、その誓いが揺らいでいる。

今日の前にいる男のせいだ。

「またお前か！？ 何度同じミスを仕出かすんだよ！ どうしてお

前みたいな間抜けが、わが社に入社できたのか、不思議で仕方がないな！」

私はこの怒鳴る事しかできない「クズ」をどう「処理」するか考えていた。

最強の魔術師（前書き）

戦わずして勝つのが最強です。

最強の魔術師

いつの時代なのか定かではない頃の話。

天使も悪魔も敵わない程の魔術師がいたという。

彼の名は……不明。

知る者がいないのだ。

実在の人物なのかも怪しかった。

しかし彼の事は語り伝えられていた。

最強の魔術師として。

しかしそれ程有名なのに何故名前が知られていないのか？

彼自身が名乗らなかつたのだとか、名前を言っただけで呪いがかかり、死んでしまうからだと言々な噂があつた。

ある男がその魔術師がいるとされる秘境の森に挑んだ。

彼は高名な神官である。

事の真偽を確かめよと彼の主である国王から命じられたのだ。

「多分私は生きて帰れないだろう」

彼はたくさんいる弟子達と別れの盃を交わし、森に向かった。

その森はいくら歩いても先に進んだ感じがしなかった。

「これも奴の術なのか？」

神官がそう思った時、目の前に小柄な老人が現れた。

「？」

彼はその老人が魔術師だと思い、

「貴方が噂の魔術師か？」

と尋ねた。老人はフツと笑い、

「いかにも。何の用かな？」

「貴方が本当に存在するのか確かめに参った。その力の片鱗を見せて欲しい」

「すでに見せている」

老人は右手に持った杖を掲げて言った。神官は訳がわからない。

「何をおっしゃる？ 何も見せてもらってはいない」

「この森がわしの術そのもの。実際には存在せぬ」

「！」

神官はギョツとした。

「まさか……」

「世迷い言と思うなら近くの木に触れてみよ」

老人は強い調子で言い放った。神官はすぐ近くの木に触れた。

「グオツ！」

その瞬間、彼は雷に撃たれたかのように痙攣し、その場に倒れた。

「若輩者よ。何故わしの言葉に従うのか。愚かと言うよりないな」

老人は神官を見下ろして呟いた。

「命までは取らぬ。しかし、わしと出会った事は忘れてもらう。そしてお主の力も頂く」

「成程。そういう事か」

「何！？」

老人は神官の声が背後から聞こえたので仰天した。

「私も一国を支える神官だ。そう易々とやられはしない」

「く……」

倒れた神官は変わり身だった。老人はゆっくりと神官の方を向いた。

「貴方はどうやら我が王国にとって危険極まりない存在のようだ。その魔力、その思考。何一つとして相容れられるものはなし」

神官は眉を吊り上げ、怒りを露にして怒鳴った。

「ならばどうする？」

老人は不敵な笑みを口元に浮かべて尋ねた。神官は老人に近づきながら、

「知れた事。我が最高神の秘術にて消えてもらう」

「わしは天使も悪魔も恐れる存在ぞ。おぬし程度の力で勝てると思うか？」

「ほざけ！」

神官は右手で彼の守護神の印を結んだ。

「我が神の力受けるがいい！」

神官の気合と共に無数の光の矢が放たれ、老人に向かった。

「うおおっ！！」

老人は光の矢をまともに食らい、焼失した。

「呆気ない……。妙な……？」

神官はあまりに簡単に勝敗が決した事を疑った。

「わしの耳垢から生まれしわしの分身を葬るとは、なかなかの術者よ」

「む？」

上空から声がした。

「ぬお！」

神官は眩い光に包まれ、意識を失ってしまった。

「はっ！」

神官は不意に意識を取り戻した。何故か彼は王国の自分の屋敷にいた。彼は森へ出かけるために身支度をしている途中だった。

「まさか……」

彼は身震いした。

「私は出かけてもいなかったというのか……。あれは全て魔術師の為せる業だというのか？」

神官は出立を取りやめ、王城に出向いた。

彼は国王の怒りを買うのも恐れず進言した。噂の魔術師は噂通りであり、手出ししてはいけないと。

神官の予想通り、国王は激怒し、彼を追放した。

やがて別の神官が森に出向く事になった。しかし同じ事だった。誰一人として森に行けた者はいない。

だから魔術師の存在は知っていても彼の名を知らないのである。

その魔術師はその後も永くその強大な力を語り継がれたという。

悪魔の報酬（前書き）

ホラー連作のきっかけとなった作品です。

悪魔の報酬

ヒロシはその日、全くついていなかった。

今日は日曜日だという夢を見て、すっかり寝過ごしてしまった。

みそ汁で御飯をかき込むようにして飲み込み、靴下も片方しか履かずに家を飛び出した。

学校までわずか5分であるが、車の通りの激しい道路が通学の途中にあるので、信号が青になるのを惜しむようにしてヒロシは道路を横断した。

当然彼は右から来たトラックに轢かれそうになり、運転手に怒鳴られた。

学校に着いてみると、始業ベルはとうの昔に鳴り終わっており、彼はホームルームの真っ只中に教室に辿り着いた。

彼は先生に怒られ、友達には片足が裸足なのを笑われた。その上、カバンの中身は金曜日の時間割のものしか入っておらず、英語の時間、彼は教科書を家に取りに行かされた。

家に帰ったヒロシは母親に忘れ物をした事を叱られた。彼は舌打ちしながら学校に戻った。

そしてお昼休み。

ヒロシは弁当箱が入っていない事に気づき、購買で何か買おうと思ったが、金も持っていないかった。彼は親友のマサオに金を借りてパンを2個と牛乳を買ったが、途中で階段から転げ落ち、パンはグチャグチャ、牛乳はパックが潰れて中身が全部流れ出てしまった。

下校時。

ヒロシはマサオと話しながら帰路についていた。

「全く、今日は朝からずっとロクな事がないぜ」

「ホントだな。お前、一体どうしたっていうんだろぅな」

マサオは同情するような口ぶりだが、顔は笑っていた。ヒロシはムツとして、

「他人事だと思って笑いやがって。これでもう、俺、完全に期末試験ガタガタだよ」

「まアそう落ち込むなよ。お前の事だ、明日になればきれいさっぱり忘れてるって」

ヒロシはしばらく俯いて黙っていたが、

「ダメだよ。忘れられそうにないよ。ドジは毎度の事だから慣れっただけだ、あの子にまで笑われちゃったもんなア・・・」

「あの子って、菅原美樹子か？」

「ああ。もう俺、立ち直れないよ」

菅原美樹子とは、ヒロシのクラスのマドンナ的存在で、ヒロシの憧れの女性である。

「そうだな。でもあの女も冷たいよな。声こそ小さかったけど、随分いつまでも笑ってたぜ」

「ええっ！？ ホントかよ？」

ヒロシは悲痛そうな目でマサオを見た。マサオは頷いて、

「ホントさ。嘘ついてどうするんだよ」

「ああ・・・俺、何だか何もする気がなくなって来た・・・」

「どうしても立ち直れないか？」

「ああ。今日という日に取り戻せない限りはね」

ヒロシのその言葉にマサオはニヤリとした。そして、

「今日という日を取り戻せるとしたらどうする？」

と尋ねた。ヒロシは仰天してマサオを見た。

「できるのか、そんな事が？」

「ああ、できるとも。合わせ鏡って知ってるか？」

「合わせ鏡？ 何だ、そりゃ？」

2人は立ち止まって道の端に寄った。マサオは辺りを窺うように見回してから、

「夜中の12時きっかりに合わせ鏡をすると、魔界と人間界が繋が

って悪魔が現れるんだ」

と囁くように言った。ヒロシはまたムツとした。

「何だよ、真剣になつて聞いたら、そんな事かよ」

「まア怒るなよ。気晴らしだと思つてもう少し聞けよ」

マサオは笑いながら言った。ヒロシはそれでもムツとしたままだ。マサオは構わず話を続けた。

「それでな、悪魔が現れたら、願い事を言っんだ」

「フーン」

ヒロシは半ば呆れ顔で聞いていた。

「でも悪魔は必ず報酬を要求する。命とか、若さとかな」

「ああ」

「その代わり報酬を約束すれば、悪魔は必ず願いを叶えてくれる。下手な神社より効果があるぞ」

「うーん」

ヒロシはすでに藁にも縋る思いになっていた。嘘でもいいから試してみようと考え始めていた。するとマサオは大笑いして、

「おいおい、そんなに本気になるなよ。悪魔なんている訳ないだろ？ さ、帰ろっぜ」

「あ、ああ・・・」

2人はまた歩き出した。

ヒロシは家に帰ると只今も言わずに二階の自分の部屋に行き、マサオの言った合わせ鏡の事を考えた。

（ホントに悪魔がいるのなら、今日という日に取り戻せるのになア）

彼はボンヤリと窓の外を見た。

やがて夕食もすみ、ヒロシは部屋に戻って宿題に取りかかった。しかし、合わせ鏡の事がどうしても頭から離れない。

（畜生、俺は一体何を考えてるんだ？ 悪魔なんている訳がない

つていうのに・・・」

しかし、ヒロシは悪魔の存在を否定する自分と肯定する自分がいるのに気づき、訳が分からなくなっていた。

「迷うくらいならやってみた方がすつきりするか・・・」

彼はそう結論を出して合わせ鏡を試みる事にした。

そついう決断をしてから、12時までは長く感じられた。

「・・・」

彼は母親の化粧台から持ち出した2枚の手鏡を見た。

時計の秒針が刻む時。ヒロシは思わず唾を呑んだ。

「今だ」

彼は12時ジャストに鏡を顔の前と後ろに手鏡を持って来た。

ヒロシは何故か腋の下や手の平にジツトリと汗をかいていた。

「？」

鏡の中に自分の顔の連続が見えた。

秒針の音が部屋に響いた。何も起こった様子はなかった。

「バカだな、俺・・・。そんな事ある訳ないのにな」

「何がある訳ないのかね？」

誰かがヒロシの後ろで言った。ヒロシは背筋に悪寒が走った。それくらいその声は不気味な響きを持っていた。

「だ、誰だ！？」

ヒロシは恐怖に震えながらも振り向いた。

そこには天井に届くくらい大きな男が立っていた。

男の身体は黒いマントで覆われており、顔は蒼白く、口は耳元まで裂け、目は鋭く吊り上がり、鼻は鷲の嘴のように尖っていた。

「ま、まさか・・・」

ヒロシはやつと声に出した。男は右膝を着いてヒロシに顔を近づけ、

「誰だとはご挨拶だな。たった今お前が私を呼んだのだろう？」

ヒロシはギョツとした。

「じゃ、じゃあ、悪魔なのか、あんた？」

「そのとおりだ」

男はニヤリとして立ち上がった。ヒロシは男を見上げて、

「で、でも角がない……。尻尾もない……。」

「それは人間が考え出した悪魔だよ。本物はそんな姿はしていない」
男の声はまたヒロシを身震いさせるような響きだった。悪魔はフツと笑い、

「で、私を呼んだのは何のためだ？」

「願い事を聞いてもらうためだ」

ヒロシは絞り出すようにして言った。悪魔は厳しい表情で、

「良からう。言ってみるがいい」

ヒロシは生唾を呑み込んで、

「今日を取り戻したい。今日をやり直したいんだ」

「そうか。正確にはもう昨日だな。いいだろう。但し、条件がある」

悪魔がそう言くと、ヒロシは慌てて、

「わかってるよ。報酬だろう？ もちろん、報酬は払うさ。でも、

命と若さはダメだ。他の何かにして欲しいんだ」

悪魔は暫くヒロシをジツと見ていたが、ニヤリとして、

「わかった。命と若さ以外のもの、だな？」

「そうだよ」

ヒロシは悪魔に拒否されると思ったが、そうならないようなのでホッとしていた。

「よし、報酬はそれでいい。さア、もう眠れ。目覚めたらまた昨日の朝になっている」

悪魔はそう言うつと姿を消した。ヒロシは呆然としたままベッドに入り、そのまま眠りに落ちた。

ヒロシは母親が階段を駆け上がって来る音で目を覚ました。

「ヒロシ、いつまで寝てるんだい？ 日曜は昨日だったんだよ！早く起きな！」

部屋のドアの向こうから大声が聞こえた。ヒロシは喜びに沸いて飛び起きた。

（ やったぞ！ あれは夢じゃなかったんだ！ 俺はまた月曜にいるんだ！ ）

彼は急いで着替えをすませ、朝食も食べ、弁当も持って余裕をもつて出かけた。

（ へへへ。全てがうまくいってるぞ。良かった。これであの子にも笑われないですむ ）

彼は得々として学校へ向かった。

遅刻をしなかったので先生には怒られなかったし、靴下を履いていたので友達にも笑われる事はなかった。

（ そうだ。時間割は会わせて来なかったな。英語の教科書は隣のクラスの奴に借りるか ）

こうしてヒロシはやり直した「今日」を無難に過ごし、大恥をかかずにすんだ。

そして帰り道。やはりヒロシはマサオと一緒にだった。

「今日はついてたなア。英語の教科書を忘れたのを思い出して、すぐに借りに行つてうまく切り抜けたし、あの子とも話ができたし・・

・

「あの子って、菅原美樹子か？」

「ああ」

ヒロシはニコニコしながら応えた。マサオは鼻で笑って、

「そんなに嬉しいのかよ、あんな女と話を出来た事がさ」

「何だよ、その言い方は？ お前はあの子の事、嫌いなのか？」

「別に取り立てて好きって訳じゃないな」

マサオはすました顔で言った。ヒロシはその時、

（ こいつが教えてくれたんだっけ。礼を言わないとな ）
と思い出し、

「お前のおかげでうまくいったんだ。感謝してるよ」

「えっ？ 何言ってるの？ 大丈夫か、頭？」

マサオはヘラヘラ笑いながら尋ねた。ヒロシはハツとして、

（そうか、こいつはあの事を知らないマサオなんだ）
と気づき、

「あ、いや、何でもないよ。勘違いしたんだ」

「お前はドジだからなア。今日ドジらなかったのが不思議なくらいだ」

マサオの言葉にヒロシは苦笑いした。

（そうさ。俺にとって「今日」はやり直している「今日」なんだ。ドジってたまるかよ）

そして夜になり、ヒロシは心ウキウキでベッドに入り、眠った。

翌朝・・・のはずだった。ヒロシは母親が階段を駆け上がった来る音で目を覚ました。

「ヒロシ、いつまで寝てるんだい！？ 日曜は昨日だったんだよ！早く起きな！」

ヒロシは驚愕して飛び起きた。

（バカな……。今日はもう火曜のはずだ。火曜だ……。今日は火曜のはずなんだ！）

ヒロシはベッドから出て、階段を駆け下り、母親を捕まえて、

「今日は何曜日？ 火曜日だろ？」

すると母親は呆れて、

「何寝ぼけてるんだい？ 今日はず曜！ しっかり顔洗って目覚ましな」

「そ、そんな……。そんな事って……」

ヒロシは目眩を起こしてその場に倒れてしまった。

「ヒロシ！ ヒロシ！ どうしたんだい？」

叫ぶ母親の顔がいくつにも見え、グルグル回り出した。やがて彼は気を失った。

ヒロシは真つ暗な空間で気がついた。彼は頭を左右に振り、ボンヤリとした眼をこすり、辺りを見回した。しかし見えるのは暗闇だけだった。

「ここは・・・？」

ヒロシがそう呟いた。するとその時、遙か前方から蠟燭の明かりが近づいて来た。光はやがてその持ち主の姿をくつきりと映し出した。それはヒロシが呼び出した悪魔だった。ヒロシは恐怖より先に怒りが湧き、悪魔を睨みつけて、

「酷いじゃないか！　また月曜日だなんて・・・。やり直しの今日は1日だけでいいんだ。早く何とかしてくれ」

と言い放った。すると悪魔はニヤリとして、
「私はお前の提示した報酬を貰っただけだ。その結果、こういう事になったのだ」

「何だつて？　一体どういう事なんだよ？」

ヒロシには何が何だかさっぱりわからなかった。悪魔は蠟燭の明かりをヒロシに近づけて、

「お前は、命と若さを奪うなと言った。命も若さも奪ってはいけないのなら、お前を一定の時間内に留めるしかなかるう」

「そ、そんな・・・」

ヒロシは自分が言った事が原因になっていると知って、頭をガンと殴られたような衝撃を受けた。

「私はお前の要求を呑み、報酬をもらった。私とお前との契約はこれで完了した。後はお前がどうするか考えろ」

悪魔はそう言うと、高笑いをして闇の彼方に消えてしまった。

「お、俺は取り返しのつかない事をしてしまったのか・・・？」

ヒロシの耳にまた母親が階段を駆け上がる音が聞こえて来た。そしてヒロシは目を覚ました。彼はベッドの中にいた。

「ヒロシ、いつまで寝てるんだい！？　日曜は昨日だったんだよ！　早く起きな！」

母親の声が聞こえた。ヒロシは布団を被った。

（今日は水曜だ！ 水曜のはずだ！）
それはヒロシの断末魔にも思えた。

峠の首なしライダー（前書き）

バイクが怖い人は読まない方がいいです。

峠の首なしライダー

幽霊が出る。

そういう評判のある峠は多い。

俺は全くそういう存在を信じていない。

後輩は昔から霊の存在を信じており、所謂「心霊スポット」によく出向いていた。

俺もたびたび誘われたのだが、全て断わっていた。

ある日、俺が心霊スポットに行かないのは、怖いからだという噂が立っている事を知った。

その噂は聞き捨てならない。

俺はその不名誉な噂を払拭するために、後輩と二人である峠に行く事を決意した。

その峠があるのは、G県T市。元はH町だったところ。

合併でT市に編入されたのだ。

その峠は昔から有名らしく、多くの目撃談がそれ系の雑誌に掲載されている。

後輩はその体験談を読み、その峠が一番凄いという結論を出し、俺を誘って来た。

「怖がり」という汚名を雪ぐためには、一番凄い心霊スポットに行くのが一番だ。

これで俺が怖くて行かないなどとは二度と言わせない。

出るのは「首なしライダー」らしい。

そのポイントで、携帯で自分を撮影し、制覇した事をメールで送る。

そうすれば、俺の不名誉な噂は消えてなくなる。

そう考えた。

数日後、俺の運転でG県T市に出かけた。

高速を飛ばせば、都心から二時間だ。

それにしても結構山奥だ。ま、峠だから当然なのだが。

俺達が出向いた峠は、H山へ通じている。

全国的に有名な霊山だと言う。俺は全然知らない山だった。

首なしライダーの霊は、地元の走り屋の霊らしい。

H山は、走り屋のメツカでもあり、峠を攻める連中がたくさんいる。

俺には、霊よりもそいつ等の方が鬱陶しい気がした。

やがて俺達は現場に到着した。

「確か、最後のカーブのところですよ。今でも花束が置かれているらしいですよ」

すでに後輩はビビりまくっていた。

「そうか。じゃ、その花束の前で撮るか」

「ええっ！？ マジっすか？ やばいっすよ、それ。それはやめましょうよ」

後輩は泣き出しそうな顔で言った。俺はそんな反応に苦笑して、

「なら、お前は車の中で待ってる。俺一人で写真撮るから」

「は、はい」

後輩は青白い顔で答えた。

俺は車を降り、カーブの端に手向けられた花束の前まで歩いた。

何も起こらない。

やっぱり霊なんていないのさ。

そうだ。どうせなら、写真じゃなくて動画にしよう。その方がいい。

俺は花束の前に立ち、携帯で撮影をした。

「どうだ。何も起こりゃしない。霊なんていないのさ。ざまあ見ろ」

俺は高笑いをしてから、撮影をやめ、車に戻った。

「何て事言っただんですか、先輩。もう俺、知りませんよ」

後輩は既に泣き出していた。俺の発言にすっかりビビったようだ。

「バーカ、何も起こるかよ。気の小さい奴だな」

俺はどう撮れているのか確認するため、動画を再生した。

おお。よく撮れてるじゃないか。

俺はニンマリして見入った。

むっ？

何だ？ 後ろから何か来るぞ。

おかしい。さっきは俺以外誰もいなかったはずだ。

オートバイだ。もの凄いスピードで走って来る。

どういう事だ？

撮影した時、オートバイなんて走っていないかった。

まさか……？

次の瞬間、俺はオートバイのライダーの首がないのを知った。

そして、そのライダーが大きな鎌を振り上げているのも。

ヒュン！

鎌が空気を斬り裂く音がした。

次に、俺の首が斬り飛ばされて転がるのが映った。

「嘘だ！」

それが俺の最後に発した言葉だった。

俺の首は斬り飛ばされ、運転席の足下に転がり落ちた。

そして最後に目にしたのは、首のない俺の胴体だった。

仕事帰り（前書き）

ある人に聞いた実話を元に再構成し、若干脚色しました。
怖がりな方はお読みにならないように。

仕事帰り

俺は今でも忘れない。

生涯で一番の恐怖体験。

何であんなことになったのかと、未だに不思議でならない。

俺はまだ高校生。

大工の親父の手伝いを休みの日にしていた。

親父は後を継いで欲しいらしいのだが、絶対にそれを俺に言わない。

だが酔っ払った時には、お袋には愚痴混じりに話す事があるようだ。

申し訳ないが、俺は手伝いはするが、継ぐつもりはない。

俺は大工ではなく、建築設計士か、宅地建物取引主任者になるつもりだ。

生まれつき、あまり丈夫でない俺は、肉体労働は無理だと思っている。

親父もそれがわかっているから、俺には言わないのだろう。

その日は翌日が雷雨の予報だったので、遠い現場だったが無理をして日没過ぎまで仕事をした。

親父のトラックと一緒に現場に行っている俺は、先に帰る事も出来ず、親父の仕事が終わるのをトラックのそばで待っていた。

夏休み目前だったが、梅雨が明け切っていないためか、まだジトジトした空気で、周囲はまだ暗くはなかった。

「うん？」

俺は何気なく荷台に目を向けた。視界に人影が入った気がした。

「あれ？」

誰かがトラックの荷台で作業してるのか？

俺はそう思い、さして気に留めずに親父を待った。

やがて親父達は雷雨対策を終え、トラックのところに来た。

「待たせたな。帰るか」

「ああ」

俺達は現場を離れ、帰路に着いた。

国道までの林道は1人ではとてもじゃないが通りたくない。

外灯もなく、対向車もまず来ない。

昼間でも鬱蒼と茂った木々のせいで、光があまり射さない。

道は普通車がやっとすれ違えるくらいの幅で、トラック同士だとどちらかが下がって広くなっているところでは何とかやり過ごすしかない。

「相変わらず、ここは嫌な道だなア」

俺が独り言のように言った。すると親父はニヤツとして、

「何だ、お前、怖いのか？」

「ち、違うよ。気味が悪いって事だよ！」

「ハハハ、同じだよ」

「けっ」

俺達はそんなたわいもない事を言い合いながら、林道を進んだ。

「おい」

「えっ？」

親父がルームミラーを見て言った。

「荷台に誰か乗ってないか？」

「まさか」

「いや、確かに誰かいるよ」

親父はそう言つとやつと辿り着いた国道の路肩にトラックを停めた。

「ちょっと見て来てくれ」

「ああ」

俺は、面倒臭いな、と思いながらトラックを降りて、荷台を覗いた。

「誰もいねえよ。見間違いだろ？」

「ホントか？ よく見ろよ。泥棒かも知れねえぞ。陰に隠れていないか？」

「自分で見てみるよ。誰もいねえよ」

俺は苛ついて言い返した。親父は運転席から降りて、荷台に上がった。

「おかしいな。確かにさっき誰かいたんだが。気のせいだったのかな」

親父はどうしても見間違いだと思えたくないらしい。俺は、さっきの仕返しと思い、

「親父こそ、怖いんじゃないの？」

「バカヤロウ」

親父はムツとして運転席に戻った。俺は笑いを噛み殺して助手席に戻った。

トラックは何事もなく家に着いた。

「おい、車入れ替えるぞ」

「ああ」

親父は自分の家の敷地内では、よく俺を運転手として使う。免許がなくても問題ないからだ。

駐車場に止まっている乗用車を出し、トラックをバックで奥に入れる。続いて俺が乗用車をその前にバックで入れる。

それはいつもの作業だった。

「先に行くぞ」

親父はトラックから降り、玄関に歩き出した。

「おう」

俺は乗用車に乗り込みながら返事をした。そして、駐車場に入るために後ろを見た。

その時だった。

「うわああああっ！」

俺は絶叫した。

運転席と助手席の間から、髪の毛の長い女が顔を出していたのだ。

しかもその女は顔と首と肩までしか身体がなかった。

俺は逃げた。

どこをどうやって逃げたのかわからなかったが、気がつくやうと玄関の中でへたり込んでいた。

「どうした？」

洗面所で顔を洗っていた親父が尋ねた。俺はやっと呼吸を整え、

「女、女が車の中……」

「はア？ 何言ってるんだよ？」

「と、とにかく来てくれ」

親父はさっぱりわからないという顔で俺について来た。

しかし、車の中には誰もいなかった。

「何だよ、今度はお前が見間違いか？」

「ち、違うつて！」

見間違いなんかじゃない。あれは紛れもなく女。しかも、絶対生きてる女じゃない！

「取り敢えず、車入れないとな」

親父は固まったように動けなくなっている俺に呆れて、自分で乗用車を駐車場に入れた。

結局、その女はそれきり現れなかった。

俺は自分の視覚に自信がなくなった。

あつ！

確か、現場でも誰か荷台に……。

で、親父が帰り道で荷台に誰かいるって言って……。

違う。

見間違いじゃない。

ついて来たんだ。

やばい。

絶対やばいよ！

俺は夕食の時も後ろが気になり、トイレの時も振り返ってばかりいた。

風呂の時は、頭を洗う時、目を瞑るのが怖くて、シャンプーが目にしみた。

しかし、女は現れなかった。

見間違い？ いや、それはあり得ない。

親父が見たのも多分あの女だ。

俺は恐怖のあまり、頭がおかしくなりそうだった。

1人になるのが怖い。

こんな感覚は、小学生の時以来だ。

深夜、俺は自分の部屋に戻り、布団を敷き、明かりを点けたまま

寝た。

どれほどの時間が過ぎたのだろうか？

俺は何かが近くにいる気配を感じ、反射的に目を開けてしまった。

「！」

枕元に、肩から下がない女がいた。俺は驚愕のあまり、そのまま気を失った。

その事は親にも話せなかった。

絶対に信じてもらえないと思ったからだ。

女はそれから一週間、毎晩出た。

死ぬ程怖かったが、女は只覗いているだけで、何をするわけでもなかった。俺は何とか堪えた。

そしてある夜から、その女は出なくなった。

何故なのかはわからない。

そして何故あの女がついて来てしまったのかもわからない。

皆も気をつけてくれ。

今後ろにその女がいるかも知れないから……。

異能者 道明寺かすみ

道明寺かすみは予知能力を持った異能者である。

彼女の予知能力は「予知夢」として発現される事が多い。

ある朝、彼女は学校で火事が起こった夢を見た。

「はつきりしない。いつ、どれほどの火事が起こるのだろうか?」

かすみは不安に苛まされながら、登校した。

かすみが通っている女子校は、地元では有名なお嬢様学校だ。

通学路にはあちこちの男子校の生徒がうろつき、場合によっては警備員が配置される事もある。

特に隣町には札付きのワルがいる高校があり、かすみ達も何度か「ナンパ」された。

しかし、彼等もかすみの「予知能力」を知っており、彼女の正体を知ると、まるで妖怪にでもあったかのような速さで逃げ出すのだ。

「道明寺かすみと付き合いうと死ぬ」

そんな噂まで立った事がある。

かすみと付き合うと死ぬのではない。

かすみが交際した男子生徒が、偶々不運に見舞われただけなのだ。

但し、かすみがそれを事前に知っていたのは事実であつたが。

「おはよう、かすみ」

「おはよう、あやね」

桜小路あやねは、かすみとは小学校からの同級生で、一番の親友である。

そして、あやねは数少ないかすみの能力を理解してくれている存在でもある。

かすみは朝の予知夢の事をあやねに打ち明けた。

「学校が火事？ それは大変ですわね。何か考えた方が宜しくてよ」

おっとりとした性格のあやねは、のんびりとした口調で意見した。

「そうは思っただけど、いつ、どこで火事が起こるのかわからないの。今日なのか、明日なのかもはっきりしないわ」

「それは難しいですわね。他の人達にも相談なさったら？」

「そうね」

かすみはクラス担任の新堂みずほに相談する事にした。

みずほは日本史の教師で、かすみの能力を知っても、何の偏見もなく彼女に接してくれている。かすみの信頼は絶大なのだ。

かすみは学校に着くなり職員室に行き、みずほを探した。

「先生、新堂先生はどちらですか？」

近くにいた男性教師坂出充に尋ねた。すると、

「新堂先生は今日はお休みだよ。聞いていないのか？」

「えっ？　休み？」

かすみは妙な感覚に襲われた。

みずほは昨日休む話などしていない。

「わかりました。失礼しました」

かすみは職員室を出て、教室に向かった。

（あの先生、何度かみずほ先生を誘っているエロ先生だし。何かある……）

かすみは自分の席に着くと、瞑想した。

彼女は予知能力を自らの意志で発現する時、瞑想を開始する。

「あっ！」

炎の向こうにいるみずほが見えた。

「そういうことなのね」

「どうなさったの？」

あやねが尋ねて来た。

「あやねさん、後で体育館に付き合ってくれない？」

「ええ、宜しくてよ」

あやねは、かすみの突然の申し出にキョトンとしたが、すぐに承諾した。

かすみは3時間目の授業を仮病で抜け出し、付き添いを装ったあやねと共に体育館に向かった。

「どうしてこの時間ですか？」

あやねが不思議そうな顔で尋ねた。

「あいつの空き時間だからよ」

「あいつ？」

「ワケは後で話すわ」

かすみとあやねは、体育館の用具室の前に来た。

「ここですか？」

あやねは嬉しそうに言った。

「ええ。炎の向こうにみずほ先生がいて、そのそばに跳び箱が見えたのよ」

かすみが扉に手をかけた時、中からみずほ先生の叫び声が聞こえた。

「イヤアアアッ！」

「先生！」

かすみとあやねが用具室に入ると、縛られたみずほと、蠟燭と鞭を持った坂出がいた。

「お、お前等……」

突然入って来た2人に、坂出は狼狽えた。

「何をなさっているのですか、坂出先生？」

あやねが普通の調子で言った。その際にかすみはみずほに駆け寄り、縄を解いた。

「何があつたのですか、先生？」

「坂出先生に薬を嗅がされて、気がついたらここに……」

「キャアアッ！」

かすみがみずほと話していると、今度はあやねが坂出に捕まった。

「お前でもいい、奴隷になれ！」

「何をなさるの！？」

あやねは激しくもがいた。そのせいで、坂出は蝋燭を投げ出してしまい、それが近くにあつたマットの上に落ち、火が燃え広がった。

「何で？」

かすみが呆然としてみると、みずほが、

「そいつがさつき、変な匂いのする油を撒いたのよ。そのせいだわ」

「何て事を！」

火は彼女達の想像以上に早く大きくなり、用具室に煙が充満した。

「くそう！」

目的を達成できないと悟った坂出は一番先に逃げ出し、あるところか、外からつかえ棒をして、3人を閉じ込めてしまった。

「扉が開かないですわ、かすみさん」

力一杯挑戦したあやねが言った。かすみはみずほを庇いながら、炎から逃れようと用具室の隅に行った。

「そうか。だからどこでいつなのかわからなかったのか…」

かすみは朝の予知夢の曖昧な理由がわかった。

「かすみさん」

「道明寺さん」

あやねとみずほが不安でいっぱい顔をかすみに向けた。

「大丈夫。助かるわ」

かすみは予知夢の続きをさつき確認していた。

だから自信があつたのだ。

体育館から逃げ出した坂出は、このままではまずいと考え、学校から逃亡するために職員の駐車場に走っていた。

「しばらく行方不明になって、ほとぼりが冷めた頃戻れば…」

坂出は自分の車のドアを開いて乗り込んだ。

「遅かったですね、坂出先生」

助手席に、何故かかすみがいる。後部座席にはみずほ。

坂出は発狂しそうだった。

「……うん、うん、うん、うん。」

「どういふことですわよ、坂出先生！」

みずほの正拳突きが炸裂し、坂出はダウンした。

用具室の火事は、あやねの連絡で駆けつけた他の教師と多くの生徒の手で消し止められ、大事には至らなかった。

そして坂出は、みずほに対する監禁と暴行の容疑で警察に逮捕された。

さて、かすみ達は、炎と煙に包まれた用具室からどうやって脱出したのか？

かすみはテレポート能力も発現するようになったのだ。

それを教室での予知能力によって知った。

その能力を使ってみずほとあやねを伴ったまま体育館の外に移動したのである。

「ますます男子に怖がられちゃうかな？」

そんな心配をしてしまうかすみは、ごく普通の女子高生にしか見えない。

イライラ

最近彼はイライラしている。

仕事もうまくいっていない。

上司には叱責される。

家に帰れば妻には愚痴られ、子供には無視され。

何もかも消えちまえと思う程、イラついている。

その上、趣味で始めたインターネットの小説の投稿でもイラついている。

1人、ストーカーもどきがいて、彼がアップする小説全てを口汚く罵るのだ。

最初は「厳しい意見」と受け止めていた。

しかし、相手はエスカレートし、「生活態度が悪いのでは？」から始まり、人格否定にまで及んだのだ。

さすがにこれには彼もガマンできず、遂に反論した。

すると相手は、

「小説にはその人の品格や人生観が滲み出るものだ。貴方の小説は貴方の全てを曝け出している」

と書いて来た。

彼はギクツとした。

確かに彼はイライラしながら、私小説的な物語を書いていた。

しかし、自分の事を書いているとは一言もコメントしていない。

見抜かれている。

彼は、このストーカーもどきの人物が、実は高名な作家なのではないかと思った。

そう思うと少しは落ち着き、その厳しい批判を真摯に受け止められるようになった。

やがて彼の小説は賞賛されるようになった。

彼のイライラは収まり、仕事もうまく行くようになった。

ほんのちょっとしたきっかけ。

それが彼を変えた。

彼は営業先が自宅の近くだったので、妻を呼び出し、昼食を共にした。

「どうしたの、今日は？　偉くご機嫌ね」

妻が言った。彼は照れ笑いして、

「そうか？」

妻は悪戯っぽく笑って言った。

「私の小説批評、当たってたでしょ？」

ホラー作家の憂鬱

皆さんは信じますか？

怖い話をするとう霊が集まって来るといふ話を？

私は信じます。

何しろ、身をもって体験してしまったのですから……。

私はしがないホラー作家、天道よし子。これ、本名。

デビューこそ華々しかったけれど、その後は鳴かず飛ばずで、
染みだった編集者も月に一度連絡をくれればいい方だ。 馴

そんな状態がしばらく続いたある日の事。

資料の中に妙に目を引く一冊の本があった。

「百物語」だ。

皆で怖い話を百すると、本当に怪異が起こるといふ話。

私はある出版社から短編の依頼を受けていた事を思い出し、

「書いてみるか」

とパソコンに向かった。

しかし、何も思いつかない。

怪異？ 妖怪？ 幽霊？

どうしよう？ さっき編集部で電話して、

「すぐ書けますから」

と言っちゃったよ。困ったな。

あ。そうだ。この前、友人から心霊体験聞いたな。

それをアレンジして書こう。

すると嘘のように書き進められた。

いつそオムニバス形式で、他の心霊体験も書きちゃえ！

私は古びたネタ帳を机の引き出しから引っ張り出した。

心霊体験はいくつか取材してるから、五話や六話は書けそうだ。

何なら、編集部に売り込みをかけて、連載にしてもらおう。

私は急に調子が出て来たのを不思議とも思わずに、次々に書き進めた。

うん？ 何時間パソコンに向かっていたのだろう？

時計に目をやると、深夜二時だ。

十時間くらいパソコンに食らいついていた事になる。

「さすがに疲れたな」

え？ 今、窓の外を誰か横切った？

夫は出張でいないし、子供達は修学旅行でいない。

誰？ まさか、泥棒？

もしそうだったらどうしよう？

その時私はギョツとした。

私がいるのは二階。窓の外はベランダがない。

つまり、人が横切る訳がない。

そんな……。

冷や汗が噴き出す。

ホラー作家だが、実体験はないし、本当は「超」がつくほどの怖がりなのだ。

怖い話をすると、霊が集まって来るって奴？

嫌だーっ！ そんなの絶対に嫌！

私は震えが止まらなくなり、パソコンの電源もそのままに部屋を出た。

そして家中の明かりを点け、鍵という鍵をロックし、外が見えないうちに全部カーテンを閉じ、家の中央にある居間に陣取った。

ついでにお香を焚き、数珠を持ち、お経を唱えた。

まるで「耳なし芳一」だ。

しかし、それは取越苦労に終わった。

結局何も起こらないまま、夜が明けた。

私はよくあるパターンを知っていたので、本当に朝なのか、テレビをつけて確認した。

あの暑苦しい司会者が気持ち悪い笑顔で映った。

確かに朝だ。何もなかった。

ある訳がない。あんなの、作り話なんだから。

私は自分の大袈裟加減を恥じ、部屋に戻った。

「あら？」

パソコンがメールの受信を知らせている。

「誰から？ もう編集部から催促？ まさかね」

私は差出人不明のメールを開封した。

まさしく息を呑んだ。

「先生のお力になれて良かったです」

何？ 誰？ 本当に何か来ていたの？

そのメールは誰が送ったものなのか、未だにわからない。

でも一つだけ考えていることがある。

あの話が見事採用されたら、お礼をしようと。

どうすればいいのかわからないけど、きっとメールで教えてくれるだろう。

これからもよろしくね、どこの誰かわからないけど、親切な方。

仇討ち

江戸時代の頃の事。

長く浪人をしている男が町の裏通りを歩いていると、一人の少女が泣いているのを見かけた。

男はその少女のそばを一度は通り過ぎたのだが、どうも気になつて仕方がないので、踵きびすを返して少女のところに戻った。

「どうした、何故そのように泣いておる？」

「親の仇を探して、国元を離れて江戸までまかり越しましたが、どうにも見つからず、銭もなくなり、途方に暮れて泣いております」

背中を向けたままで、少女はしつかりした口調で答えた。男は不憫に思い、少女のそばにしゃがんだ。

「そうか。それは難儀な事だな。親の仇を探しておるのか。それでその仇の人相風体は知っておるのか？」

「わかりませぬ」

「わからぬ？ それでは探しようがないぞ。随分と無鉄砲な事をする女子おなこじゃな」

浪人は少女の行動を哀れに思った。親を殺され、気が動転し、後先の事も考えずに国元を立ってしまったのだらうと。

「でも、一つだけわかる事がございます」

少女は泣き止んで言った。浪人は少女の顔を覗き込んだ。

幼いながらも、美しい顔立ちだ。立ち居振る舞いからして、武家の娘であろう。

「わかる事？ 何がわかるのじゃ？」

「匂いにございます」

「匂い？」

これはまた面妖な事を申すと、浪人は眉をひそめた。

「はい。匂いにございます。これはしかと父母おちいより伝えられまして
「ございます」

少女はスーッと浪人を見た。浪人はその少女の目の冷たさにゾクツとした。

「何！？」

浪人が退こうとした時、すでに彼の脇腹は少女の右手の鋭い爪で斬り裂かれていた。

「グウツ……」

浪人は何故と問おうとしたが、声にならない。少女は氷のような眼で尻餅をついた浪人を見下ろし、

「わからぬか、お前は？ 私の父母はお前に殺されたのだ。仇、討たせてもらうぞ」

「……」

浪人はようやく少女の正体を知った。

「ま、ま……」

しかし言葉にならない。少女は背筋が寒くなるような笑みを浮かべて、

「そうだ。お前に殺された、野良猫の子さ。お前も血反吐を吐いて死ぬるがいい！」

「ゲホッ……」

少女の鋭い爪が浪人の首を抉^{えぐ}った。

そのまま仰向けに倒れて、浪人は息絶えてしまった。

そして数日後。

町の裏通りで、浪人姿の男が踞^くっていた。

「どうなさいました、お武家様？」

通りかかった商人が声をかける。

「仇討ちをしたいのであるが、仇の人相風体がわからぬ。どうすれば良いのか教えてくれぬか？」

そう言っ て振り返った浪人は、首がパツクリと斬り裂かれていて、喉から子猫が顔を出していたと言う。

団地

Ｔ市の団地群の一つの棟の五階に、佳子^{けいこ}は住んでいる。彼女には二つ年上の夫と、今年三歳になる男の子がいる。

「寒い寒い」

年が明けてようやく冬らしくなり、朝晩の冷え込みが厳しくなった。

一昨日から故障している湯沸かし器のせいで、彼女は大鍋にお湯を沸かして洗い物に使っていた。

「さてと」

朝食の後片付けをすませ、風呂掃除をし、洗濯物を全自動洗濯機に放り込む。

佳子は居間のソファにグータツと寝そべった。

「テレビ、テレビと」

リモコンを操作し、電源を入れ、いつも見ているチャンネルに合わせる。

途端に画面に映ったのは「連続婦女失踪事件を追う！ 事件の真相を透視する美人霊媒師！」という字幕だった。

「またア。嘘臭いわね」

佳子はテレビを消すとリモコンを投げ出し、ソファから起き上がってキッチンに行った。

「もうこんな時間か」

壁に掛けられた時計は、十時五十分を指していた。

「お昼ご飯は何にしようかな」

佳子は冷蔵庫のドアを開いた。

ところがそこには卵が三個、使い切ったマヨネーズ、ほとんど中身の入っていない焼き肉のタレのビン、少しヨタったトマトが二個あるだけだった。

「あらま、いつの間にこんなに片付いちゃったのかしら？ 買い出

しに出かけなくちゃ」

彼女は寢室兼子供部屋に行った。

男の子が携帯ゲーム機を動かして遊んでいる。

「勇、お出かけするからゲーム終わりにしてね」

「はい」

勇と呼ばれた男の子は、ニツコリ笑ってゲーム機をおもちゃ箱の中に片づけると、

「お母さん！」

と佳子に飛びつき、二人で部屋を出た。

「お父さんがチャリンコで行ったから、ブーブーで行けるよ、勇」

「わーい！」

佳子は勇を伴い、玄関を出た。

その時彼女は、ずっと離れた同じ階の部屋に、マネキンの脚のよ
うなものが入って行くのを見た。

いや、見た気がした。

「何だろ、今のは？」

佳子が思案していると、勇がたまりかねたのか、

「早く行こうよオ、お母さん」

と手を引いた。佳子はハッとして勇に目をやり、

「ああ、ごめん。行こっか」

「うん！」

二人が反対方向にあるエレベーターホールに向かって歩き始めた
時、そのマネキンの脚らしきものが消えた部屋から、気味の悪い人
相の男が顔を出して廊下を見渡し、スーッとドアを閉じた。

しばらくして二人は近所の大型スーパーに着いた。

その時だった。

「佳子じゃない？」

と声をかけられた。

佳子はハッとして振り向いた。

そこには彼女と同じ年頃の、大きなレンズの丸眼鏡を掛けたショートカットの美人が立っていた。

佳子はびっくりして、

「ミイコ！ ミイコじゃない！？」

「久しぶりねエ。それもこんなところで再会するなんて」

「そうねエ。貴女、相変わらずお勉強？」

佳子はミイコの右手にある紙袋を見た。

エキナカにある大手の本屋のものである。ミイコは頷いて、

「ええ。何としても現役合格したいのよ。でないと、私の人生設計が狂っちゃうわ」

「夢は大きく持たないとね」

佳子がおどけて言うのと、ミイコは少しムツとして、

「夢じゃないわよ。近い将来の現実。貴女が警察のご厄介になったら、タダで弁護してあげるわよ」

「何よ、それ？」

今度は佳子がムツとした。やがてミイコは勇に気づいた。彼女はしゃがみこんで、

「あら可愛い。この前会った時は、お猿さんみたいだったのに」

と勇の頭を撫でた。勇は佳子を見上げて、

「お母さん、このおばちゃん、だアレ？」

「あらま、憎らしいことを！ 私はね、お母さんと同級生なのよ」

ミイコは勇のほっぺを突っついて言った。勇はキョトンとして、

「ドウキユウセイって何？」

「あつ、そつか。お母さんとね、年が一緒なのよ」

「じゃあやつぱりおばちゃんだ」

勇は笑った。ミイコもつられて笑い、

「貴女も随分老けて見られてるのねエ」

と佳子を見た。佳子は溜息を吐いて、

「子供の年齢感覚ってわからないわ。先輩が遊びに来ると、『お姉ちゃん』って言うのよ」

「まア。どういふ感覺してるの、勇君？」

ミイコは勇を見た。

二人はその後もとりとめもないことを話しながら、買い物をする
せた。

「ねエ、ミイコ、これから大学に戻るの？」

「いいえ。今日はもうおしまい。帰るわよ」

「なら私んちに来ない？」

「あら、いいの？」

ミイコは勇を見た。

勇はまだミイコをちよつとばかり怖がっているようだ。

私も夫の聖司も眼鏡をかけていないせいかも知れない、と佳子は
思った。

「勇君は賛成してくれるかな？」

「いいわよね、勇？」

と佳子は勇の頭を撫でながら尋ねた。勇は佳子を見上げて、

「いいよオ。お母さんのお友達でしょ？」

「よし、これで決まり。さて、駐車場に行きましょうか」

今度はミイコが尻込みした。彼女は苦笑いをして、

「け、佳子、まさか貴女、ここまで車で来たの？」

「そうよ。勇を連れて歩いて来られるわけないでしょ？」

「そ、そうねエ……」

ミイコは顔を引きつらせたままである。佳子は変に思つて、

「どうしたのよ？」

「だ、だつてさア、半年かかつて、それもお情け同然で卒検受かつ
た貴女の運転がどんなものかってことくらい、私だつて知っている
のよ」

「あつ！ 私の運転技術を信用してないってこと？」

「そこまでは言っていないわよ」

ミイコは佳子に詰め寄られてタジタジである。そして考えあぐね
た挙げ句、解決の糸口を掴んだ。

「そうそう。やっぱり行くわ。最近物騒なのよね、この辺。痴漢出まくりだし。ブティックとかデパートのマネキンがよく盗まれてるらしいの」

「マネキンが？」

佳子はおかける時見かけたマネキンの脚のようなものを思い出した。

「何か思い当たることもあるの？」

「い、いえ、別に……」

ミイコは佳子の反応に納得していない様子だった。

ほどなく三人は団地の駐車場に着いた。

「あーっ、やっぱり怖かった。猫が飛び出した時は、猫より貴女の悲鳴に驚いたわ」

「仕方ないじゃない！ 黒猫だったんだもの。何か不吉なことが起こらないといいけど」

佳子が神妙そうに言うと、ミイコは目を見開いて、

「あらま、貴女ってそういうこと気にするタイプなの？」

「そう。どうもそういうのって、気になっちゃうのよね」

佳子達はエレベーターホールに向かった。

「早速不吉なことが起こったわね」

とミイコが言った。エレベーターが故障中になっていたのだ。

「出かける時は動いていたのに。ホント、嫌だわ、黒猫」

「ハハハ」

ミイコは佳子の言葉に苦笑した。

三人が五階の佳子の部屋に着いた時、時計は十二時を回っていた。

「大変大変、お昼の用意しなくちゃ！」

「私も手伝うわ」

とミイコが言うと、佳子は満面の笑みを浮かべて、

「遠慮しとくわ、オコゲのミイコさん」

「あっ！」

今度はミイコが止めを刺された。彼女は肩を竦めて、

「わかったわよ。貴女、性格はともかく、料理はおいしいもんね」

「何よ、その言い方は？」

「まアまア」

ミイコはキッチンから逃げ出し、リモコンでテレビをつけた。ちょうどワイドショーで婦女連続失踪事件をやっているところだった。ミイコは買って来たお菓子を一つ頬張り、

「またやってる。バラバラ殺人の後はもうこればかりね。うんざりだわ」

「ええ？ 何か言った？」

手を洗いながら佳子が尋ねた。ミイコは佳子を見て、
「何でもないわよ」

と答えた。勇はミイコから離れたところでとてもわかるとは思えないが、必死にテレビを見ていた。

「つまり、女性の失踪している場所、時間はバラバラでも、その女性達の住んでいたところに一致が見られるということですね？」

男性司会者の声が急にミイコの耳に入ってきた。ミイコはテレビに目を向けた。

「そうなんです。その住んでいたところというのが、T市にある団地なんです」

女性レポーターが見せたパネルを見て、ミイコは仰天した。

「あっ、あの写真、この辺の団地じゃない？」

「何ですって？」

佳子は包丁を片手に居間に来た。そしてテレビに近づき、

「ホントだ。あれ、この辺よ。どうしよう？ 犯人がこのあたりに住んでるってことだわ」

「うーん。怖いわね。マネキン泥棒どころじゃないわ」

ミイコと佳子は顔を見合わせた。

勇が不思議そうに二人を見上げて、

「どうしたのオ、お母さん、おばちゃん？」

「それがね……」

と佳子が説明しようとした時、玄関のチャイムが鳴った。

「はい」

佳子はドアに小走りで近づき、チェーンを掛けてから開いた。

「お昼時に失礼します」

そこに立っていたのは、制服姿の若い巡査だった。いわゆるおまわりさんだ。

「実はここ何日かの間に、あちこちでマネキン人形が盗まれているのをご存じですか？」

と巡査は切り出した。佳子はチラッとミイコを見てから、

「ええ。それが何か？」

「そのことで、ここの団地の方が何人か、マネキン人形を運んでいる男を目撃したというのです。一応店からも被害届が出ていますので、こうして団地の方にお伺いしているのです。奥さんはそのような男を見かけたことはありませんか？」

佳子はマネキンの脚のことを思い出した。そして、

「男の人は見かけていませんけど、マネキンの脚のようなものがある部屋に入っていくのを見かけたことはあります」

「それはどの部屋ですか？」

巡査は手帳にメモを取りながら尋ねた。佳子は、

「同じ階の一番端の部屋だと思います。ただ、はっきりと見たわけではないので」

と自分の証言の重大さに気づき、逃げ腰に答えた。しかし巡査は、

「ちょっと一緒に願えませんか？ その部屋の方にお話を伺いたいのです」

「ええっ？ 私も行くんですか？」

佳子は不安そうにミイコを見た。ミイコは、

「勇君は私が見てるから。もしその人がマネキン泥棒なら、早く捕まえた方がいいし、そうじゃないなら、それも早くはつきりした方

「がいいわ」

「うーん」

巡査は真剣な目で佳子を見ている。佳子は、

「じゃ、行きましようか」

「はい。ありがとうございます」

二人は廊下を歩き、その部屋の前に来た。

表札が出ている。「慶道寺真介」と書いてあった。

「随分敵めしい名前ですね」

佳子のはるか上で巡査が言った。

二人の身長は三十センチくらい違っていた。

巡査は佳子に目配せしてから、チャイムを鳴らした。

「何ですか？」

ドアが少し開き、むさ苦しい無精髭の男が顔を出した。巡査は、

「実はこの団地にマネキン人形泥棒がいるんです。貴方はそのような男を見かけていませんか？」

「いいえ、見たことはありませんね」

男はドアを閉めようとした。巡査はそれを手で制し、

「ちょっと待つて下さい。貴方の部屋にマネキン人形の脚が入って行くのを見かけた方がいるんですよ」

男はしばらく黙っていたが、やがて大笑いし始めた。

「何がおかしいんですか？」

巡査はムツとして言った。しかし男はニヤニヤしたままで、

「入りな。俺はマネキンなんか盗んでいねえよ」

とドアを開いた。巡査と佳子は導かれるまま中に入った。

「何この臭い？」

佳子はハンカチで口と鼻を押さえた。巡査も手で口と鼻を覆いながら、

「何でしょうね？」

男は部屋を仕切っているカーテンの前にいた。

「この向こうには俺のコレクションがある。これを見れば俺がマネ

キン泥棒じゃないってわかるさ！」

と男はカーテンを引いた。そこには美しく着飾ったマネキンらしきものが三体立っていた。

「やっぱりマネキンじゃないか！」

巡査は怒りの目で男を睨んだ。しかし佳子は真っ青になって、

「お、おまわりさん、マネキンじゃありません！ こ、これ、人間、人間です！」

「！？」

巡査はびっくりしてよくマネキンらしきものを見た。

それは確かにマネキンではなく、紛れもなく人間であった。

蠟で塗り固められた、女性の遺体だったのだ。

「どうだ、これで俺がマネキン泥棒ではないとはっきりわかっただろっ！」

男は勝ち誇ったようにけたたましく笑った。

その笑い声は五階中の廊下に響き渡った。

大食い食堂紀行

俺は自他共に認める大食いだ。

たくさんの選手権に出場し、優勝して来た。

海外でも栄冠に輝いた事がある。

但し、俺はプロのフードファイターではない。

あくまで大食いは趣味なのだ。

そんな俺が、もう一つの趣味であるインターネットで、今まで行ったことがない大盛りの食堂を見つけた。

場所は群馬県。東北地方だったかな？ どこだったか記憶が定かではない。

俺は地理が苦手で、関東地方の「一都六県」も知らない。

世間ではそれを「おバカ」と呼ぶらしいが、知らなくても生活に支障がない事を覚える方が「おバカ」だと思う。

俺は実利主義者なのだ。

そんなわけで、俺は早速その食堂「大具井食堂」おおぐいに出かけた。

東北地方なら東北新幹線で行けば着けるだろうと思い、東京駅から東北新幹線に乗った。

住所は群馬県大利根郡の土似神村外忽だ。しにがみむら がいこつ 凄い名前だ。

しばらくすると車内販売のオバちゃんが来たので、コーヒーを買って、

「群馬県の大利根郡に行くにはどこで降りればいいのか？」

と尋ねた。するとオバちゃんは大袈裟に驚き、

「お客様、群馬県大利根郡は新潟に行く上越新幹線に乗らないと行けませんよ。大宮で降りないと」

「え？」

まずい。もの凄いバカだと思われた。そうか、群馬は新潟なのか。

「ハハハ、そうだよな。群馬は新潟だよな」

俺はうつかり乗り間違えたフリをして笑って誤魔化したが、立ち去るオバちゃんの目は、可哀相な人を見る目だった。

大宮駅で上越新幹線に乗り換え、俺は新潟に向かった。

まだ時間があるようだ。

一眠りするか。

俺はシートを少し傾けて眠った。

うん？

随分寝た気がする。

窓の外を見た。新潟駅に着いたようだ。

俺は改札を出て、タクシー乗り場に向かった。

「どちらまで？」

運ちゃんが尋ねて来た。俺は落ち着き払って、

「群馬県の大利根郡土似神村まで」

「は？ 本当ですか？」

運ちゃんは疑うような目で俺を見た。

「本当だよ。急いでくれ」

「でも遠いですよ」

「かまわないよ。どのくらいかかりそうなんだ？」

俺は腕時計に目をやって尋ねた。すると運ちゃんは、

「高速で飛ばして四時間てとこですかね」

「は？ 四時間？ そんなに遠いの？」

俺はビックリした。そんな辺鄙なところなのか？

「そんなにかかるのなら、新幹線で行った方が早いかな」

「だと思いますよ。私はかまいませんが、お客さんもその方が安くすむでしょうしね」

俺は運ちゃんの優しさに感動した。

「で、大和郡はどの駅で降りれば近い？」

「群馬の大和郡高原平駅で降りればすぐですよ、確か」

「群馬？ 群馬は新潟だよな？」

「違いますよ、群馬は群馬です。お客さん、どこからお出ですか？」

運ちゃんの目が車内販売のオバちゃんの目と同じになった。

まずい。また何かやらかしたか？

「東京。群馬なんて行った事がないからさ、どこにあるのか知らなくて」

運ちゃんの視線が痛い。可哀相な子を見る目だ。

「お客さん、今度はお友達と出かけた方がいいですよ」

俺は礼を言ってタクシーを降りた。

俺は結局もの凄い遠回りをしていた。

地理を知らない事は生活に大きな影響がある。

それに気づいた。

ようやく「大具井食堂」に辿り着いた時、すでに店は閉店していた。

俺は仕方なく近くの旅館に泊まり、次の日の朝再び出向いた。

ところが店は開いていなかった。

よく見ると張り紙がある。

「弊社はお客様に緊急入院された方がいたため、営業を停止されました」

俺は目まいがした。

告白

気の小さい私は、好きな人に告白できないでいた。

イジイジ考え、オロオロ歩き回った。

ウロウロした挙句、電柱にぶつかった。

ボンヤリして、側溝に落ちた。

同じ空間にその人がいる。

そう思うだけでドキドキした。

仲間にも話していない。

言えるはずもない。

止められるに決まっているから。

本当に秘密の片思い。

我ながら「キモい」と思った。

あの人の事を考えると、夜も眠れない。

あの人の声を聞くだけで幸せを感じてしまう。

重症だと思った。

末期症状だとも思った。

そんな私に酔っている自分がいる。

片思いでいいから、などと思う私がいる。

本当にそれでいいの？

自問した。

悩んだ。

でもいつまで経っても答えは出なかった。

そんなある日、朝のテレビの占いで、

「今日はハッピーな事がある日」

と言っていた。

些細なきっかけで未来が変わる事がある。

妙なところで前向きな私は、決心した。

「前からあなたの事が好きでした。付き合ってください」

あの人の前に回りこみ、思い切って告白した。

でも無視された。

わかっていた。こうなる事は。

絶対に諦めないぞ。

私達の間にある壁は高くて厚い。

でも必ず乗り越えてみせる。

犬が人間に恋しちゃいけない決まりなんてないんだから！

傷心旅行は気をつけて（前書き）

ある企画に参加する前の練習作です。

傷心旅行は気をつけて

魅せられてしまった。

バリ島へ傷心旅行をした時の事だ。

露店で見つけた、まさに真紅の仮面。

そのまま吸い込まれそうな赤。新鮮な血の色にも似た衝撃的な色彩。

私はいくらなのかも確かめずにその仮面を購入した。

それ程の金額ではなかったと思う。

手持ちの現金で買ったのだから。

すっかり興奮していて、記憶が飛んでしまっている。

思えばそれは前兆だったのだ。

私はその仮面を自分の部屋に飾った。

母は気味悪がった。父は趣味が悪いと言った。

しかし私は気にしなかった。

魅せられていたのだ。

いや、魅入られていたのかも知れない。

その夜、私はハイテンションのまま眠りについた。

夢を見た。

どこかの洞窟。周囲には誰もおらず、松明が四つ灯されている。炎が近いため、時々私に火の粉が降りかかる。

しかし、熱さは感じない。

何故こんなところに？

しかも私は何も身に着けていない状態で、平らな石の上に四肢を縛り付けられていた。

全部丸見えだ。

そうでなくても情けない貧乳が、余計平らになっている。

な、何？

恥ずかしいよりも先に、恐怖が心を埋め尽くす。

夢から覚めた。ホッとする。

バリ島で見たファイヤードンスの事が頭に残っているのかな？

そう思い、夢の事は忘れた。

会社の上司と同僚達にお土産を配った。

私はふと夢の事を思い出し、隣の席の真由美に話した。

「あんた、男に飢えてるんじゃないの？」

真由美はそう言って笑った。

「そ、そうかな？」

そうかも知れない。傷心旅行と言いながら、実は男を探していたのだから。

そう思い、それ以上夢の事を考えるのはやめた。

そしてその夜。

私はまた洞窟の夢を見た。今度は全裸の私を数十人の男達が取り

囲んでいる。

男達は皆、真っ赤な仮面を被っていて顔はわからない。着衣は全員腰蓑のみである。

私はさすがに恥ずかしくなり、叫ぼうとしたが声が出ない。

そればかりか、動くのは顔だけで、手も足も動かすどころか、感覚すらない。

いくら男に飢えているとはいえ、このシチュエーションは変だ。

そのうちに男達が奇声を発しながら、私の周りをグルグルと歩き出した。

よく見ると彼らは手に大きな斧を持っている。

何するつもりなの！？

そこで目が覚めた。

全身汗塗れだ。

あれ？

しかも、手首と足首には何かの痕が着いている。

「これは……」

縄で締められた痕だ。

私は怖くなった。そしてアッと思い、壁の仮面を見た。

以前より仮面の色が濃くなっている。

血が変色して赤黒くなるように。

私は思わず携帯を手に取り、時間も気にせずに連絡した。

相手は私の家の菩提寺の住職だ。

幸い住職はすでに起床していた。僧侶なら当然なのだが。

理由^{わけ}を話すと、住職はすぐにその仮面を持って来るように言った。

私は会社を休み、住職の待つ寺に出かけた。

「……」

住職は仮面を手にしたまま、しばらく何も言わなかった。

「あの」

私は堪りかねて声をかけた。すると住職は、

「危なかったですな。これは死仮面です。死んだ者の顔に被せて弔

いの儀式に使うものです」

「ええ？」

私は住職の説明に仰天した。

「しかもこの仮面、より悪い事に何度が使われていてその死者達の念が取り憑いている」

「そ、そうですか」

私が魅入られたのはそれだったのか。

「この仮面は私が供養します。貴方にはもう何も起こらないはず」

「ありがとうございます」

私はようやくホッとできた。

「これに懲りて、旅先で妖しげなものは買ってはいけませんよ」

「はい」

最後に住職に痛いところを突かれた。

傷心旅行は国内にしよう。

そう思った。

噂のラーメン屋

俺は自称グルメの男。

ラーメンにかけては相当数食しており、「通」に分類されてもいいと思っっている。

友人共は、俺のふくよかな下腹を見て、

「メタボ一直線だな」

などと悪口を言う。

確かに最近はすぐに疲れるし、以前ほど豪快に食べまくることはできなくなっている。

健康にも気をつけないと、妻と子供達が路頭に迷う結果になりかねない。

これからは食べ歩きはほどほどにしよう。

そう心に誓った。

しかし、そんな誓いなどすぐに反故にしまっるのが自称グルメたる所以であろう。

早速新しいラーメン屋の情報をネットで入手し、場所を確認して出かけてみた。

そのラーメン屋は、商店街の片隅にあり、とても名店とは思えない雰囲気だった。

数をこなして来た人間ならではの勘だ。

失敗したかな、と思ったのだが、それでもここまで来たのだからと入口の引き戸を開いた。

「いらつしやい」

店の中には客は1人もいない。

混雑を予想して時間をずらしたせいだろうか？

更に嫌な予感がした。

「何にしましょう？」

厨房には店主らしき老人がいて、考える間もなくそう尋ねられた。

「ラーメンを。ゆでたまご付きで」

俺が一番無難な注文をした。

「はい」

老人は愛想が悪い訳ではないのだが、取り立てて印象がいい訳でもない。

俺は店内を見回した。

奇麗にされたカウンター。

雑誌が並べられている書棚も、雑然とではなく、整然としている。

店主が奇麗好きで、几帳面なのだろう。

すると急に期待が持てた。

もしかすると、本当に穴場なのかも知れないと。

「お待ちどう様」

目の前にラーメンが置かれた。

「！」

スープの香りが鼻をくすぐる。

一口蓮華で掬って飲んでみる。

凄い。

俺は大概の店の合わせ出汁を全部見破る自信があるのだが、これはわからなかった。

魚の焼き干し、豚、鶏、何種類かの野菜。

水も違うのかも知れない。

しかしそれだけではない。隠し味に何か使われている。

それがわからない。

俺はまるで何かに取り付かれたようにスープを飲み、麺を啜った。

完食。

不味ければ一口でやめるつもりだったが、スープも残さなかった。

俺は満足感に浸りながら、店主に尋ねた。

「教えてもらえないでしょうけど、スープの隠し味に使っているのは何ですか？」

店主はニヤツとして、

「隠し味なんて使ってませんよ。ごく普通の組合せです」

と厨房が暑いのか、ハンドタオルで汗を拭いながら答えた。

「すみません、失礼します」

店主は鍋が気になるのか、踵を返した。

どうしても真相が気になった俺は、立ち上がって厨房を覗き込んだ。

まな板の上にあるのは、野菜の切り屑と包丁。

麺はどこかの製麺所から仕入れているもののようだ。

もっと奥を見ようとした時だった。

「うー！」

いきなり店主に右手でアゴを掴まれた。

「お客さん、覗かないで下さい。困りますので」

「す、すみません」

店主の顔はさっきと変わっていた。

犯罪者。

言い過ぎかも知れないが、そのくらい目つきが鋭くなっていた。

「どうしても知りたいんですか？」

「い、いえ、それは・・・」

俺は怖くなって逃げようとしたが、店主は意外に力があり、アゴを放してくれない。

「隠し味を教えてあげますから、口を開けて下さい」

「け、結構です」

「開けなさい！」

店主が怒鳴った。俺は恐怖のあまり、口を開いた。

「隠し味知りたいんですよ？　これですよ、これ！」

店主は俺の口の中に左手の指を突っ込んで、舌を引き出した。

「あいれれ！」

俺は悲鳴にもならない情けない声を出した。

「特にグルメ自慢の連中のこれが、一番いい出汁が採れるのですよ！」

店主の目は血走り、右手には包丁が握り締められていた。

真紅の盃（前書き）

某覆面企画参加作品です。タイトルを参加時のものに戻してみました。

真紅の盃

大坂の役の決着は戦国時代の完全終結を意味し、同時に徳川氏の天下掌握を意味する物でもある。

栄華を誇った豊臣家も僅か二代で滅ぶ。

秀頼と淀殿は自害し真紅の血の海に倒れ伏した。

火が放たれて二人の遺骸を焼き、大坂城落城の炎で難波の夜空が真紅に染まった。

その真紅の空は遠く京の都からも見えたと言う。

大坂の役以降時代は変わって行く。

戦乱の無い時代そしてやがては外国との交易を制限する鎖国。

明治以降百四十年余りであるが未だ江戸時代の長さには追いついていない。

日本の文化や風俗の多くはこの時代の影響が色濃く残されており明治政府が最初にした事は徳川時代の破壊であった。

それは今思えば大変な暴挙である。廃仏毀釈等其の最たるものだ。政府そのものが命令したものではないとは言え、結果的にその威を借りて破壊行動に出た輩は無数である。

時代の変動は、時として人間を狂気に駆り立てる。「古き物は即ち悪」という余りに即物的な発想である。

何れにせよ、大坂の役が日本の歴史の転換点であった事は紛れも無い事実である。

そしてその中心に居たのが徳川家康でありその家康の一番近くで彼に仕えて来たのが本多弥八郎正信である。

天下太平。共に目指した物であった。

時には敵と味方に分かれた事もあった。しかし二人は紛れも無い友。戦友である。

駿府城。

徳川家康の隠居城である。

家康は在位僅か二年で將軍職を三男秀忠に譲り徳川家が征夷大將軍の継承者の家系である事を天下に知らしめた。

その実幕府の実権は未だに「大御所様」にある。

その駿府城に二人の戦友はいた。

日も暮れて蠟燭の灯りの中に老人の顔が二つ浮かんでいる。

「大御所様には大坂の戦の大勝利、誠におめでとうございます」

深々と頭を垂れて本多弥八郎正信は言った。目尻の皺がその人生の深さを物語っている。

「畏まるな弥八郎。今ここには儂とお主のみ。楽にせい」

暑い訳ではないが額に薄らと汗を滲ませた家康は微かに笑みを浮かべた。

肥え過ぎなのだ。

正信はにやりとした。

「はは」

家康の手招きに応じ彼は間を詰める。

「それにつけても千姫様のお命ご無事で何よりでした」

「ああ」

余り関心がない様な声である。正信は眉を顰めた。

「あれは秀頼と淀殿の命を助けくれと申した」

「はい」

「あの時のあれの眼が今でも瞼に焼き付いておる」

家康の感情は読み取れない。表情に全く変化がない。

それ故千姫の助命嘆願が苦々しかったのかどうか、正信には判らなかった。

「お二人はご自害でございます故その」

「そうではない」

「は？」

正信は家康の考えが判らない。

「あのような顛末にしたのはいかに取り繕おうとも儂だ。千はその事を見抜いておる。それを責める暇だった」

「……」

正信は返答のしようが無い。千姫がそれ程の深い思いを抱いていたのか彼には判断しかねた。

「だが、もう忘れてしもうた。否、忘れる事にした」

「それが宜しいかと」

正信は再び深々と頭を下げて応じた。家康は苦笑いをした。

「お主は昔からそうだな。場を読んで言葉を選ぶ名人よ」

「滅相もございません」

正信は若干の照れ笑いをして答えた。

「お主だからこそ申すのだかな」

家康は声を低くして正信に言った。

「儂は別に徳川家の為に豊臣を討った訳ではない」

「はい。承知しております。天下太平の為。日の本の民の為にございます」

「流石よのう弥八郎。お主がおってくれたからこそ儂もここまで来られたのだ」

家康は顔を綻ばせた。家康は面と向かつてはあまり人を誉めぬ男である。

正信は涙が溢れそうになったのを誤摩化す為顔を下に向けた。

頬を掻くふりをしてそれを拭う。

「この太平がいつまでも続く事が儂の夢。しかしいずれ徳川も敗者となる日が来るのも世の必定」

家康の声は真剣そのもので戯れの言葉とは思えない。正信はびつくりした。

しかしそれは二百六十余年後現実の事となる。

「そのような事を……。大御所様のお言葉とは思えませぬ」

正信の反論に家康は笑った。

「僕はそこまで自惚れてはあらぬ。清盛公も頼朝公も尊氏公も皆我が世の春が終わらぬとは思われなかったはず。あの太閤でさえもな」
「御意」

正信はその言葉に納得した。諸行無常。平家物語の件を思い出すまでもない。

「だからこそ僕は待った。否、待てたのだ。いずれは僕の番が巡って来ると思ってたな」

家康の忍耐強さは有名である。一部創作の疑いすらある程苦労話が多い。事実創作はあるだろう。

「お待ちになった甲斐がございましたな」

正信は晴れ晴れとした顔で言った。家康はにんまりとして真紅の盃を掲げた。

「さて今宵は飲み明かそうかの弥八郎」

「はは」

正信も真紅の盃を掲げた。二人だけの酒宴が始まった。

家康は元和元年（一六一六年）の四月に死去した。

享年七十五歳。

その直後正信は家督を嫡男の正純に譲り隠居した。

そしてまるで家康の後を追う様にして同年六月死去した。

享年七十九歳。

二人共当時としては長命であった。

真紅の盃（後書き）

企画参加当時、「上から目線過ぎる」とご指摘いただきました。

多分、その理由は、私が明治維新否定派だからだと思っています。

龍馬や大久保利通等の目指した日本とは違う道を歩み始めたのが明治だと考えていますので、その気持ち^が作品に表れたのかも知れません。

ご不快な方は、どうぞご容赦下さい。

如月茜の冒険（前書き）

如月茜は、風の葵の主要キャラの1人。私が3人の中で一番気に入っている子です。

彼女達3人は、元々は忍者ではなく、泥棒でした。いろいろと試行錯誤の後、今の形になりました。

今回のお話は、茜が、まだ高校を卒業して専門学校に通っている時に出会った、ちょっととした事件です。

主な登場人物は茜の他、まだよく知り合っ前の大原統。2人のその後を予感させる「運命的な出会い」です。ちよつと長めです。

如月茜の冒険

面倒臭いなア。

いくらお嬢様の探偵事務所に入所するために必要だと言っても、経理の専門学校なんて、頭がどうかしそう。

あ。そうか。今回は私が主人公なのね。やった！

何て言ってる場合じゃない。

私の名前は如月茜。「きさらぎあかね」と読むの。

時代劇に出て来そうな名前だとか悪口言った奴は、この前高い鉄塔の途中に取り残して、心の底から反省するまで下ろしてあげなかったんだけど、確かにそうかも、とも思う。

何故こんな名前なのかと言うと、私の家は忍びの家系。

それも平安の昔から続く由緒ある忍び。

聞いた話だと、あの第六天魔王とまで呼ばれた織田信長でさえ、決して攻撃しなかったとか。それほど強く、そしてそれ以上に誇り高い一族なんだって。私にはよくわからないんだけどね。

自己紹介はそのくらいにすると。

私はようやく慣れて来たカリキュラムをこなし、夏の暑い日差しを浴びながら、大通りの歩道をバイト先のコンビニに向かって歩いていた。

「如月さん！」

どこかで聞いたような、間延びした男の声がした。クラスメートの神保正行という、冴えない男子だ。経緯はよくわからないのだが、どうやら私は彼がちょっと怖いお兄さん方に絡まれているところを助けたらしい。

全然記憶にない。

私は彼を助けたつもりはないのだ。

ただ、自分の家のゴミを私のバイト先のコンビニのゴミ箱に無理矢理詰め込んでいるバカ共にちよっとお説教をしてあげただけなのだ。

それ以来そいつらは、頼みもしないのにゴミ箱の掃除をしてくれるようになり、私の事を、

「姐さん^{あね}」

と呼ぶようになった。

極道の人じゃないのだから、その呼び方はやめなさい、と注意したのだが、

「わかりました、姐さん」

と言い、全然理解してくれない。

おかげで私はコンビニの同僚達に恐れられ、店長にまで敬語で話しかけられている。

困ったものだ。

おっと。回想が長くなったわね。

戻ります。

「何？」

私は取り敢えず、面倒臭そうに振り返って神保君に応じた。

彼はまさしく「昭和」の香りがしそうなくらい古い感じのする男だ。

端的に言い表せば、大昔の優等生というのが一番彼を的確に表す言葉だろう。

かけている眼鏡も実に昔臭い黒縁眼鏡だ。

「これからバイト？」

神保君は何故か顔を赤らめて尋ねて来た。私は彼の顔色が気になったが、

「そうだよ。何か用？」

「あ、その、あの……」

いつもこうだ。この男は、本当に何を考えているのか、何を話し

たいのかよくわからない。

私はイラッとして、

「ねエ、私、急いでるんだけど？」

と声のトーンを上げて言った。神保君はビクツとして、

「いや、いいんだ。急いでるのなら、いいんだ。じゃ」

と言うと、クルリと私に背を向けて、まさしく逃げるように走り去った。

「何よ、あいつ？」

頭の中がはてなマークでいっぱいになるのを何とか打ち消し、コンビニに向かった。

「お疲れ様です」

私は裏口から事務室に入り、そこで何かの計算をしている店長に挨拶した。

「あ、お疲れ様です、如月さん」

店長はまるで社長でも現れたかのようにアタフタとして立ち上がり、私に挨拶した。

そんな店長のリアクションにももう慣れたのだが、何か怖がられているようで嫌な感じだ。

私はそのまま隣の女子更衣室（とは言え、ロッカーが三つ並んでいるだけの実に狭い空間）に行き、制服に着替えた。

「今日は棚卸しでしたっけ？」

事務室に戻るなり、店長に尋ねた。

また店長はアタフタと立ち上がり、

「そ、そうですね。今日から三日間、棚卸しをお願いします。基本的には、本部がほとんど管理しているので、我々は実在庫を報告するだけですから、それほど大袈裟に考えないで下さいね」

「はア」

店長はどう見ても40代のオジさんだ。

私はまだ19歳。ヘタすれば親子程も年齢が違うのである。それなのに、私に敬語。

「あの、店長」

「な、何ですか、如月さん？」

店長は職員室に呼び出された中学生のような顔で私を見た。

私は呆れ気味に、

「敬語、やめてくれませんか。何か落ち着かないので」

と提案した。しかし店長は顔を引きつらせて笑い、

「そ、そうですか。如月さんが気になるのなら、やめましょうか。

でも、私は基本的にこういう話し方なんですけどね」

「……」

私は苦笑いした。

店長は他のバイトには怒鳴ってばかりいる。

いつも命令口調。だから実に白々しく聞こえたのだ。

「あつ、タイムカード！」

打刻していないのを思い出し、事務室の隅にあるタイムレコーダーのところに行こうとすると、

「大丈夫ですよ。私がしておきましたから」

と店長が言った。私はホッと溜息を吐いて、

「ありがとうございます」

と頭を下げてから、店内に歩を進めた。

今の時間は、私の前に2人のバイトの子が入っている。

そのうちの1人が、あと30分で退店。

もう1人はこれから3時間私と一緒にだ。

その子は専門学校のクラスメート、今坂理美。いまさかりみ

ちょっと見た目はヤンキーっぽいが、実はお金持ちのお嬢様らしく、言葉遣いはTPOで使い分けられる子だ。

私のことをただ一人、偏見なく見てくれる親友である。

「お疲れー！」

と私が陽気に声をかけると、理美はニコツとして、

「お疲れー。今日は何時まで？」

「10時まで。今金欠で、稼がないとまらないの」
「ハハハ」

こんな会話は、理美としかできない。
以前他のバイトの子に、

「お金なくて」

と冗談で言ったら、顔を引きつらせて、

「い、今は持ち合わせがこれしかなくて……」

と財布からお札を出された事がある。

恐喝したわけじゃないんだけどね。

「いらつしゃいませー！」

自動ドアが開くと同時に、私達3人の声が店内に響く。

私はレジ、理美は倉庫の荷物整理、そしてもう1人のヒヨロヒヨロした男子は、消費期限のチェックを始めた。

「あつ」

入って来たのは、男1人。

その人は私の苦手な人。

一見、公務員風のイケメン男子なのだが、ちょっと性格に難がある。

どうやら、「ロリコン」らしいのだ。

えっ？ 何で苦手なのかって？ 説明したくないなア。ま、仕方ないか。

その男の人の名は「大原 統^{はじめ}」。

警察関係の人らしいのだが、最初に来店した時、私の事を中学生と思っただらしく、ニコニコして近づいて来たのだ。

「君、いくつ？」

いきなりそんなこと聞かれれば、普通の女の子ならびつくりして叫んでしまうだろう。

でも私はその時大原さんがそんな人だとは思わなかったので、

「19歳です」

と即答した。すると大原さんはまさしく仰天したらしく、しばらく

私の顔をマジマジと見てから、

「そう。中学生かと思った。ごめんね」

と言い、またニコニコして買い物ですませ、帰って行った。

それだけなら何の事はない。

たまにいる変な客ですむ。

ところが大原さんは、それから毎日店に現れるようになった。

しかも必ず私がいる時。

たまに私のシフトが変わって不在だと、理美達に尋ねるらしい。

あの子は何時に来るのか、と。

理美達も最初は面白がっていたのだが、段々危険を感じたらしく、

「茜、店長に相談した方がいいよ」

と忠告してくれた。しかし私はそんなことはしたくなかったし、別に大原さんに危害を加えられるとは思わなかったので、

「大丈夫だよ」

とだけ答えて、店長には何も話さなかった。

「やア、茜ちゃん。元気？」

大原さんはまるで友達みたいな口調で話しかけて来た。私は苦笑いして、

「いらつしゃいませー」

と応じた。

大原さんはニコニコしたまま雑誌コーナーを通り過ぎ、一番奥の飲料コーナーでいつもの紅茶を取り出し、戻りながらパンの棚のあんぱんとサンドウィッチを取り、レジに来た。

「今日は何時まで？」

「はっ？」

私はキョトンとした。

今までそんなことを訊かれた事がなかったからだ。

とうとうストーキングを始めるのかな、とほんの少しだけ心配になつて答えあぐねていると、大原さんは、

「ごめん。変なこと訊いちゃったね。実はさ、ここ何日か、この辺

りで物騒な事があつたので、気になってさ」

私はレジを操作しながら、

「物騒な事？」

新聞はとっていないし、世情にあまり関心のない私には何の事がわからなかった。

大原さんはお金を財布から取り出して、

「暴力団の抗争があつたんだ。拳銃を撃ち合つたんだよ。だから茜ちゃんが怖がっていないかと思つてさ」

「はア」

仮に知つていても、暴力団の抗争くらいで怯える程、私はヤワな神経の持ち主ではない。

危害が及ぶようなら、組事務所まで乗り込んで落とし前をつけさせてもいいくらいだ。

「とにかく、気をつけるに越した事はないから。それと」

と大原さんはスーツの内ポケットから名刺入れを出して一枚名刺を取り出し、

「何かあつたら、ここに連絡して。携帯の方でも大丈夫だから」

「はい」

私は大原さんのもの凄くマイペースな行動に気圧されたまま、名刺を受け取ってしまった。

「じゃあね」

大原さんはニコニコしたままコンビニを出て行った。

私は名刺を手にしたまま、しばらく呆然としてしまった。

「大丈夫、茜？」

理美の声に私はハッと現実世界に戻った。

心配そうな理美の顔がカウンター越しにあった。

私は名刺を制服のポケットにねじ込んで作り笑いをし、

「大丈夫だよ。それよりさ、暴力団の抗争があつたんだって？」

と話をそらせた。理美は納得がいかない顔をしていたが、

「ああ、そんなこともあつたみたいね。他のバイトの子も何か言っ

てた気がする」

「そう」

理美もどちらかというところなことはないタイプなので、それほど不安に思っていないようだ。

「確かまだ犯人が捕まっていないんだよ。そう考えると、ちょっと怖いかな」

理美はそう言いながらも全然怖がっている様子はない。

「むしろあの大原とか言う男の方がよっぽど危険だよな」

「そうかも」

と私は同意してクスツと笑った。

やがて外はすっかり暗くなり、仕事帰りのサラリーマンやOLのお姉さん方が大勢歩いている時間になった。

そして理美も退店した。

店は店長と私だけだ。

でもこの時間になると、私の「しもべ」達5人が呼びもしないのに集まって来る。

見た目があからさまに悪い連中だが、よく話をしてみるとそれほど悪い奴らではない。

「お疲れっす、姐さん」

「しもべ」の中のリーダーであるタカシが挨拶しながら入って来た。店長はタカシ達に気づき、そそくさと事務室に逃げ込んだ。私は

小声で、

「あのね、その『姐さん』はやめてって言ったでしょ。私はあんた達の姉さんじゃないんだから」

「そうでしたね、姐さん。すいません」

タカシは申し訳なさそうに頭を下げながら、なおも「姐さん」を口に出している。

バカなのかな、こいつ？

「じゃあ何てお呼びすればいいんですか？」

とサブリーダー格のシヨウが言った。

私はシヨウに目をやって胸のネームプレートの「如月茜」を指差し、

「名前でいいんじゃない、普通に」

「そんな。それは無理っす。お名前でお呼びするなんて、恐れ多くてできないっすよ」

タカシが言う。

シヨウが頷く。他の3人も頷いている。

私は呆れて、

「じゃ、もうここには来ないで」

「そ、そんなア！ 自分ら、もう姐さんについて行くって決めたんすから、そんなつれない事おっしゃらないで下さい」

タカシが泣き出しそうな声で言う。

私は店長が事務室の防犯カメラでこちらを見ているのを思い出し、

「とにかく、仕事の邪魔。何も買わないのなら、帰ってよ」

と5人を追い立てた。タカシが、

「取り敢えず、ゴミ箱の掃除してます」

と言い、4人を引き連れて外に出て行った。

私は大きな溜息を吐いた。

「何なのよ、あいつらは」

タカシ達と入れ違いに、サラリーマン達が何人か入って来た。

「いらっしやいませー」

私は営業スマイル全開で挨拶した。

タカシ達はゴミ箱の掃除とか言っただけで、随分と長い時間戻って来なかった。

別に戻って来て欲しいわけではないし、あいつらにゴミ箱の掃除を任せたりもしないから、そんなことはどうでもよかったのだが、それにしても出て行ってから1時間は経っていたので、少しだけ気になってはいた。

「どうしたんだろ？」

私は外に出た。入り口脇にあるゴミ箱は、片づけられた様子もなく、タカシ達の姿もない。

「何やってんの、あいつらは」

結局口ばかりで何もしてないのか、とも思ったが、あいつらがゴミ箱の掃除を自主的に始めてからもう半月以上。今まで一度だってサボった事はなかった。

やはり何かあったと考える方が正しい気がした。

「姐さん！」

シヨウの声が後ろでした。私は声に応じて振り返ってしまった自分が情けなかったが、

「どうしたの？」

と、息を切らせて近づいて来るタカシ達に尋ねた。

「ゴミ箱に自分の家のゴミを捨てようとしている奴がいたんすよ。」

で、注意しようとしたら、ゴミをゴミ箱に押し込んで、もの凄い勢いで走り出したんです」

とタカシが息を整えながら言った。それを受けてシヨウが、

「偉く速い奴で、俺達も必死に追いかけたんすが、逃げ切られてしまいました」

「そこまで頑張らなくてもいいわよ。捨てられてしまったんだから、こちらで処分するしかないでしょ」

と私が言うと、タカシ達は、

「同じ事をした自分らは、姐さんにこつてり説教されたんすけど」と言いたそうな顔で私を見た。

私は苦笑いして、

「とにかく、ありがとう。でももういいよ、追いかけて。追いかけて厄介なことになったら、その方が困るから」

「はア」

タカシは不服そうだったが、シヨウが、

「それなんすよ。俺、はつきり顔見たわけじゃないんすが、あいつ、

多分日吉会のチンピラっすよ。この辺で何度か見かけてるんで、ま
ず間違いないっす。ガラが悪い奴っすから、目立つんすよ」
と口を挟んだ。

5人の中で一番身体が大きくて、強面のシヨウがそう言うのだから、相当凶悪な顔をしているのだろう。

「ヤクザなの？」

私が興味深そうに言うと、シヨウが、

「あ、あいつはやばいっすよ、姐さん。いくら姐さんが強くても、
あいつは無理っす。命が危ないっすよ」

と妙に弱気なことを言った。タカシも、

「そうそう。あいつは、この辺じゃ、どんな不良も道をあける程の
喧嘩の達人なんすよ。確か以前、元プロレスラーを病院送りにした
とか」

「プロレスラーは引退すると途端に弱くなるわよ」

と私が反論すると、シヨウが、

「そのプロレスラーがどれほどの奴かは知らないっすけど、とにかく
あいつはやばいっす。俺ら、追いかけてるうちに気づいてちよっ
とだけビビったんすから」

私はそいつがそれほど強いとは思わなかったけど、一つ疑問が湧
いた。

「そんなに強い奴なのに、どうして逃げたのかしら？ 私より強い
のなら、あんた達なんかあつと言う間に片づけられるでしょ」

「そ、そうっすね。何であんなに必死になつて逃げたんだろ？」

タカシ達は顔を見合わせて考え込んだが、謎は解明しないようだ。
私は一つの仮説を導き出し、

「とにかく、何を捨てたのか見てみましょうか」

とゴミ箱の蓋を外して、中を覗いた。

「あつ、その大きなレジ袋っす。多分生ゴミっすよ。何か変な臭い
がしてますから」

一緒に覗き込んだタカシが言った。

私はその大きなレジ袋をゴミ箱から取り出した。
歩道を歩いている人達がジロジロ見ているので、

「何だ？ 文句あんのか？」

とシヨウがいきなり通行人達にガンを飛ばし始めた。

「やめなさいよ、恥ずかしいな！」

私はシヨウの頭をパコンと叩いた。

「すみません」

私は5人を引き連れて、コンビニと隣の建物の間を抜け、裏口に
回った。

「ここなら人目につかないか」

私はレジ袋を下ろし、結んである部分を開いた。

「うわっ……」

タカシの言った通り、中身は生ゴミだった。

それもドロドロの残飯に、腐った肉のようなものが混ざっている、
吐きそうになるようなものだ。

「今度は逃がさないように私が見張るか、それとも……」

その独り言をシヨウが聞き逃さずに、

「やばいつすよ。やめた方がいいいつすよ」

「でも、こんなもの何回も捨てられたら、迷惑でしょ。その組の場
所教えて。バイト終わったら、話つけに行くから」

私の言葉にタカシ達は固まった。

命知らずな女だと思っているのだろう。

「ちよつと持ってて」

とレジ袋をシヨウに渡し、私は事務室に入ってゴム手袋を持って戻
った。

「どうするんすか？」

シヨウにレジ袋を持たせたまま、私は手袋をはめると、生ゴミの
中に手を突っ込んだ。

「いつ！」

少しハネが飛んでシヨウの顔にかかった。

「ごめんね」

私はニコツとして誤摩化した。そして、
「やっぱり。そりゃ走って逃げるわけよ」

と言うと、中から残飯まみれの拳銃を取り出した。

「ゲエエエツツツ！」

タカシ達は腰を抜きそうなくらい驚いていた。

「チャ、チャカツスカ？」

ショウがやつとそれだけ声に出した。

私は残飯を拭い落として、

「そうね。これさ、使い捨て用に密造された拳銃みたいね。壊れてるわ」

「け、警察に連絡を……」

と慌てるタカシに、

「あとあと。取り敢えず、組事務所の場所教えて。ちょっと話つて来るから」

と私が言うと、タカシは泣きそうな顔で、

「ダメつすよ、姐さん。殺されちまいます。教えられません」

「大丈夫よ。あんた達の姐さんをもう少し信じなさいよ」

私は口にしたくなかったのだが、「姐さん」効果を期待してそう言ってみた。そしてダメ押しで、

「私がそんなに弱いのなら、その私に負けたあんたらはどうしようもないほど弱いつて事よ。そんなふうに思いたくないでしょ？」

タカシ達は顔を見合わせて、小声で何か話している。

私はイライラして、

「何でもいいから場所を教えなさい！」

「は、はい」

私の声のトーンが変わったのに気づいたショウが応えた。

私はその後店に戻り、退店時間まで業務をこなし、
「お疲れ様でした」

と店長に挨拶をすませてタイムカードをガシヤンと押して外に出た。
「姐さん」

待ち合わせ時間には遅れるなど厳しく言っているだけあって、タカシ達はすでに建物の裏にいた。

「タカシの携帯の番号教えてよ」

私がバッグから携帯を取り出して言うと、何故かタカシは顔を赤くして、

「は、はい」

と言うと、赤外線通信で私の携帯にデータを送信した。他の4人の視線がタカシに注がれていたが、どういうわけかそれは敵意に満ちたものだった。

何でだろう？

しかしそれには構わず、

「片がついたら、あんたの携帯に連絡する。そしたら、この人に電話して、さっきの拳銃を渡して、組事務所の場所も教えてあげて」と大原さんの名刺を渡した。

「ええっ？ ああ、姐さんに付きまといてる変態野郎にですか？」

タカシは不満そうだ。

私は携帯をしまつて、

「あの人は警察の偉い人なの。あんた達に話してもわからないだろうけど、警察庁って言う日本の警察の一番上の組織の人なのよ」

「そこもあんな奴がいるようじゃ、大したことないっすね」

シヨウが言った。タカシ達はそれに応じて笑った。

私はムツとして、

「私の言う通りにできないってこと？」

「と、とんでもないっす！」

タカシ達は最敬礼して応えた。私は満足して大きく頷いた。

さて、ちよつと運動して来るか。

タカシ達に教えられたその場所は、意外にも私の住んでいるアパ

ートからそれほど離れていないところにあつた。

あいつらの言う通り、ゴミを捨てて逃げた奴がそんなに強いのなら、そしてそれほど有名なのなら、私の耳に入らないはずはない。

そして見かけない事もないはずだ。

どうも逃げたのには何かまだ裏がある。

拳銃の事もあるだろうが、本当は全然強くないのでは、という疑惑。

「ここか」

私は小さい交差点の角に建つ5階建てのビルを見上げた。

入り口の脇にある看板に、「5F 日吉建設株式会社」と印字されている。

ま、「暴力団 日吉会」とか書いてあるはずもないんだけど。

「まだ誰かいるようね」

日吉建設の窓には、まだ明かりが灯っていた。

私はビルの玄関を入り、エレベーターに向かった。

誰もいない。

今は午後10時過ぎだから、他の会社は皆閉まっている。

エレベーターのボタンを押すと、5階に停まっていた表示が動き出した。

機械音が響き、エレベーターが到着した。

チン、という音と共に扉が開く。

私は中に入ろうとしたが、中から5人の強面のオジさん達が降りて来て、行く手を遮られた。

「おい、何だ、お前。中学生がこんな時間までうろろしていると人さらいに連れて行かれるぞ」

と1人のオジさんが今時誰も言わないような事を言つて来た。

私は「人さらい」という言葉より、「中学生」に反応した。

「失礼ね。私は19歳。中学生じゃないよ」

すると5人のオジさん、いやもうそんな呼び方する必要はないな、5人のジジイ共は大笑いを始めて、

「中学生じゃなかったか。そりゃ悪かったな、お嬢ちゃん。どっちにしてもここは子供の来るところじゃねえんだ。帰りな」と別の1人が言い放った。

私はキツとそいつを睨んで、

「あんた達、あの日吉建設の連中だね。そこに用があつて来たんだよ。組長はいるかい？」
と怒鳴った。

5人の親父共は互いに顔を見合わせた。

「何言つてやがるんだ、このガキヤア。ふざけた事抜かしてると、ぶつ殺すぞ」

とさらに別の1人がいきがり始めた。

「いるのかいないのか、それだけ答えな。私は今、機嫌が悪いんだよ」

その言葉に嘘はなかった。

さつさと片づけて帰ろうと思っていたのに、こんな余分な連中に邪魔された挙げ句、中学生呼ばわりされて子供扱いされたのだ。

もう限界に近かった。

「このヤロウ、舐めた口利きやがつて！」

1人が私を押さえつけようと飛びかかって来た。

私はスツと後退し、そいつの後ろに回り込むと、

「邪魔すると怪我するよ」

と他の4人に言った。

「何だ、こいつ？ 只のガキじゃねエぞ」

親父共は後ずさりしながら言った。

その時、後ろにいたもう1人が懲りもせず、

「この！」

とまた襲いかかって来た。

「二度目は手加減なしね」

私はそいつをヒラリとジャンプしてかわし、首に手刀を叩き込んだ。

「グウッ……」

そいつはそのまま前のめりに倒れた。4人は仰天して私を見た。

「次は誰？」

「くそっ！」

束になつてかかれれば勝てると思ったのか、残りの4人はいつせいに私に飛びかかって来た。

「バーカ」

私は天井までジャンプし、互いにぶつかり合った愚か者達を一気に蹴倒し、エレベーターに乗り込んで先に進んだ。

（噂の男はいなかったみたいだ。下っ端で、もう帰ったのかな？）

扉が開き、その廊下の先に「日吉建設株式会社」の看板の掛かったドアが見えた。

どうやら下の親父共の連絡があつたらしく、中からドヤドヤと柄の悪そうな、そして同時に頭の悪そうな連中がわんさか出て来た。

「てめえか、小娘。ヤクザ舐めると、命落とすぞ、コラアッ！」

その中でも特にバカそうな奴がしゃしゃり出て来た。

私はニコツとして、

「何人いるの、あんた達？」

するとそのバカが、

「30人くれエいるぞ。もう降参しても許さねエからな」

と胸を張って言ったので、私はそれを鼻で笑って、

「冗談でしょ。私と喧嘩するつもりなら、もう一ヶタ人数集めてからにしろ。怪我したくない奴は、下がんなよ」

「このガキ、言いたい放題言いやがって！ やっちまえ！」

30人は確かにいたようだ。

しかし、そんな枯れ木も山の賑わいのような連中が例え300人いても今の私の敵ではない。

「邪魔！」

私はそう叫ぶと、まさしく目にも留まらぬ速さであっという間に

そいつらを倒し、日吉建設の中に入った。

「魂^{たまげ}消たな。あいつらもそれほど弱くねエのによ」

ドアの向こうにいたのは、普通の19歳の女の子なら間違いなく泣き出してしまうような強面の男だった。

しかし身体はそれほど大きくない。

多分、元ボクサーか、空手家だろう。

「あんた、まさか……？」

私は眉をひそめた。その男はフツと笑って、

「察しがいいな。俺がお前の店のゴミ箱にブツを捨てた人間だよ」と言った。私は瞬時にその男の強さを感じた。

（こいつ、本当に強い。何、この殺気は？）

「お前の事は少し調べたよ。あの不良共がぶちのめされたって聞いたからな。あいつらも相当この辺じゃ鳴らしてた連中だ。そいつらをまとめて締めたお前が強いってことはわかっていたつもりだが、ここまで強いとはな。ちょっと本気出さねエと、ヤバいかもな」

強面の男は軽快なフットワークでシャドウボクシングを始めた。

かなり俊敏だ。今までの連中とは、明らかにレベルが違う。

「何であのゴミ箱に拳銃を捨てたの？」

私が尋ねると、男はせせら笑って、

「まだわかんねエのかよ。お前をおびき寄せるためだよ。見事に蒔いたエサに食い付いてくれて嬉しいぜ。俺はな、つえエ奴と戦いたくって仕方がねエんだよ」

「はア？」

私はその返答に呆気に取られた。

「社長はもつとマシなとこに捨てて来いって言ってたけどさ、俺はどうしてもお前と拳を交わしたかったのさ。ま、俺の敵じゃねエだらうけどな」

男はそう言うのと素早いステップで私との間合いを詰め、攻撃を開始した。

「くっ！」

私は男のショートフックを交わし、後退した。

「どこまで退がる気だ、嬢ちゃん。後ろは壁だぜ」

一見すると、私は絶体絶命に見えた。

「ちよつと待ってね」

私はそう言うときスニーカーを脱いだ。男はヘツと笑って、

「何のマネだ、嬢ちゃん？ 靴脱いでどうするつもりだ？」

「ちよつとだけハンディを軽くしたのよ」

私は脱いだスニーカーをドアの脇にあった大きな壺にぶつけた。

壺はスニーカーが当たると粉微塵に砕け散った。

男はそれを見てギョツとしたようだ。

「な、何だ？ 何のトリックだ？」

「トリック？ 私の履いていたスニーカーは片方だけで10kgあるのよ。これで少しは速く動けるようになったわ」

「なっ、何だと？」

私は早く帰リたかったので、容赦しなかった。

「えっ？」

多分男の目には私の動きは見えなかったはずだ。

「世の中には上には上がいるってことを知らない！」

鳩尾に左の肘鉄を一発。男は白目を剥いて倒れた。

「後は社長か」

私は先に進んだ。

残念な事に、社長はいなかった。

あの強面がやられたのを監視カメラで見えていたらしく、裏口から逃走した後だった。

「ここから先は、大原さんに任せよっか」

私はタカシの携帯に連絡し、日吉建設を出た。

コンビニに戻ると、タカシ達が待っていた。

店長は雑誌コーナーの隙間から、外を窺っていた。

「姐さん！」

タカシ達は嬉しそうに私に近づいて来た。

何か飼い犬がエサを待っていたような光景だ。

ちよつと気になるのは、5人共顔を少し怪我している事だった。

「どうしたの、その顔？」

「いえ、別に何でもありません」

今度は5人が5人共顔を赤くしている。私は首を傾げた。

「あんた達、わけわかんないわ」

翌日、私はいつものように夕方からコンビニに行った。

すると店長がガタガタ震えながら、私を出迎えた。

「ひ、非常に言いにくいんですが、如月さん」

「はい？」

唐突な言葉に私はキョトンとしてしまった。

店長は唾を呑み込んで、

「今日で辞めていただけませんか？ もちろん、今月分は全額支給しますので」

と言いながら、後ずさりした。

私は目の前が真っ暗になった。

「ど、どうしてですか？ 私、何かミスしましたか？」

身に覚えのない私は、真顔でそう尋ねた。

すると店長は、

「あ、貴女がこのままここにいるなら、他のアルバイトの子がみんな辞めると言っんです。今日休みの今坂さんは続けてくれるらしいのですが」

「……」

完全な誤解だ。私はあきらめた。

いつかこんな日が来るのではないかと思っていたのだ。

「何人かの子が、貴女にお金を脅し取られそうになったとか……」

「そんなことしてませんよ！」

私が反論すると、店長は事務室の隅まで逃げて、
「わかってます、わかってますよ。そのことは別に警察にも言いませんし、その子達も訴えないと言ってますから」

私はもうどうでもよくなっちゃった。

誤解とは恐ろしいものだ。つくづくそう思った。

「わかりました。給料はいいです。ご迷惑をおかけしたお詫びに、皆さんで使って下さい。お世話になりました」

「あつ、ちよつと！」

私は店長が呼び止めるのを無視して、事務室から飛び出した。

「何なのよ、ホントに……」

他のバイト先を探そう。

それしかない。

次のバイト先では、もつと可愛い子を演じよう。

今時の子になり切る。

怖がられないように、ちよつとバカっぽい喋り方にしよう。

そうすれば、こんなことは二度と起きない。

理美はびつくりするだろうな。

彼女にだけは新しいバイト先を教えておこう。

そんなことを思いながら、アパートへの道を歩き始めた時だ。

「如月さん」

とまたあの間延びした声がした。神保君だ。

「何？」

私はできるだけ穏やかな声で顔で言った。すると神保君は、

「忙しくない？」

「うん、忙しくないよ。どうしたの？」

「これ……」

と神保君は手紙のようなものを差し出した。

「えっ？」

彼は頭を下げたままそれを私に向かって突き出している。

私は一瞬気が動転したが、

「あ、あのさ、えーと……」

と返答に困っていると、神保君は顔を上げて、

「これ、今坂さんに渡して下さい。とても直接渡せないの」と言った。頭が煮えたぎるのに一秒とかからなかった。

「自分で直接渡せ、この愚図！」

私は仰天してへたり込んでいる神保君を残し、その場を去った。

何なのよ、私の人生は！ その日は散々な一日だった。

「それで、そのしもべの5人はどうして怪我していたの？」

葵がソファに座って尋ねた。美咲はパソコンから顔を上げて、

「茜ちゃんは知らないんですけど、タカシって言う子の携帯にある茜ちゃんの携帯の番号を他の4人が教えろって騒いで、喧嘩になったらいいんです。それで怪我をしたんですって」

とクスクス笑いながら言った。葵も笑って、

「茜って結構モテたのに気づいていなかったのね。大原君とそんなところで出会っていたのは初耳だわ」

「ええ。その話は私も聞いた事がありませんでした。あの2人、案外運命の人同士なのかも知れませんか」

美咲がそう言くと、葵は美咲を見て、

「貴女と外務省君も運命の人同士かもよ」

とからかった。美咲は赤面しながら、

「それを言うなら、所長と篠原さんだって……」

「あいつは運命じゃなくて疫病神よ」

葵はムツとして言った。そして、

「それより茜はどこまでアイスクリーム買いに行ってるのよ。待ちくたびれたわ」

「そうですね。どこまで行っ たんでしょう?」

その頃茜は、大原とコンビニにいた。

「奇遇だね、茜ちゃん、こんなところで会っ なんて」

「ほ、ホントですね」

茜はニコニコして言っ た。

「覚えてます、大原さん? 私達、ここで初めて会っ たんですよ」

「あっ、そうか。ここがあ のコンビニだったのか」

2人はニコニコして顔を見合わせた。

葵のところにアイスクリームが届いたのは、それから一時間後だった。

バスを待つ間に

私はふと気づくと、見知らぬ町のバス停に佇んでいた。

私の前には、たくさんの人が皆俯き加減にバスを待っているのが見えた。

誰も彼も笑顔がない。何故だろう？

私も笑顔ではないのがわかる。何か物悲しいのだ。

バス停の時刻表を見ても、いつバスが来るのかわからない。

私は腕時計もしていない。携帯もどこかに置き忘れたらしく、バッグの中にもない。

一体今は何時なのだろう？

辺りには深い霧が立ちこめていて、全く時刻がわからない状態だ。

明るいような、暗いような……。

振り向くと、私の後ろにもたくさんの人達が並んでいる。

やっぱり、皆一様に笑顔がなく、俯いている。

何でこんなに心が重いのだろうか？

理由がわからない。何が原因なのか、思い当たらない。

あ。

そんな事を思い巡らせていると、バスが走って来た。

霧の中をかい潜るように、車体が近づいて来る。

そしてバスは停車し、ドアが開く。

先頭に立っていたおじいさんが乗り込む。次に小さい女の子。

中年のサラリーマン、おばあさんと続いた。

そして、私が乗り込もうとした時、

「待ちなさい。貴女はまだ乗ってはいけない。私が乗ります」

と止められ、その人が乗り、バスは出てしまった。

「ああ」

私は、振り返ったその人の顔を見た。

伯母さん。私の父の姉。どうして突然現れたの？

不思議に思っていると、どこからか、私を呼ぶ声が聞こえた。

「ああ、意識が戻りました」

？ 何？ どういう事？

目を開けると、父と母、そして妹と弟が泣きながらこちらを見ているのに気づいた。

「良かった。助かって」

母はそう言つと泣き崩れた。父が母を支えている。

そうか。私は、旅行に出かけて、事故に遭つたんだ。

バスが崖から転落して……。

たくさんの人が、苦しんでいるのが見えて……。

気を失つたのだ。

「伯母さんは？」

私は不意にそう言つた。父と母がギョツとする。

伯母は私と一緒にそのバスに乗っていたのだ。

「……」

誰も答えてくれないのが、まさに答えだった。

そして、あの夢の意味を理解した。

私はあの世へのバスに乗れなかったのだ。

乗りそうになっているのを、伯母に助けられたのだ。

そして、伯母は私の代わりにバスに乗ってくれたのだ。

涙が溢れた。止まらなかった。

喜べない。助かった事を喜べない。

私は泣き続けた。声が出なくなっても、涙が枯れても、泣き続けた。

毒舌あの世漫才

「はい、どうもどうも、本日もたくさんの方の死者の方にお集まりいただきまして、ありがとうございます」

「そんな陽気に声かけるなよ。みんな死んだばかりで滅入ってるんだから」

「関係ないだろ？ 俺達漫才師なんだから、陽気に行かないと。俺達が陰気じゃ、意味ないだろ？」

「そうなんだけどさ」

「それではですね、これから皆さんにこの世界の決まり事をお伝え致します」

「大事なことですから、よく聞いて下さいね」

「決まりを守らないと、最悪死ぬ事になりますのでご注意下さい」

「もう死んでるだろ？」

「バカヤロウ、ここで死ぬと生き返るんだよ」

「それならその方がいいじゃないか」

「何もわかっていないな。ここに集まってる方々は、みんな生き地獄を味わった人達なんだよ。みんな何があっても生き返りたくないの」

「何だよ、それは。意味わからないぞ」

「お前バカが原因で死んだのか？」

「違うよ。変なこと言うな」

「ま、こんな奴でもやっていける世界ですから、そんなに緊張しなくて大丈夫です」

「今もの凄くバカにされた気がするんだけど」

「気がするんじゃないくて、実際バカにしてるから」

「余計悪いよ。ちゃんと説明しろよ」

「この世界で守って欲しい事。まず1つ」

「はい、1つ目です」

「死神さんには季節の付け届けを怠らないこと」
「そんな決まり事ないよ」
「2つ目です」
「ないって言うてるのに先に進むのかよ」
「閻魔大王の事は、朝昼晩、寝る前に必ず拝むこと」
「だからないって、そんな決まり事」
「3つ目」
「おい、勝手に進むなよ」
「1日1回は化けて出て、生きてる人を怖がらせる事」
「極めつけにないよ。ちゃんと説明しろよ」
「だからしてるだろ」
「はア？ 訳わかんないこと言うなよ。してないだろ」
「してるよ」
「してないって」
「だから、何も決まり事はないって説明してるでしょ」
「いい加減にしろ」
「どうも、ありがとうございました」

どうしても知りたい

朝から妙だ。

私はごく一般的なサラリーマン。

のつもりだ。

しかし、今日はどうも様子がおかしい。

本社勤務になったため、実家に妻と子供を残しての単身赴任の生活を始めて半年。

それなりに今の環境にも慣れ、職場でも意思疎通がしっかりと出来て来た。

だが。

今日は違う。

具体的に何という事は出来ないが、会社の間人ばかりでなく、通勤途中に出会う人達までが、私を見てクスクス笑っているのだ。

鼻毛でも出ているのだろうかと思つて駅のトイレの鏡で顔を見たが、鼻毛は出ていない。

服装もいつもと同じ。

ワイシャツが飛び出していたり、靴下がチグハグな訳でもない。

第一、私を見ている人達は、身体ではなく、顔を見て笑っているのだ。

いくら鏡で見ても、何もわからない。

社内はともかく、通勤途中の人までが私を引っ掛けようとするとは考えられない。

どうしても理由が知りたい私は、同じ課の部下に尋ねてみた。

「私の顔、何か変かな？」

「えっ、課長、ご存じでなかったのですか？」

部下は私の質問にビックリした顔で言った。

「どういう意味だ？ そんなにわかり易い事なのか？」

「はい。もしかして課長、私をからかっているのですか？ 本当はご存じなのでしょう？」

部下は苦笑いした。私は大真面目に、

「全く何の事かわからんだ。教えてくれないか」

「本当ですか？」

部下はそれでも疑いの眼差しで私を見ている。

「本当だ。私は人をからかう趣味はない。何がおかしいのだ？」

部下はようやく私が本当に何も知らない事を信じてくれた。

「課長は新聞をお読みではないのですか？」

「新聞？ ああ、いつも社に来てから全紙目を通しているが」

部下はやつと合点がいったという顔をして、

「そうでしたか。ではそこに答えがありますので、ご覧下さい」

「新聞に答え？」

私は部下が私をからかっているのだと思った。

しかし、新聞に重要な事が掲載されていて、それを知らないがために何か致命的なミスを出かしているのかも知れない。

考えにくい事だが、通勤途中の人達まで私を見て笑っていたのだから、そうなのかも知れないと思い、私は私の机の上に届けられている朝刊を見た。

「テレビ欄の下です。そこに出ていますよ」

部下が教えてくれた。

私は言われるがままにテレビ欄の下を見た。そして凍りついた。

何故かそこには私の顔写真が大きく掲載されており、

「私はこの男と離婚します。この男を見かけたら、笑ってやって下さい」

という妻のコメントが載っていた。

取立人

俺は新橋義雄。

リストラで職を失い、生活保護を受けるために市役所に行ったが、税金の滞納があるため、難しいと言われた。

どうやら資格なしという事のようにだ。

あきらめた。そんなところで粘っているくらいなら、職を探した方がいいと思ったからだ。

しかし、それも甘かった。

俺は三十代後半。妻も子供もないお気楽人生だったが、それでも遊んで暮らせるほどの蓄えもない。

ハローワークも冷たかった。と言うより、俺にはそう感じられたという事かも知れないが。

そんな訳で、俺はつい消費者金融に頼ってしまった。

一時はそれで飢えをしのぎ、俺は生き延びる事ができた。

ところが、そこから別の苦難が始まった。

俺が借りたのは所謂闇金^{いわゆる}だったのだ。

とにかく催促が激しく、俺はアパートに帰れないほどだった。

最初は友人の家などを転々としていたが、そのうちにそこまで見つけ出され、乗り込まれてしまった。

友人も激怒してしまい、俺は追い出された。

そして行き場を失い、公園やガード下で夜露を避ける生活を始めた。

ところが、絶対に見つかるはずがないと思っていたのに、闇金は俺を探し出し、脅した。

「金返せよ、おっさん。ふざけてるんじゃないぞ！」

ヤクザと変わらない凄みで、闇金の取立人は俺に怒鳴った。

「わ、わかった。返す。返すから」

俺は遂に決断し、そいつを伴って歩き出した。

「おい、どこに行くんだよ？」

「この先に親戚がいる。そこで金を貸してもらってから」

俺は咄嗟に嘘を吐いた。取立人は訝しそくに俺を見て、

「嘘だったら只じゃおかねえぞ」

「あ、ああ」

俺はトボトボと道を歩いた。

人もいない。ここなら。

「おい、家がなくなつて来たぞ。てめえ、騙したな!？」

取立人が怒り出した。俺は隠し持っていた護身用のナイフで、いきなりそいつの胸を刺した。

「うおお……。てめえ……」

完全に不意を突けた。取立人はそのまま仰向けに倒れ、死んだ。

俺はナイフを引き抜き、近くの川に投げ捨てた。

これで逃げられる。そう思った。

俺は安心して切つてアパートに戻った。

そして、久しぶりに暖かい布団で眠った。

しかし、そううまくは行かなかった。

また取立人が現れたのだ。

しかも、殺したはずのあいつが。

死んでも取り立てに来るなんて、何て執念なんだ。

「てめえ、金返せ！ それと俺の命も返せよ！」

窓を少しだけ開けて見てみると、胸から血を流したあいつが立っていた。

「おい、いるんだろ！？」

奴はドアを叩く。顔色は青白くなっていて、まるでゾンビだ。

俺は怖くなって、窓から逃げ出した。

そして近くの公園の滑り台の下の穴に隠れた。

「おい、何逃げてるんだよ！」

奴が覗いていた。

「わあああ！」

俺は絶叫して駆け出した。

どこに逃げても奴は追って来た。

俺はとうとう耐え切れなくなり、海に飛び込んで死んだ。

これで解放される。そう思った。

しかし。

「てめえ、何死んでるんだよ！？ 金返してから死ねよ、おい！」

俺はあの世に行っても、奴に追い回されている。

もう逃げ場はなかった……。

幽霊トンネル

幽霊出没スポットで、五本の指に入る「トンネル」。

今日は、そんなトンネルの中でも、1、2を争う恐怖のトンネルのお話をしましょう。

関東で有名なのが、G県M市のトンネルです。

白い服を着た女性の霊が目撃されています。

赤い車で通ると、出現率が高いという噂があるそうです。

この話は、偶然現地に行ってしまった気の毒な者の体験談です。

丸山鉄也。23歳。

大学を卒業し、地元の企業に就職して早3ヶ月。

業務にも慣れ、職場の人達との交流もうまくいくようになり、充実した日々を過ごしていました。

そんな鉄也君が、上司に言われて隣県のT県に出張しました。

出張と言っても配達を兼ねた挨拶のようなもので、仕事そのものは何事もなく完了しました。

運転免許は大学入学前に取得していたものの、実際遠距離を走行したのは初めてだったので、鉄也君は帰り道で曲がるところを間違え、会社のあるI市ではなく、逆の方向へと進んでしまいました。

それに気づいたのは、随分と帰路から外れてしまってからでした。

「どこだ、ここ？」

地図も持っていない上、乗っているのはナビがついていない社用車。

鉄也君は完全に自分がいる場所がどこなのかわからなくなっていました。

携帯は圏外、いくら走っても人家はなく、公衆電話も見当たりません。

しかもさらに悪い事に、雨が降り出し、太陽で方角を割り出す事も出来なくなりました。

「参ったな、ホントに」

鉄也君は普段からあまり焦ったりしない性格なのですが、さすがに狼狽えていました。

時刻は午後6時。

まだそれほど遅い時間ではありませんが、会社にはもう誰もいません。

「直帰していいから」

上司にはそう言われていたのですが、それでも連絡を入れられなかったのは悔やまれました。

あいつ、どこかでサボってるんじゃないの？

そんな風に思われるのでは、などと考えたりもしました。

「何とか、国道に出ないと」

鉄也君は勘を頼りに道を曲がり、広い道路に出られないかと試行錯誤しました。

でも、周囲の風景はますます山深い様相を呈して来ており、これ以上動き回るのは得策ではないと思うようになりました。

「何で地図を忘れたんだろう」

今更そんな事を悔やんでみても仕方ないのですが、そんな事を考えてしまう程、鉄也君は追いつめられていました。

「あつ」

ようやく国道に出られました。

「確か、こっちでいいはず」

鉄也君は迷わず右折しました。その国道は、丁県に行く時、走った記憶があつたからです。

しかし、鉄也君は思い違いをしていました。

彼が走ったのは、その国道のバイパス。

今彼が走っているのは、旧道。今はほとんど通行がない道です。

彼はその時、その先に例のトンネルがあるとは夢にも思っていないで、赤でした。

その上、鉄也君の乗る社用車は、会社のロゴが入ってはいましたが、赤でした。

サーッと降り続ける雨の中を、鉄也君の乗る赤い車が走っています。

車はやがて緩やかなカーブを曲がり、コケだらけのトンネルに差し掛かりました。

「！」

鉄也君はトンネルの入口に気づき、ギョッとしました。

G 県の者なら、大抵の人が知っている話なのです。

彼はその話を思い出しました。

「やば、ここあのトンネルじゃないか。戻ろう。しかもこの車、赤だし…」

鉄也君は慌ててブレーキを踏み、切り返しを数回して、方向転換しました。

「危なかったな」

入る前に気づいて良かったとホッとしていると、何故かまた前方にトンネルが見えて来ました。

「バカな…。そんなはずない！」

鉄也君はもう一度切り返しをし、車を方向転換させました。

「畜生、ビビリ過ぎだぞ。方向変えたつもりで、そのまま進んでたんだな」

恐怖のあまり、独り言が多くなって来ています。

霊の力で惑わされているのでは、と思いそうになるのを必死にやめ、鉄也君は車を走らせました。

「嘘だ…」

何故かまたトンネルが見えて来ました。

急ブレーキをかけ、車を停めます。

彼は外に出て、周囲を見渡しました。

「おかしい。どっちを見ても、同じに見えるぞ…」

彼はおかしくなりそうでした。

その時です。

後ろからライトに照らされ、ギョツとして振り返ると、そこには畑から帰る途中の風体のおじいさんが乗る軽トラックが停まっていた。

「どうしたい、あんちゃん？」

おじいさんは窓から顔を出して尋ねました。

「道に迷ったみたいで。I市に行くには、どちらに行けばいいのですか？」

「何だ、Iに行くのなら、このままトンネル越えればいい」

「そ、そうですか」

鉄也君はおじいさんの言葉に顔色を変えました。おじいさんは、

「そうか、幽霊が怖いんか。そんなら、俺のあとついて来い。そうすれば、怖くねえだんべ」

と笑って言いました。鉄也君はおじいさんに臆病者と思われたのが悔しかったのか、

「いや、その、道がわからなくてですね…」

と言い訳めいた事を口にしました。

「ま、どうでもいいや。とにかくついて来いや。間違いないから」

「は、はい」

とつと走り出す軽トラに驚き、鉄也君は車に戻ると、おじいさんを追いかけました。

おじいさんは躊躇う事なくトンネルに入り、そのままのスピードで走って行きました。

「凄いな、あのおじいさん。全然ビビってない」

これが年の功と言う奴か。鉄也君はそう思いました。

「いつ！」

入ってすぐに、彼は固まりそうになりました。

トンネルの先に、白い服を着た女性が立っていたのです。

しかも女性には足がありません。

間違いなくこの世の者ではないのです。

しかし、おじいさんの軽トラは全く気づいていない様子で、その女性の脇を通り過ぎました。

「見えない、見えない」

鉄也君もおじいさんに倣い、女性を見ないようにして進みました。

「待つてエエツッ！」

女性の叫び声が聞こえます。まるでこの世の終わりを思わせるような声です。

「空耳、空耳……」

鉄也君は女性の叫び声を無視して進みました。

女性は更に叫びました。

「そのおじいさんについて行つてはダメ！ その人は悪霊なのよ！」

逆恨み

私はどちらかと言うと、正義感が強い男である。

妻は、

「余計な事に口を挟み過ぎ。もう若くないのだから、揉め事には気をつけて」

などと妙な心配をする始末。

しかし、正義感が強い事の何が悪いのだろう。

悪い事は悪い。

そう主張しない人が多過ぎる。

だから愚かな連中が付け上がるのだ。

ある日の夜。

家に向かう途中、駅のホームで若い女性に絡む酔っ払いの男を見た。

周囲の人達は傍観しており、助けようもしない。

私は酔っ払いにも周囲の傍観者達にも腹が立ち、その場に近づい

た。

「やめないか。お嬢さんが嫌がってるじゃないか」

大声で言った。すると酔っ払いは私をギロリと睨み、

「何だ、ジジイ。関係ねえだろ。向こう行ってる」

「関係ないとは何だ！」

私はさらに一喝し、尚も女性に絡もうとする酔っ払いの肩を掴んで引き離れた。

「このヤロウ！」

酔っ払いは私に飛び掛って来た。

「何をする！」

酔っ払いの強襲をあつさりと交わし、右腕をねじ上げた。

「いてて！」

「もう行きなさい。今日の事はこの場限りで忘れるから。二度こんな事をするんじゃないよ」

酔っ払いは私の助言を聞いていたのかどうか分からないが、その場から逃げ去った。

「お嬢さん、大丈夫ですか？」

私は蒼ざめた顔の女性に声をかけた。

「は、はい。ありがとうございます」

女性は頭を深々と下げると、サッとその場から立ち去ってしまった。

私は苦笑いをして、家路についた。

私の家は住宅地の端。駅からだと一番遠いところにある。

途中、公園や交番があるが、そこを過ぎると少々寂しい通りになる。

それほど遅い時間ではないのだが、古くから住んでいる高齢者が多いため、人通りは全くと言っていいほどない。

「?」

私は、その辺りまで来て、私の歩調に合わせて誰かが後をつけて来ているような気がした。

立ち止まって振り返ってみる。

誰もいない。

気のせいだ。こんな風を感じるなんて、意外に気が小さいのかな、

と思いながら、再び歩き出した。

「！」

どうやら気のせいではない。

誰かがついて来ている。

「誰だ？」

私は振り返って怒鳴った。

しかし、何の応答もない。

「出て来い。先程の君か。文句があるなら、顔を見せたまえ！」

私は周囲を見回した。

「む？」

その時、いきなり脇道から何者かが飛び出した。

「う！」

その何者かは長い棒のようなものを持っており、私を殴りつけた。

「ぐあ！」

私は防御する間もなくこの一撃を後頭部に食らい、地面に倒れた。

「卑怯な・・・」

私は襲撃者の方を見て呟いた。そしてその正体に言葉を失った。

そこにいたのは、あの酔っ払いではなく、若い女性だったのだ。

「何故？」

私の疑問に女性は険しい形相で怒鳴り散らした。

「何故だと！？ あんたのせいで、あの親父の財布を盗み損ねただよ、ジジイ！ 余計な事しやがって！」

女性は続けざまに私を棒で殴った。

私は遠のく意識の中で、人を見る目がない自分を罵った。

愛の五分間劇場「別れ話」(前書き)

五分大祭に間に合わなかったので、勝手に自分で祭を試みました。

愛の五分間劇場「別れ話」

桜の花が満開の四月初旬。風も暖かさを増して来ている。

皆が新しいスタートを切る季節。皆が希望に胸を膨らませる時である。

律子は都内の中堅建設会社のOL。今日は仕事は休み。

その上特に予定もなく、彼女は自分の部屋で机に向かって携帯を睨んでいた。

律子は同じ会社の建築設計士の平井と付き合っている。

平井は、会社の受付の葉月涼子と争った末、交際を始めた男だ。

受付嬢の中でも一際美しい涼子に勝てるなんて、律子は思っていなかった。本当に嬉しかった。

それ以来涼子は会社に来なくなり、無断欠勤が続いている。

律子に負けたのが相当ショックだったのだろう。

様子を見に行こうかとも思ったが、それも嫌味になると考え、やめにした。

受付嬢達も同じ課の女子達も、涼子がずっと連絡を入れずに会社を休んでいる事を心配していた。

携帯に連絡しても、マンションに連絡しても電話に出ないらしい。

どこかに行ってしまったているのかとも思われたが、実家にも行っていないし、友人の所にも現れていない。

とうとう涼子の両親も心配して九州の福岡から彼女のマンションを訪れた。

しかし部屋には涼子はいず、両親は遂に警察に搜索願を出した。

さすがに律子も涼子の安否が気になった。涼子は律子にとって恋人ではあったが、憎んでいた訳ではないから。

それ以上に気になったのは、律子が涼子と平井を争ったという事実だ。

その事を警察に知られれば、律子が疑われる事になる。それは非常に困る。

別にやましい事は何もないけれど、警察が自分のアパートを出入りするのはいきなりいいものではない。

しかし、律子が平井と付き合い合っているのを知っているのは、涼子以外にいないはずだ。

律子もあまり公になるのは嫌だったので、誰にも話していない。

平井も誰にも話していないだろう。

では何故律子は平井と別れる事にしたのか？

それは、平井が涼子の事を忘れていないからなのだ。

彼はいなくなつた涼子の心配ばかりして、律子に全く優しい言葉をかけてくれない。

「あんな冷たい奴だとは思わなかった」

涼子がそれ程好きなのなら、最初から私を選ばなければ良かったのに！

最初は涼子に同情していた律子も、平井があまりにも涼子の事ばかり気にしているので、我慢ができなくなったのだ。

「バカにされてるの、私？」

そう思うようになった。

そして遂に別れる決心をし、バッグから携帯を取り出した。

意を決して、携帯のボタンを押す。

スススツと平井の番号が表示され、通話状態になる。

「ああ、ダメ！」

キャンセルボタンを押し、切ってしまう律子。

「どうしてもダメ。言えない。言い出せない！」

律子は目に涙を浮かべ、机に顔を埋めた。

そんな事を何回か繰り返すうちに、平井の方から電話をかけて来た。

律子は画面に表示される「平井健」の文字にギョツとし、出るのを躊躇^{ためら}った。

着信音が部屋に鳴り響く。それでも律子は出ようとしない。

そのうちに留守番電話モードに切り替わり、平井の声が聞こえた。

「何度か着歴が入っていたので電話したんだけど。今度はわかるように携帯持つてるから、電話下さい。待ってます」

平井はいつも通りのトーンで話し、通話を切った。

しばらく、部屋を静寂が支配した。律子は息を殺して携帯を見つめる。

彼女はボタンを押そうとするが、どうしても押せない。

指が硬直したように動かないのだ。

「待ってます」

平井はそう言ってくれた。嬉しい言葉だ。でも本心なのだろうか？

「待ってます」

ずっと待たせておこうか？　そう思う。

でもそれでは何も進展しない。それでは意味がないのだ。

私は彼と別れる決心をしたのだから。このままではいけないと思ったのだから。

「よし、今度は切らない」

律子は自分に言い聞かせて、ボタンを押した。

呼び出し音が鳴る。

「はい」

穏やかな声で平井が出た。律子は喋ろうとしたが、何も言い出せない。

「もしもし、もしもし！」

平井が呼びかけるが、律子は何も言わない。

そして何度か平井の呼びかけを聞き、通話を切ってしまった。

「ダメだ、私。まだ未練があるのかな……」

律子は目に涙を浮かべ、また机に顔を埋める。

彼女はしばらく声を立てずに泣いた。何故か無性に悲しかった。

「でも、こんな事を続けていれば、彼が呆れてくれるかも」

律子はそんな甘い考えをし、再び携帯を取り出す。

「よし！」

思い切って発信ボタンを押す。ワンコールで平井が出た。

（ずっと待っていたのかな？）

少しだけ嬉しくなってしまう。

（ダメダメ、そんなの！ 別れるのよ、彼とは！）

律子は無言のまま通話を切った。

「これでいいのよ。これで、彼は私の事を嫌いになって、自然消滅……」

涙が溢れて来た。止まらない。止められない。

「うっ……」

携帯をベッドの上に放り出し、律子は泣いた。

（全然諦め切れてないのね、私。そんなに彼の事、好きだったの？）

自分でも今の感情が理解できない。

（自分から別れようと思っていたはずなのに、何て未練がましいの

よ、私は！)

律子は自分で自分が嫌いになりそうだった。ここまで優柔不断だとは思わなかったのだ。

その時、携帯が鳴った。律子は慌てて手に取った。

平井からだ。律子は出ようとしなない。

着信音が鳴り止め、留守番電話に切り替わった。

「また出てくれないんだね。かけて来ても、何も話してくれないし。どうしたんだ？ 一体何があったんだ？ 凄く心配だよ。君が今どうしているのか……」

白々しい。何よ、今更。ようやく決断ができそうだわ。

「このメッセージを今聞いているのなら、電話に出て欲しい。もし、再生しているのなら、僕の携帯にかけてくれ。ずっと待ってるから。どこにも行かないで待ってるから。本当だよ。僕を信じて欲しい」

信じるですって？ 何を言ってるのよ？ 貴方の何を信じるって言うの？

バカじゃない、全く！ 何様のつもりなのよ、こいつは？ もう何も未練はない！

「心から願う。君が連絡をくれる事を。本当にお願いだ、返事が欲しい」

まだそんな事言うの？ 本当に嫌な奴ね。

「今でも君の事を愛しているよ、涼子」

幕末ホラー（前書き）

某国有放送の大河人気にに乗ったわけではありません。もっと以前に書いたものです（と日記には書いておこう）。

幕末ホラー

ある時からその噂が広まり始めました。

京の町に龍馬の亡霊が出ると。

噂好きの人達は、いろいろな場所で龍馬の亡霊が目撃されている事を話しています。

明治政府にとっては聞き捨てならない噂でした。

「龍馬は生きているのではないか？」

そんな仮説まで立てられました。

亡霊と見せかけ、世間と官憲の眼を欺き、極秘に某かの謀^{なにかし}を巡^{はかりごと}らせる。

まさしく疑心暗鬼をかき立てられていました。

しかし龍馬は間違いなく暗殺されています。

それは実行犯を送り込んだ現政府が一番良く知っている事です。

外国の政治を見聞し、日本にもそれを取り入れようとするばかりか、外国との自由貿易をも考えていた龍馬は、幕府のみならず、倒幕派にも危険人物と思われるにいたのです。

ですから、世間の人達以上に政府関係者は、龍馬の亡霊に怯えた

ようです。

その理由の一つに亡霊の出没場所が挙げられます。

龍馬は京都御所周辺に多く現れているのです。

京都見廻組が実行犯というのが大方の見方でしたが、本当はそうではありませんでした。

龍馬の考えに危機感を抱いた薩摩藩が、彼を暗殺させたのです。

現代では少数説ですが、それが真相なのです。

しかし、龍馬を知る人達は彼の亡霊が現れたと言う話を一笑に付しました。

「奴ははやあの世で忙しいからこちらに戻る暇はないろう」

それもそうかも知れません。

龍馬は決してイジイジと後ろを振り向くような人ではなかったの
でしょうから。

殴られ屋

俺は元ボクサー。

試合中にキレてしまい、レフェリーをボコボコにしたため、ボクシング界を永久追放された。

そのため、今では「殴られ屋」などという商売で食いつないでいる。

実は俺は、ボクサーとしての能力はそれほど高くなかった。

俺は相手の心が読めるのだ。

だから、次に対戦相手がどんな攻撃をして来るのか、完全に予測できた。

つまり、「これから右ストレートを出す」と言われているのと同じ事。

どれほど優れた才能のあるボクサーでも、俺にかかれば素人同然で、相手にならなかった。

もちろん、無心で向かってくる奴もいた。

だが、理屈では「無心」でも、心の声までは沈黙を守れないものなのだ。

だから「無心」なんて気にならなかった。

パンチの鋭い相手にだけは苦戦した事は確かだが。

そんな俺だから、「殴られ屋」は始めるべくして始めた「商売」だった。

まず、殴るお客に千円払ってもらう。

もし、俺の顔をかすめる事ができたら五千円、殴れたら一万円、ダウンさせたら三万円という取り決めをしていた。

無論、賭け事と思われ、警察のご厄介になると困るので、おおっぴらにはできない。

客を集めるための余興として、場末の飲み屋や、ストリップ劇場の幕間を活動の場にしていた。

相手は酔っ払いが、ヨレヨレの中年。

俺は現役でも十分通用する身体。

勝負にならないのは、よくわかっていたので、殴られると思った事はなかった。

そんなある日。

ストリップの幕間に、俺のショーが始まる。

何人が酔っ払いが挑戦し、まるで見当違いのパンチを繰り出した。

俺は心を読むまでもなく、あっさりとかわした。

今日は楽な仕事になる。

そんな風に思った時だった。

「私もお願いしたい」

老人が舞台に上がって来た。

多分、俺の父親より年上だ。七十代だろうか？

「では、挑戦料の千円をお支払い願います」

俺は微笑んで言った。するとその老人は、

「いや、一万円払おう。但し、私のパンチを避けられなかったら、倍返し。どうかね？」

何だ、このジジイは？ どうしてこんなに自信満々なんだ？

俺はムカついたが、殴られるとは思っていないので、

「わかりました。後で取り消しはできませんが、よろしいですか？」

「無論だ。お前さんこそ、なかった事にしてくれと言わせんぞ」

「承知しました」

クソジジイめ。吠え面かくなよ。

俺は胸糞悪さを抑え、構えた。

老人は俺の前に立ち、俺を睨んだ。

この気迫は！？ こいつ、本当に老人なのか？

「行くぞ」

老人が言った。右のパンチが繰り出された。俺はそれを予期していたので、あっさりとかわした。

「ゲヘッ！」

ところが何故か俺はかわしたところに繰り出されたパンチをまともに食らい、倒れてしまった。

周囲の観客が歓声を上げた。

「避けられなかったな。倍返した。それに、ダウンしたから三万円も追加だな」

老人は不敵な笑みを浮かべ、俺を見下ろしていた。

「インチキだ。今、もう一発パンチを出したな、ジジイ！」

俺は飛び起きて老人に食ってかかった。

「いや、ご老人はパンチを一発しか出していないよ」

端で見ていた劇場の支配人が口を挟んだ。

俺は啞然として老人を見た。

老人は五万円を手にし、劇場を去った。

俺はどうしても納得がいかず、老人を追って劇場を出た。

「待ってくれ。どんなトリックを使っただ？」

「トリック？ そんなものは使っていない」

老人は振り向かずには答えた。

「確かに俺は右のパンチをかわしたはず。なのに……」

老人はようやく振り返って、

「私は相手に嘘の心を見せる力がある。お前さんと逆だ」

「え？」

老人は俺と同じだった。力を使って俺を惑わしたのだ。

「本来、お前さんのその力は、あのような事に使う物ではないはず。そうは思わんかね？」

「……」

俺は何も言い返せなかった。

「私が言いたいののはそれだけだ。後はお前さん次第だな」

老人はそう言い残すと、立ち去ってしまった。

老人の言葉は、俺の胸に深く突き刺さった。

黄泉返り

私は最愛の妻を失ってしまった。

しかも、私の不注意で。

脇見運転をしていて、道路脇から飛び出した少女に気づくのが遅れ、私はハンドル操作を誤った。

車はそのまま電柱に激突し、妻は潰れた車体に挟まれ、圧死した。

私は気が狂いそうだった。

妻が死んでしまった事だけでも衝撃的なのに、その原因が自分にあるのだ。

何度も後を追おうと思った。

その度に友人や親戚の人達が、私を止めた。

私は、

「死なせてくれっ！」

と絶叫したらしい。

そんな状態が何日も続き、私は痩せ衰えた。

そして不意に妙な事を思い出した。

我が家に伝わる秘伝。

私の一族は、古くから続く呪術師の一族であつたらしい。

その力は、祖父の時代に捨ててしまったようだ。

しかし父はこつそりとその秘術書を保管し、死ぬ直前に私にその在処を教えてくれた。

私はその秘術書を読んでみる事にした。

確か、「死人を黄泉返らせる術」が載っていたはずなのだ。

屋敷の奥、まさに開かずの間の中にその書はあり、私は遂に封印を解くことにした。

秘術書は父に教えられた所に確かにあった。

埃まみれだった。

私は埃をフーッと吹いて飛ばした。

辺り一面にカビ臭いニオイが充満した。

ハードカバーを開き、ページを捲る。

「黄泉返り」

その術は確かに載っていた。

私は貪るように読んだ。

必要な物、呪文、手順、全て事細かに記されていた。

これで妻は黄泉返る。

私は恐ろしい事をしようとしているという罪悪感より、妻が生き返るという喜びの方を強く感じていた。

そして満月の夜、私はその秘術を決行した。

大きな壺に必要なものを全て投げ込み、呪文を唱えた。

「はっ！」

私は壺の中から叫び声がするのに気づいた。

「まさか？」

それはやがて人の声とわかるくらい大きくなった。

「この声は？」

私は歓喜の涙を流した。

妻だ。妻の声だ。

壺に駆け寄った。

ああ、愛する妻よ。

早くその姿を見せてくれ。

ボンと大きな音がした。

その音と同時に、壺から妻が飛び出して来た。

間違いない。

あの妻だ。あの美しい妻だ。

私は一抹の不安を感じていた。

死人は黄泉返っても過去の記憶を失っていると聞いた事があったのだ。

しかし妻ははっきりと言ってくれた。

「貴方」

私は更に涙を流した。

良かった。思い過ごしだった。

彼女は私を覚えている。

妻は私に歩み寄り、

「何で私を死なせた！ あの時の苦しみ、味わわせてやる！」

私は妻に首を絞められた。

遠のく意識の中で、それでも私は妻が黄泉返った事を喜んでいた。

小説家になりたい！

私は夢見る乙女。

だったのは四半世紀前だ。

もうすっかり「おばさん」。

子供には「三段腹」を笑われ、夫にはいびきを指摘され。

そんな私にもまだ「夢」があった。

小説家だ。

恐らく、定年はないし、何歳から始めても大丈夫なはず。

子供の頃から、思い込みと前向きさには「定評」のある私は、覚えたてのパソコンを使って、無料で投稿できるサイトを探した。

あった。

「小説家になれるよ」という投稿サイトだ。

早速超低速で入力した拙い短編を投稿した。

すると。

思った以上に好評だった。

それに味を占めた私は、再び短編を投稿した。

それも好評だった。

更に投稿した。

それも好評だった。

すっかり小説家気分の私は、次に長編に取り掛かり、第一話を投稿した。

数日後、ドキドキしながら、評価欄を覗いた。

評価は一件のみだった。

しかも低評価。

がっかりしてしまった。

うん？

良く見ると、その人は自分の作品も読んで欲しいと書き添えていた。

私は勉強になると思い、その人の小説を読んだ。

しかし、その人には申し訳ないのだが、それほどのものではなかった。

感想も湧かないし、評価する気にもなれない。

それでも何もコメントしないのは悪いと思い、

「素敵な作品で、勉強になりました」

と書いた。

すると次の日、私の「マイページ」にその人からのメッセージが届いてた。

私のコメントに対する感謝の言葉と、次の作品の評価依頼が書かれていた。

気乗りしなかったが、読んでみた。

やはり思った通りで、何の感想も浮かばない、きつい言い方をすれば「独りよがり」な小説だった。

どうやら自分を主人公にした話のようなのだが、「自慢話」に終始しているのだ。

私には理解しかねるナルシズムの人のようだ。

今度はコメントする気になれず、そのまま放置した。

数日後、マイページに何通ものメッセージが送られて来ているのに気づいた。

全部例の人からだった。

しかもそれぞれの送信時間の間隔がわずか10分程度。

1つ開いてみた。

私に対する評価の催促。

普通の文面。

2通目はやや強い催促。

3通目は何故コメントしないんだという怒り。

4通目は罵詈雑言。

5通目は、お前の居場所を調べて直接文句を言ってやる、というもうすでに常軌を逸した言葉。

いくら何でも、私の家がかかる訳がないと思ったので、次からはその人からのメッセージは開かないで削除した。

それから数日後、私は郵便受けに切手が貼られていない封書を見つけた。

まさか？

そんなはずはないと思いながら、封書を開き、便箋を取り出して読んだ。

「すぐそこにいる。逃げないで待ってる！」

私は仰天して便箋を放り出した。

そしてすぐに家に駆け込み、ドアをロックした。

更に家中の窓の鍵を全てかけ、カーテンも閉めた。

結局何もなかった。

それでも私は不安だったので、夫に相談した。

夫はサイトに相談してみろ、と言った。

私はその夜、サイトの管理者にメールした。

次の日、サイトの管理者から返信があった。

私はその回答を見て驚愕した。

私に脅迫紛いのメールを送りつけて来た人は存在していなかった。

その人のIDは数年前に削除されて、現在使用されていないという。

私は不審に思い、小説を検索した。

確かに存在していなかった。

どういう事なのか、さっぱりわからなかった。

すっかり終わった。

そう思っていた。

しかし終わっていなかった。

また郵便受けに切手が貼られていない封書が投函されていたのだ。

便箋にはこう記されていた。

「おい、いつまで惚ける気だ、早くコメントしろ！」

お風呂の怖い話

あらかじめ申し上げておきますが、このお話はお風呂に入る直前の人は決して読まないで下さい。

お風呂。

ホンワカとして気持ちのいい響きです。

でも、事と次第では、非常に恐ろしい場所に早変わりします。

勇作はお風呂好きです。

仕事から帰って来ると、まずお風呂です。

一人暮らしの独身サラリーマンは、誰もがそんな暮らしなのかも知れませんが。

あまり感心しない事なのですが、彼はどんなに酔っ払っていても、まずお風呂です。

以前付き合っていた彼女に、その事を咎められたのですが、勇作は全く意に介さず、ベロベロに酔っていても、平気で湯船に浸かりました。

彼女はその事を呆れた訳ではないのですが、勇作の自由気儘さ、悪く言えば身勝手さに耐え切れず、自然と付き合いは解消されてしまいました。

しかし勇作はその事で落ち込みもせず、毎日を過ごしていました。

そんなある日。

その日も残暑が厳しく、外回りをした勇作は、一刻も早くアパートに帰って、湯船に浸かろうと家路を急いでいました。

「到着！」

勇作はドアを開けるなり叫び、ロックをすると、玄関で服を脱ぎ始めました。

いくら一人暮らしとは言え、あまりに行儀が悪いです。

彼はあっという間に素っ裸になり、バスルームに向かいました。

お風呂はタイマー予約ですっかり準備完了です。

「よし！」

入るまでは行儀知らずですが、きちんと掛かり湯をしてから湯船に浸かるのは、さすがお風呂好きです。

「あー……」

肩までお湯に浸かり、まるで頑固ジイさんのような唸り声を出します。

「生き返るウ」

本当にお風呂が好きなようです。

「さてと」

湯船から上がり、まずは頭を洗います。

「フオーッ！」

すっきり爽快のシャンプーで洗うと、そんな声が出るようです。

「あああ」

ゴシゴシと指の腹で頭皮マッサージです。

その時でした。

「えっ？」

自分の手以外のものが、彼の頭皮を刺激しているのです。

思わず手を止めてしまいます。

「？」

勇作は顔に着いた泡を拭いながら、恐る恐る振り返ります。

案の定誰もいません。

「気のせいかな」

自分に言い聞かせるように呟き、彼は再び頭を洗い始めました。

「ひっ！」

気のせいではありません。

確かに誰かが頭皮を刺激しているのです。

「誰だ！？」

彼は、目にシャンプーが入るのも構わず、素早く振り向きました。

しかし誰もいません。

「いない……」

勇作は、今度は「気のせい」には出来ませんでした。

確実に誰かが頭を触っていたのです。

その時、ポタン、と天井から水滴が垂れました。

「？」

その水滴は、何故か泡立っており、粒も妙に大きいものです。

勇作は生唾を呑み込み、天井を見上げました。

するとそこには、長い髪の痩せ細った白装束の女が、涎を垂らしながらヤモリのようにへばりついていました。

雪の夜の怖い話

冬の夜の怖い話は、身体の芯まで凍えるような恐怖を味わうにはうってつけです。

そろそろ本格的な冬到来の今にピッタリのお話を致しましょう。

ある村に一人暮らしのおばあさんがいました。

おばあさんは決して裕福ではありませんでしたが、亡くなったおじいさんが残してくれた畑を耕し、牛の世話をし、野菜と牛乳を売って生活していました。

そんな冬のある日の事です。

おばあさんの村から遠く離れた町で、銀行強盗事件が起こりました。

ニュースで事件を知ったおばあさんは、

「この村はそんな事が起こらなくて平和で良かった」

と思いました。

ところが、その強盗がおばあさんの村に逃げて来て、あるところか、おばあさんの家にやって来たのです。

「ババア、騒ぐと殺すぞ」

強盗は若い小男で、目出し帽に革のブルゾン、ジーンパンという出立ちで、銀行から奪った札束の入ったバッグを持ち、猟銃でおばあさんを脅かしました。

「私の家には何もあげるものがないよ」

おばあさんは針金のように細い身体を震わせながら言いました。
強盗は家の中を見渡して、

「確かにそうだな。なら丁度いい。ここにしばらくいさせてもらうぜ」

と言いました。おばあさんは腰を抜かさんばかりに驚きました。

その日から強盗はおばあさんに食事の支度や洗濯、お風呂の準備までさせました。

そして何日かが過ぎました。

警察は強盗の足取りを掴めず、まだ犯行現場付近の聞き込みをしていました。

おばあさんは強盗が入浴している間に、こっそり手紙を出し、警察に強盗がいる事を伝えました。

警察はおばあさんの家に強盗がいる事を知り、いろいろと作戦を考えました。

おばあさんが人質に取られているので、迂闊な事はできません。

最初は説得工作で臨む事にしました。

しかし、万が一を考え、狙撃班も配備する事になりました。

そして二日後。

警察は黒塗りの車で交渉人を差し向け、強盗の説得を始めました。

「君は完全に包囲されている。武器を捨てて出て来なさい。今ならまだやり直せる」

「うるせえ！」

強盗は窓ガラスを割り、猟銃を警察の車に向けました。

狙撃班に緊張が走ります。

「その家にいるおばあさんだけでも、解放してくれないか？ 何なら、私が代わりに人質になってもいい」

しかし、交渉は難航し、時間ばかりが過ぎて行きました。

やがて日が暮れ、空から雪が降り始めました。

雪は辺り一面を真っ白にし、警察の人達の英気を奪って行きました。

交渉は続きましたが、一向に強盗は警察の条件を吞まず、膠着状

態に陥って行きました。

そして夜が明けました。

それでも交渉人達は粘り強く強盗を説得しました。

やがて強盗も精神的に参って来たのか、交渉人が代わりに人質になる事を受け入れました。

交渉人はホツとして、おばあさんの家に歩き出しました。

するといきなり強盗が猟銃を構えて現れました。

雪の降りしきる朝に轟く銃声。

胸から血を流し、交渉人が倒れ伏しました。

強盗はサツと家の中に隠れました。

「助けてー！」

おばあさんの叫び声がしました。

そして静寂。

何が起こったのかと、刑事達は固唾を呑みました。

やがて、遠巻きに待機していた刑事と機動隊が一斉におばあさんの家に駆け寄ります。

強盗は割れた窓ガラスから刑事達を見ようと顔を出しました。

次の瞬間、狙撃班が一斉に強盗を狙撃し、強盗は蜂の巣になって倒れました。

交渉人と強盗の死によつて、事件は幕を閉じました。

刑事達がおばあさんの家を検索しましたが、強盗が奪った現金はどこからも出て来ませんでした。

「おばあさん、強盗は現金を詰めたバッグを持っていませんでしたか？」

刑事が尋ねました。

「いえ、持っていないでしたね。手ぶらでしたよ」

「そうですか」

刑事達はガツカリしておばあさんの家を去りました。

おばあさんはニッコリして、狸のようにふっくらしたお腹をさすりました。

「そうそう。手ぶらでしたよ」

おばあさんは嬉しそうに呟きました。

新撰組始末記（前書き）

新撰組ファンの皆さん、重ね重ねごめんなさい。

新撰組始末記

発足当時、局長二人と言う不安定な体制で動き出した新撰組。

やがて時の流れと共にその体制に綻びが生じ始める。

筆頭局長芹沢鴨の乱暴狼藉は目に余る物があり、これを憂えた土方歳三らが芹沢暗殺を画策したのである。

「芹沢ー、マジウザいしー、マジキシヨいしー、マジムカつくんすけどー」

土方が近藤に言った。近藤勇も頷き、

「歳りに同じー、芹沢、マジムカつくー」

と同意した。

「殺っちゃうー、芹沢、殺っちゃうー？」

沖田総司が話に加わった。

「でもー、芹沢ー、マジ強いしー、マジ怖いしー」

近藤は慎重だった。しかし土方は強気だった。

「芹沢ー、水戸藩とか言ってるけどー、ウソっぽいしー」

山南敬助も慎重派だ。

「私怪我したくないしー」

それでも土方は引き下がらなかった。彼には秘策があったのだ。

「みんなでー、芹沢ー、ボコればいいしー」

「いい感じー、みんなで芹沢ボコリー」

近藤が同意した。沖田が立ち上がり、

「私いちばん」

「私にばん」

と土方も立ち上がる。山南は仕方ないと溜息を吐いて、

「じゃあ、私さんばん」

「あー、私局長なのにー、みんなひどいー」

近藤は順番を変える事を主張した。

「イサミーはー、局長だからー、締めでお願いしまつす」

土方の取りなしで、近藤は止めを刺す事で決着した。

文久3年（1863年）9月、近藤勇を中心とする試衛館一派が

芹沢鴨らを襲撃殺害した。

そして近藤を局長、土方を副長とする体制が完成する。

その翌年である元治元年、新撰組は池田屋事件でその名を知られるようになるのだった。

かゆい！

かゆい。かゆい。かゆい！ かゆい！

猛烈にかゆい！！

背中の、どうしても指が届かないところ。

うーっ！ ひーっ！ くーっ！

ダメだ。

精一杯頑張ってみたが、どうしても届かない。

柱の角で擦ってみた。

難しい。うまくそこにヒットしない。

とにかく、ピンポイントでかゆいのだ。

あ、今かすめたのに。ダメだ、またずれた。

ますます我慢できなくなる。

何なんだ、このかゆさは？

鏡で見よう。

ゲゲッ、かゆいところ以外が、引つかき過ぎて酷い事になってる

よ。

原因わからないな。鏡で見たのでは無理なのか。

そうだ、相棒に見てもらおう。

それが一番だ。

「なあ、俺の背中、凄くかゆいんだけど、どうなってる？」

相棒はチラッと俺の背中を見て、

「小さい虫に食われてるよ。そのせいだろ」

「ええ？ 虫に食われてるのか？ そいつは大変だ」

「おい、誰か来たぞ」

相棒の声に俺はハッとして明かりを消し、定位置に戻った。

コツコツと足音が近づいて来た。

警備員だ。巡回の時間か？ いつもより早いな。

やばかった。

お、入って来たぞ。いつもは通り過ぎるのに。

「誰もいないよな」

奴は俺達の方に懐中電灯の光を向けた。

でも大丈夫。ばれたりしないさ。

警備員は立ち去りながら、

「いつ見ても理科室の人体模型と骸骨は気味悪いよな」

と俺達の悪口を言った。

メリークリスマス

私は恵比寿有希。ごく普通のOL。

今日は去年のクリスマスイヴに出会って、バレンタインデーから付き合い始めた彼とのお食事。

二十ウン年の人生で、初めて恋人と過ごすイヴなのだ。

彼はホテルのレストランに予約を入れてくれて、私を優しくエスコートし、ディナーが始まった。

「はい、メリークリスマス、有希」

彼はさり気なくプレゼントを差し出した。

私が前から欲しかったブランドのショルダーバッグだ。

「ありがとう。嬉しい」

「喜んでもらえて、僕も嬉しいよ」

彼は何故か照れ臭そうに言った。

「あ」

彼の照れている理由がわかった。

バッグの中にホテルのカードキーが入っている。

まさか？　これは……。

もちろん、もうそれなりにお付き合いをして来ているから、今日が初めてという訳ではないけど。

でも、こんな高級ホテルでなんて、ちょっとドキドキだね。

「いいかな？」

彼が尋ねる。私は俯いて、

「うん」

と承諾。当たり前でしょ。もう、何を今更。照れ屋さんなんだから。そんなシャイな彼が堪らなく好き。

つい、笑顔が溢れてしまう。

彼を見る。彼も私を見て微笑んでいる。

「ごめん、ちょっとトイレ」

彼は苦笑いをしながら、席を立った。

緊張しているのかな？　そうよね。こんな高級ホテルを予約して、いつも通りでいられないわよね。

私はあまりにも幸せで、おかしくなりそうだった。

「……」

彼が戻って来ない。トイレにしては長い。

何かあったのかしら？

私は心配になって、彼の携帯にTELした。

えっ？ 現在使われておりません？

嘘？ 今朝は通じたのに。どういう事？

私は不安に駆られて席を立った。

すると、向こうからホテルの支配人がやって来た。

「恵比寿有希様ですか？」

「はい、そうですが」

支配人は厳しい表情をしている。何だろう？

「お連れ様の渋谷瑛太様が、宿泊料金をお支払いにならないままで連絡がとれなくなっています」

「はあ？」

私は全身から嫌な汗が出て来るのを感じた。

「お部屋に、請求は貴方様にするようにとメモが残されておりまして」

「何ですって!？」

私は驚愕した。あいつ、何て事を!

このバッグは、そのお詫びって事? だからカードキーを入れてあったの?

私は支払いを拒否しようと思ったが、ここで揉めるのも嫌なので、バッグに免じて許してあげる事にし、立て替えた。

そう、あくまで立て替えたのだ。

痛い出費だったが。

今年のイヴは散々だ。

来年こそ、良い年にしよう。そう心に誓った。

そして、年が明けて二〇一〇年。

良い年にはならなかった。

あのバカは、バッグの支払いも、私のカードでこっそりしていたのだった。

だからクリスマスなんて大っ嫌いなんだ！

グロテスクな夜

その日は熱帯夜となった。

気怠い1日が終わり、辺りが闇に支配され始めた。

そんな夜には、突飛な行動をとる者も多いかも知れない。

その男は鉈のような出刃包丁を右手で持ち、死体の前に仁王立ちしていた。

死体は全裸で、目を背けたくなるような姿をしていた。

男はニヤリとした。

「うおおっ！」

出刃包丁が振り下ろされ、死体の首が切り落とされた。

男は無造作にその首を放り投げ、ゴミ箱に捨ててしまった。

「へへへ」

男は目を爛々と輝かせ、舌なめずりした。

「ふおおっ！」

次に男は包丁を寝かせ、バシッと叩きつけた。

グシャッ。

何かが潰れた音がした。

赤い液体が飛び散る。包丁に液体がまとわりつく。

「ヒヒヒ」

さらに男は死体の両脚を無理矢理広げた。

何をするつもりなのか？

ああ、そんな。

男は強引にねじ込んだ。

異常だ。もはや人間の所業ではないと思えてしまう。

しかし男はやめない。

さらにねじ込む。

死体は悲鳴もあげる事が出来ない。

男はやがて満足そうに頷き、開いていた脚を戻した。

こんな行為が許されるのだろうか？

もう私は堪えられない。

男を止めなくては。

このまま黙って見ているわけにはいかない。

「もう我慢できないぞ」

私は意を決して叫んだ。

男は手を休めて私を睨んだ。

「何!？」

殺される？

一瞬怯んだ。しかしここで引き下がる訳にはいかない。

「お前にこれ以上好きにはさせない。その包丁をよこせ」

「何だと!？」

男は包丁を持ったままで私に近づく。

私は冷や汗を垂らしながら、思い切って言った。

「お前に任せていると、折角の鳥の丸焼きが台無しだ。私に代われ」

お義父さん

大恋愛の末結ばれたわけではありません。

幾度となくしたお見合いの末、やっと結婚に漕ぎ着けた、という私です。

夫はとても優しく、そのご両親もとてもいい方です。

一男一女にも恵まれ、私はとても幸せ。

独身時代、恋愛できない自分に焦りを感じていました。

あの頃の憂鬱感が嘘のようです。

友人達にも羨ましがられました。

多くの人が大恋愛をして劇的なゴールインをし、やがて熱が冷めるように冷え切った夫婦関係に陥っているのに、私と夫の間にはそんな事は皆無です。

妄想ではありません。

私は本当に今の生活に満足しているのです。

只一つの事を除いては。

この際だから、思い切って言ってしまうです。

唯一の不満。我慢しかねる事。

それは、お義父さん。

いえ、優しい方です。

子供の面倒も良く見てくれます。

私に対するセクハラはありません。

そんな方でしたら、まだ対処のしようもあります。

私が我慢できないのは、お義父さんの生活習慣です。

手を洗わないんです。

トイレに入っても、外から帰っても、手を洗わないんです。

ああ、お願いだからそんな手で子供を抱いたり頭を撫でたりしないで！

そんな手で冷蔵庫を開けて中のものを触らないで！

私は毎日お義父さん達が寝てから、家中の消毒をしています。

子供達はお風呂で念入りに殺菌効果のある石鹸で洗ってあげます。

夫に相談した事もありました。

「気にし過ぎだよ」

と言われました。

確かにそうかも知れません。

それでも、こればかりは譲れないのです。

私は直接あの優しいお義父さんにそのような事を言えません。

自分がおかしいのでしょうか？

日々その感情が高ぶるのを抑えるのが大変です。

ああ、今日も洗わない手でつまみ食い。

しかも2切れ取ったキュウリを1切れ器に戻しました。

私はつい包丁をジッと見つめてしまいます。

お義父さん！ いい加減にして！

そう言える日と私が暴走してしまう日のどちらが早いのか……。

ああ、また包丁をジッと見ている私……。

お化け屋敷に挑む（前書き）

群馬県には、本当に怖い心霊スポットがあります。

お化け屋敷に挑む

「よう、久しぶり」

正雄が茂に言った。

「GW以来か？」

茂が応じた。

俺達は今、「お化け屋敷」と呼ばれている村の外れの一軒家に行こうとしている。

「本当に出るのか、そこ？」

壮太が言った。すると正雄が、

「らしいぜ。俺のバスケの先輩の友達が追いかけられたって」

「まさか！」

俺は驚いて言った。慎吾が、

「マジでやばいらしいですよ、そこ。俺、帰りたくなって来たなあ」

「相変わらずのビビリだな、慎吾？」

からかうように茂が言った。慎吾は剥れて、

「ビビリじゃねえよ！ 何だよ、その言い方は！？」

「そんなに怒るなよ、慎吾」

正雄が仲介した。

「とにかく行ってみようよ。ここで話していてもラチが開かない」

俺がそう提案すると、

「そうですね」

と壮太が同意した。

やがて俺達は噂の「お化け屋敷」のすぐそばに着いた。

「うひー、確かに凄く出そうな外観だな」

壮太が言った。俺が、

「そうか？ 何も感じないけど」

「いや、すつげえ気持ち悪いっすよ。俺マジやばいかも」

茂が寒気を感じたように身を震わせた。

「大丈夫か？ 顔色悪いぞ。戻った方がいいよ」

俺は茂の変貌振りに気づいて言った。

「そうみたいですな。茂、車に戻った方がいい」

正雄もそう言った。

「あれ？」

その時正雄と壮太、慎吾と茂が顔を見合わせた。

「あのさ、お前らの先輩じゃないの、そちら？」

慎吾がブルブル震えながら尋ねた。壮太も蒼ざめて、

「ち、違うよ。お前らの先輩かと思ってたぞ」

4人が一斉に俺から離れた。

俺はニツとして言った。

「ようこそ、我が家へ」

愛されたいから殺したい

私は悩んでいた。

私の妻が浮気している。

興信所からの調査報告書を見た。

疑ってはいた。

年の差婚なのでそんなことを考えてしまつのだ、と自分を戒めた事もある。

そして、そんな事はないとずっと信じていた。

私の思い過ごしだと。

しかし、現実は違っていた。妻は紛れもなく「クロ」だった。

私は悲しかった。

何十年も一緒に暮らして来たのに。

私は一度も妻に手を上げた事はなかったし、暴言を吐いた事すらない。

何故浮気をされたのか全く理解できない。

相手の男は若い男なのかと思つたが、私と変わらない老年の冴え

ない男だ。

ますます浮気の原因が分からなくなった。

私は調査報告書を嘗めるように読み、妻が一体どこでその男と知り合ったのか知った。

ボランティアで参加していた介護施設の中でだった。

妻は以前から福祉に興味を示し、熱心にその類いの講習を受けて資格試験を受けていた。

彼女は若い頃から何事にも一生懸命で、またその試験勉強をしていた頃は、私も妻の事を疑っていなかったたので、彼女をサポートした。

その甲斐もあって妻は資格を取得し、ボランティアに関わるようになった。

そして例の男と知り合ったのだ。

私が出張で何日か留守にすると、決まってその男と連絡を取り、会っていた。

酷い時は泊まりがけで出かけたりもした。

報告書を読むのが辛くなったが、それでも私は何とか耐えて読み進めた。

さすがに人目を気にしているのか、ラブホテルのような場所には

行かず、決まってシティホテルかビジネスホテルで会っていた。

相手の男も妻子がいる。

両方共に不倫だ。

一時は相手の奥さんにこの事を話し、2人で現場に乗り込もうかと考えもした。

しかし相手の奥さんは病弱で、そんな事はさせられないし、するわけにもいかない。

私は決断した。

私は自分だけで解決しようと思った。奴には奴で、自分の家族と向き合ってもらった方がいいと。

私は妻が帰るのを待った。

その夜遅く、妻は帰宅した。

彼女は私がまだ起きていたのに驚いていた。

「どうしたの、こんな遅くまで起きて。明日も早いんでしょ？」

「構わんさ。明日は休暇を取った。お前とゆっくり話し合おうと思っ
つてな」

「話し合う？」

妻は何の事だという顔で私を見た。私ははらわたが煮えくり返る思いだったが、

「これを見ても」

と調査報告書を放った。

「何、これ？」

妻は驚愕していた。報告書を持つ手がブルブルと震えている。

「何よ、これ？ 私を調べていたの？ 酷いわ！」

「酷いのはどっちだ？ お前は私がない時、いつもその男と会っていた」

「それは……。話そうと思っていたのよ」

「話す？ 何を話すつもりだったんだ？」

「でも、なかなか言い出せなくて……。私もどうしたらいいのか悩んでいたから」

「何が悩んでいた！ 私はお前の何倍も悩んでいたんだぞ！」

「何を悩むって言うのよ！？ 貴方は仕事ばかりで、私の事何も構ってくれなくて！」

私は妻のその言葉に力チンと来た。

「何を言うか！ お前が試験勉強をしていた時は、仕事も早めに切り上げて、協力したじゃないか！ それを構ってくれないとはどういう言い草だ！？」

「そうやっていつも恩着せがましいのが貴方の嫌なところなのよ！」

「あいつはそういうところがないから好きなのか？」

「違うわ！ それは誤解よ。貴方はとんでもない思い違いをしているわ！」

「どんな思い違いだ！ そうだ、お前の事か？ 確かに思い違いしていたな！ お前はとんでもない女だったよ」

「何ですって！？」

妻はテーブルの上にあった皿を私に投げつけた。

「くっ！」

私はそれをかわそうとして顔を両腕で庇った。

皿は私の右腕に当たって砕けた。

「ギャッ！」

妻の叫び声がした。私は腕を下げて妻の方を見た。

「！」

彼女は皿が碎けた時に飛び散った破片の一つを喉に喰らい、そのまま倒れていた。

「バカな……」

私は妻に駆け寄り、声をかけた。名前を呼んだ。しかし妻はピクリとも動かなかった。

確かに殺してやりたいと思った。しかし、本当に殺そうと思った事はなかった。

いくら浮気をしたとは言え、それがそこまでの罪とは思ってはいなかった。

私は妻の遺体にすがり、泣き続けた。

気がつくとは私は妻の遺体を抱いて寝てしまっていた。

悲しみに耐え、彼女の遺体を寝室のベッドまで運んだ。

「何て事だ……」

私は昨夜の事を思い返し、また泣いた。

その時、私の感情を全て消し去るかのように玄関の呼び鈴が鳴った。

時計を見ると朝の7時だ。

こんな朝早く誰だろう？ 私は誰であろうとすぐに追い返そうと
思つて玄関に向かった。

「えっ？」

ドアを開くとそこに立っていたのはあの男だった。

何だ、どういう事なんだ？

「朝早くに申し訳ありません。娘はまだ寝ていますか？」

勇気を出して（前書き）

「大ドンドン返し」改め、「勇気を出して」です。

勇気を出して

僕は中学2年生。

1年の時から、好きな子がいる。

彼女とは小学校が違ったので、入学式の見かけ、一目惚れしてしまった。

しかし、残念な事にクラスは別になった。

それでも彼女の事が気になり、同じクラスの奴に用があるフリをして顔を見に行ったりした。

小学校の時から悪友には、僕の行動はわかりやすかったらしく、すぐにバレた。

随分冷やかされた。

絶対無理だからやめとけ、とも言われた。

そして、優柔不断な性格も手伝い、告白できないまま1年が過ぎた。

今年しかない。

そう思った。

3年になれば、それどころではなくなってしまう。

僕はそんな事はないと思うが、彼女は学年でトップを争う優秀な子なのだ。

僕とは違う。

来年になってしまふと遠い存在になりそうだ。

諦めかけた事もあった。

でも、何もしないで引き下がるのは、絶対に良くないとも思った。

ダメでもいいじゃん。

そう言ってくれた奴もいた。

そうだ。

断られたからって、死ぬわけじゃないし。

決断した。

ところが、だ。

彼女が避けている。

そう思えた。

僕が廊下を歩いているのを見つけると、サッとトイレに入ってしまった。階段を駆け下りて逃げてしまう。

何だろう？

僕、彼女に何かした？ 覚えがない。

嫌われている？

そんな……。

さすがに心が折れかけた。

そんな日が続いた。

周りの悪友達も、僕の落ち込みように言葉もない様子で、決してその事は口にしない。

重い足取りで下校する。

あ。

少し前を彼女が歩いている。

今度こそ！

僕は走った。

彼女が角を曲がった。

僕もそれに続いた。

そして用意していた言葉を言おうと口を開いた。

「前から好きでした！ 付き合ってください！」

角を曲がったところで逆にそう言われた。

「ええ！？」

そしてやっと言えたのが、

「こ、こちらこそ」

僕は何が何だかわからなくなるほど嬉しかった。

呪殺依頼

私は呪術師。

表向きは占い師だ。

時々ではあるが、私に「裏の仕事」の依頼がある。

それは「呪術による殺人」だ。

まだそれほど受けた事はないが、これは大変な疲労を伴う。

人一人を呪い殺すには、その者の生命力を完全に消滅させるだけの呪力が必要なのだ。

だから報酬は高額。

都心の一等地に大豪邸が建てられるくらいは頂く。

高額の理由はもう一つある。

あまり依頼を受けたくないのだ。

呪殺の疲労は常人の想像を絶する。

二度と受けたくないと思うくらい。

だから今まで受けた依頼は、私が依頼者の言葉に納得し、確かに生かしておけない存在だと思えた場合に限られている。

その代わり、一度受けた呪殺の依頼は撤回ができない。

殺すのはまずいと後悔しても、依頼者は一生その咎を背負うしかない。

そのくらいの覚悟があつて初めて、呪殺の依頼をするべきなのだ。相手がのた打ち回って死んだと聞き、発狂した依頼者もいるのである。

ある日、神妙な面持ちの老夫婦が、私の店に現れた。

私は一目で殺しを依頼に来た、と感じた。

それくらい二人から発せられる気が、澱み、歪んでいたのだ。

「本日はどういったご用向きでお出でになりましたか？」

私はそんな思いを押し隠して、にこやかな顔で尋ねた。

「実は……」

夫の方が小声で呟いた。

「はい？」

私は話を聞き取ろうと身を乗り出した。

「ぐ……」

横に座っていた妻の方が、いきなり私の腹に出刃包丁を突き刺した。

「な、何故……？」

私は出刃包丁を両手が切れるのもためらわず、押し留めながら言った。

「私の息子は貴女に呪殺を依頼して、その結果、相手の死に様を知り、それを悔やんで自殺したのよ！」

「……」

私には言葉もなかった。夫の方が私の両手を掴んで、包丁から引き剥がし、

「お前のせいで、死ななくていい息子が死んだんだ！ あの世界で息子に詫びるがいい！」

と叫んだ。

私はこんな日が来るとは思っていた。

所詮、呪術師の最期はこの程度のものだ。

しかし、気力を振り絞って最後の嫌味を言い放った。

「残念ですが、呪術で人を殺めた私は天国にも地獄にも行けずに消滅するだけなので、息子さんに詫びられません」

安直作家の一日

有楽町律子は作家。

とは言え、全然売れていないし、書店にも彼女の本は並んでいない。

たまたまある雑誌の小説賞を受賞したため、何となく作家業に入ったお気楽女である。

もちろん、専業ではない。

平日は新橋の会社に勤務するOLである。ブレイクダンスはできないが。

それでも、ごく稀に仕事の依頼が来る。

短編を書きませんかと、デビュー作を掲載した雑誌の編集者から連絡があつた。

律子は二つ返事で承諾し、まずはプロットを練る為に大型書店に行った。

いろいろと資料になりそうな本を漁る。

しかし、どうもピンと来ない。

しかたなく、家路に着く。

自分の部屋に籠り、ボンヤリ過ごす。それでも何も思い浮かばない。

「あ」

ふと思いつく。でも思い直す。これは以前誰かが書いていた。

暢気な性格だが、人と同じ物は書きたくないなどというおこがましい事に拘っている。

骨格が似ていても、内容が違えば問題ないと編集者にも言われたが、題名すら被るのは嫌だと思うので、なかなか作業は捗らない。

「おお」

またふいに思いつく。書き始めてみる。

また手を止める。全部消す。

そんな事を繰り返しながら、律子は何とか短編を書き上げた。

意気揚々として編集者に連絡する。

すると編集者は、

「申し訳ない。差し替えがあつて、有楽町先生の短編はなしになりました」

と言った。

普通なら文句の一つも言うのだが、お気楽な律子は別に何も言わない。

なら、投稿サイトでアップしようか。

などと思う程度である。

こうして日本一安直な作家の一日は終わる。

めでたし、めでたし。

あの夏の日

夏休み。

同窓会というほど堅苦しいものではないが、何となく集まる方向で話がまとまり、久しぶりに再開した高校時代の悪友共。

場所は近くの居酒屋。中には常連もいるような馴染みの店だ。

皆一端の社会人になり、早い奴はガキまで作ってる。

気楽な俺はまだ結婚どころか、彼女もない。

集まったのはヤロウばかりなので、俺が女を作らない事に話題は集中した。

「お前、高校の時モテてたよな？ 何で彼女いねえのさ？」

「そうだよな。何でだ？」

「まさかお前こっちか？」

「ちげーよ！ まだ俺がガキなだけさ」

するとその頃一番親しかった信二が言った。

「もしかして、お前まだあれ引き摺ってんのか？」

「おい！」

隣にいた晶が信二を嗜めるように睨んだ。信二は、

「あ」

と小さく叫び、黙り込んだ。

「あの事って何だよ？」

「何でもねえよ。気にするなって」

晶は俺の空になったコップにビールを注ぎながら陽気な顔で言った。

「お、ありがとう」

俺は零れ落ちる泡をズズツと吸い、一気にビールを飲み干した。

同窓会モドキは大いに盛り上がり、二軒目の店に行く話に発展した。

「翔の知り合いの店でさ。結構いい子がいるぜ」

すっかり酔いが廻った幹夫が言った。すると翔が、

「夜行くからそう思えるのさ。昼間会つとビックリするぜ」

俺達はそれに爆笑した。

「あ、そうだ、こつちが近道だ」

神社の脇まで来た時、翔が行った。

「ここを通り抜けた方が早いんだよ。俺のいつものコース」

「ええ？ やだなあ、こんな真っ暗なところは。俺は遠回りでも道を行くぞ」

信二が言った。すると翔は、

「お前昔から怖がりだったよな」

「関係ねえよ！ 暗くて足元が見えねえから、やめといた方がいいって言ってるの！」

しかし信二の「抵抗」も空しく、俺達は神社を通って向こうの通りまで出る事になった。

「どうせならさ、一人ずつ行く事にしねえか？」

酔っ払いの幹夫が提案した。

「おお、肝試しっぽくていいねえ。こんなに蒸し暑い夜は、絶好の肝試し日和だな」

陽気な声で晶が賛成した。信二は嫌そうにしていたが、また「怖がり」と言われたくないのか、何も言わなかった。

ジャンケンで順番を決めた。俺は運の悪い事に最後になった。

「畜生」

そう呟いて、一番手の信二が境内に入って行った。

「出るぞ出るぞ、信二！」

「うるせえよ！」

翔の煽りに信二は怒鳴り返した。

次にその翔が、そしてその次に晶が、さらに幹夫が続いた。

「さてと」

俺は幹夫の姿が見えなくなったのを確認してから、境内に足を踏み入れた。

「あれ？」

いくら進んでも幹夫の姿が見えない。

（俺を嵌めたのか？）

高校時代、仲間同士でよくこういう悪戯をしたものだ。

俺は酔いが廻るのも構わずに走った。

境内を抜け、反対側の通りに出た。しかし誰もいなかった。

「おい、冗談が過ぎるぞ！」

俺は大声で怒鳴ったが、誰も反応しない。

「どういつつもりだよ……」

俺はイライラして周囲を見回した。

「蓑輪君？」

「え？」

俺はハッとして声がした方を見た。

「やっぱり蓑輪君だ。私よ、飯山由美子よ」

俺は酔いでかすむ目を凝らして、その女性を見た。

「ユミか？」

懐かしい響きだった。ユミはニコツとした。トレードマークの八重歯はまだあった。

「こんなところで何してるの？」

「お前こそ何してるのさ？」

「私、この先にあるお店で働いてるのよ。母子家庭は大変なんだから」

「へえ」

俺達はどちらからともなく歩き出した。

「さっきまで信二達と一緒にだったんだ。居酒屋で飲んでたんだよ」

「信二君達？」

ユミの顔色が変わった。

「どうした？」

「蓑輪君、忘れちゃったの、信二君達と一緒にツーリングに行った時のことを」

「え？」

「皆崖崩れに巻き込まれて死んだのよ」

俺は驚愕した。思わず背中に手をやった。

「貴方も巻き込まれたけど助かったの」

「ああ」

俺はいろいろ思い出していた。この背中傷、その時のものか？

俺だけ助かった……。そうなんだ……。

親に聞いても話してくれなくて……。

しかも俺はそのまま引越して……。

「思い出した？ 信二君達はもういないのよ」

「ああ」

「危なかったわ。きっと貴方を連れに来たのよ。今日が命日なんだから」

俺はユミのその言葉にゾツとした。

「ここよ、私の働いてる店。さ、入って」

「うん」

俺はユミに導かれるまま店の中に入った。

「俺があんなことを言い出さなければ……」

翔が悔し涙を流しながら言った。晶が、

「お前のせいじゃねえよ。偶然だよ」

「だってさ、まさかあの神社が待ち合わせ場所だったなんてさ。それにあの日がユミの命日だなんて……」

「だからどうしようもなかったんだよ！ 衰輪とユミはクラス公認の仲だったんだ。俺達の友情の力より、ユミの衰輪への愛情の力の方が上だったんだよ」

「でもさ……」

それでも尚自分を責めようとする翔を晶は遮った。

「あの時、信二がユミの話をしかけたのを止めた俺にも責任がある。いつまでも誤魔化して来たから、ユミが怒ったんだよ」

その言葉に一同は静まり返った。

俺は全てを思い出した。

ユミを後ろに乗せ、ツーリングに出かけた事。

そして崖崩れに遭い、ユミが死に、俺だけ助かった事。

事故のショックでその時の記憶を全て失っていた事。

友人達が気を遣って俺にユミの話をしないようにし、両親も居た堪れなくてその町から引越しをした事。

「やっと、やっと会えたね、蓑輪君。ううん、瞬。もう一度一緒にツーリングに行こう」

ユミの顔は穏やかで、俺に恨みがあつて会いに来たとは思えなかった。

でも俺は構わない。ユミとならどこにでも行ける。

俺とユミは高校の制服に着替えていた。

そしてバラバラになったはずの俺のバイクは新車で現れた。

「行こう、ユミ」

「うん」

俺達の乗るバイクはどことも知れぬ広い道路を走った。

道はどこまでも続き、果ては見えなかった。

私、こついう者（死神）です（前書き）

ここはどこ？ 私是谁？

私、こういう者（死神）です

は。

あれ？

私、確か、通学途中、トラックに跳ねられて、グシャって地面に叩きつけられたはずなんだけど？

おかしいな。

顔を思い切りアスファルトにぶつけたような気がしたのに、血も出てないし、怪我もしてない。

なあんだ、夢だったんだ。

良かった。

さてと、学校に行かなくちゃ。うん？ 私ってば、制服のまま寝てたの？

あれ？ 何だ、ここ？ 一面お花畑。

どこよ？

「ああ、気がつかれましたか」

男の人の声がした。

「イヤーツ、痴漢ンンン！」

私は変態に部屋に忍び込まれたと思い、叫んだ。

「酷いなあ。私は痴漢ではありません。こういう者です」

声のした方をふと見ると、スーツ姿の男性が名刺を差し出して立っていた。

「ああ、どうも」

私は立ち上がって、それを受け取る。

「え？ 死神さん？」

その人の姿と職業のあまりのギャップに啞然とする。

「本当に？」

私は名刺とその人を何度も見比べてしまった。

「初対面の人には、よく言われます、ハイ」

死神を名乗るその人は、頭を掻きながら言った。

え？　　って事は、もしかして？

「はい。貴女はめでたくこちらの住人になりました」

ええええええええええッッッッ！？

「じゃ、じゃ、じゃあ、ひょっとしてもしかして、まさかとは思いますが、私、死んじゃったの!？」

私は死神の襟首をねじ上げて怒鳴った。死神は苦笑いをして、

「貴女の生きていた世界では、そういう言い方になりますね」

「……」

私は啞然とした。すると死神は、

「さつきり みちる 笹霧美智流さん、高校二年生。享年十七歳ですね」

と楽しそうに言う。

「あんだねえええええ!」

私は更にそいつの襟首をねじ上げた。そいつは苦しそうに、

「や、やめて下さい、苦しくて死にそうです……」

と言った。

「死神が死ぬのか、この!」

私は泣きながらそいつの襟を放した。

「はい、死にますよ。できればそうして欲しかったのですが」

「はあ？ 死神が死にたいの？ ふざけないでよ」

とことん人をおちよくっている。バカにしないで欲しい。

「死神は誰かに殺されると、その人の代わりに生き返って、その人の人生を引き継げるんです」

「……」

全身に鳥肌が立つ。という事はよ、この冴えないおっさんが、私の身体を借りて、女子高生として生きるって事？

「冗談じゃないわ！」

「はい、冗談ではありません」

そいつはふざけた様子もなく、ニコニコして言った。

「じゃあさ、あんたが私を殺してくれれば、私が生き返れるのよね」

「それはできません。生き返る事ができるのは、死神の特権なんです」

「そんなあ」

私は脱力した。

「ですから、あなた方には、死神候補生として研修を受けていただきたいのです」

私は急に希望を見出した。

「じゃあさ、研修受けて、死神になれて、誰かに殺してもらえれば、生き返れるのね？」

「はい、そういう事です」

死神は相変わらずニコニコしたままで答えた。

「よし、頑張るぞ！」

私は自分が死んでしまったのを忘れて、死神研修に燃えていた。

そして、しばらくして知ったのだ。

それは方便なのだと。

私も死神になり、死んだばかりの女性に同じ事を言った。

「死神になれば、殺されると生き返れるのですよ」

そんな風に騙さないと、最近の死んだ人達は、素直に自分の死を認めないのだそうだ。

あの世まで、嫌な「世の中」になってしまったのだった。

黄昏の恋の行方（前書き）

覆面企画用に書きました。全面的に甘ったるいのは、そのためです。

黄昏の恋の行方

「僕と結婚してくれ」

腐れ縁の男に遂にプロポーズされた。

背が高く、鼻も高く、眉毛もきりり。

きつちりと七：三に分けた実直そうな髪型。

一般的な分類だと高い確率で美男子だろう。でもあたしは実にあ

っさりと、

「無理」

と答えた。

当然のことながら男は目点になり茫然自失、今にもビルの屋上から飛び降り自殺しそうな顔色になった。

「どうして？ 僕達はずっと付き合ってたんじゃないのか？」

あれは嘘だったのか？

男は涙ぐんでいた。こいつは本物の馬鹿。あたしは思った。

「結婚してくれて言われてもさ、あたしはまだ中学生だし」

朝早く起きて苦勞して三つ編みにした髪を指でくるくるしながら言う。

「でも、澄香……」

澄香と言うのはあたしの名前。

ついでに言うとなんは金井。

それであたしにプロポーズした馬鹿男の名は金井睦美。

名字は同じだが、親戚でも何でもない全くの赤の他人だ。

名字が同じせいであたし達はよくクラスのあほ男子どもにからかわれた。

「二人は夫婦？」

中坊辺りが思いつきそうな下らない話。

もちろんあたしはいっさい無視していたが、睦美のあほはそれにいちいち反応した。

「ち、違つよ、澄香さんとは名字が同じだけで何でもないんだよ」
だから余計からかわれた。

それがわからないあほなのだ。

小さい頃はもう少しかっこ良かったんだけどね。

どうしてあんなになつてしまったのか。

「確かにあなたのことは好きだった時期もあるよ。でもそれは幼稚園の時じゃん！　いつまでそんな大昔のことを引きずっているのよ、あんたは？　それはもう終わったことだから」

いじいじした男は一番嫌い。

童話や昔話を読んで本気で王子様やお姫様になろうと思つていた頃から一歩も前に進んでいないの？

「澄香……」

睦美は今にも泣き出しそうな顔。

決壊寸前のダム並みに危険。でも同情はしない。

「とにかく今はまだ中学生なんだし、どっちにしても結婚はできないし！」

あたしはもう相手にするのが面倒臭くなり、歩き出した。

ついて来たら怒鳴りつけてやろうと思つたが、振り返ると睦美は姿を消していた。

（まさか本当に自殺？）

まさかね。あいつにそれほどの行動力はない。

断じてない。絶対ない。決してない。

そう思えば思つほど睦美のことが気になる。

あいつのことがこんなに心配だと思つたの生まれて初めてかも知れない。

「あたしってお人好しね」

自分に呆れながら睦美を探した。

あいつはそれほど足は速くないし、あたしが後を追って来るなんて思わないだろうから、隠れるとかの高等技術も使わないだろう。でもあいつの姿はどこにもなかった。

「睦美？」

名前を読んでみた。しかし返事はない。
何となく腹が立って来る。

「馬鹿野郎」

誰に向かってと言うわけでもなく叫び、家に向かう。

（無駄な時間過ごした）

溜息を吐いた。

見上げると、いつの間にかすっかり秋の空で翳雲が流れている。
西の空は茜色。もうすぐ日が暮れる。

要するに昔の言葉で言うところの「黄昏時」。

またふと睦美のことが頭をよぎる。

「考え過ぎ」

睦美の顔のイメージを頭の中から追い出して路地を曲がった。

「そこな娘」

背中の方から妙に甲高い声が聞こえる。

しかしあたしを呼んでいるとは思わずそのまま歩く。

「おぬしのことじゃ、あほう！」

いきなり何かで頭をどつかれた。

「いったああ！」

涙目になりながら振り向く。するとそこには誰もいない。

「何？」

意味がわからずにきよろきよろしていると、

「下じゃ、下」

と足元から声がする。

「は？」

足元を見ると、そこには顔も着ている麻のような素材のこげ茶色のローブもしわだらけの小さなおじいさんが木の杖を持って立っていた。

髪は白く、くしゃくしゃで肩まで伸びている。

顎の髭も白くて胸まである。

身長はどう見ても十五センチメートルくらいしかない。

その時はよく考える時間がなかったのだが、後で冷静になって思
い出すと、何とも言えない恐怖体験だと気づかされる。

「何？」

思わず一歩退いて尋ねた。

その小さいおじいさんはにやつと顔のしわを倍にして笑い、

「わしの名はシカム。おぬしとは違う世界の住人じゃ」

「そう。ではごきげんよう」

関わらないのが正解と瞬時に判断してその場を立ち去ろうとした。
するとそのおじいさんは、

「おぬしの知り合いがどこにいるか知りたくはないか？」

「え？」

思わず振り向いてしまう。

もしかして睦美のこと？

「どうじゃ、気になるじやろう？ 好き合った者同士……」

おじいさんの言葉が終わらないうちにあたしは素早く身を屈め、
おじいさんの頭を人差し指で突いた。

「何をするんじゃ、たわけ者が！ 目上の者の頭を叩くとは！」

「誰が好き合った者同士だ、このばけじじい！」

ぐんと立ち上がり、怒りに任せて怒鳴った。

おじいさんはそれでも、

「では違うと申すか？ あの者のことは好きではないと？」

「うっ……」

つい身じろいしてしまった。

何でこのじじい、あたしにプレッシャーをかけて来るの？

さっきは睦美に向かって「もう終わったこと」と大見得を切った
のだが本当は違う。

親友の矢吹みそのが睦美のことを好きだと知ってから、何だかお
かしいのだ。

睦美を好きでいてはいけないとどこかで思い始めた。

みそのとの友情を壊したくないから、自分の気持ちに嘘をつく。
何とも馬鹿馬鹿しいことだ。

するとおじいさんはそのあたしの心を見透かすかのように、
「おぬしはあの男のことが好きなのじゃろう？　自分に嘘について
何とするのじゃ？　正直に生きよ」

「おじいちゃんに關係ないでしょ！」
またぷいと顔を背けて歩き出した。

「わかった。仕方がない。では、もう一人のおなごのところに参る
とするか」

「え？」

またしても振り向いてしまう。

おじいさんはそれを読んでいたかのようににやりとした。そのど
や顔が何だかむかつく。

「おぬし、そのおなごが男のことを好いておるのを存じておるのだ
な？　だから慌てた」

「……」

本当に踏み潰してやりたくなくなるくらい憎らしいじじい！　でもそ
のとおりなのだから情けない。

「どうすればいいのよ？」

口を尖らせて投げやりな態度で言い放つ。

おじいさんは優しい笑顔になって、

「わしとともに我が国に参れ。おぬしの思い人はそこにおる」

殴りそうになる衝動を何とかおさえ、あたしは尋ねた。

「おじいちゃんについて行けば、睦美に会えるのね？」

するとおじいさんは何故か首をかしげて、

「うーん、そうだと良いが」

「はあ？」

また殴りたくなる。

何なんだ、このじじいは？

「おぬしが下らぬことを申しているうちに、あやつの気配を追えな

くなつてしもうた。今はどこにおるのかわからん」

「あんたねえ！」

襟首をねじあげたいところだが、小さ過ぎて無理だ。

「とにかくわしと一緒に参れ。我が国の女王陛下であれば、おぬしの思い人がどこにおるかおわかりになるであろう」

おじいさんは危険を察知したのか、あたしから離れてから言った。
「信用できない」

あたしは拒否した。

初対面の怪しいじいさんにはいそうですかとのこのこついて行くほどお人好しではない。

「ほう。なるほどな。見た目よりは頭が切れるおなごよ」

「うるさいな！」

いちいち癪に障ることを言うじいさん。

「では、どうすればわしを信じてくれるかの？」

じいさんはあたしをにやにやしながら見上げる。

一瞬その顔にぞつとしたが、

「あ、あたしの服をお姫様みたいなドレスにしてくれたら信じてあげる」

我ながらあほくさいことを言ったと思ったが、いずれにしてもじいさんにそんなことができるはずがないので、それでこの馬鹿馬鹿しい会話に終止符を打てる。

別にかまわない。

「何じゃ、そんなことで良いのか？」

「え？」

あたしはそんな答えが返ってくるとは思わなかったので、じいさんに背を向けていた。

「本当に？」

またまた振り向いてしまふあたし。

その時自分の服がきらきらしているのに気づいた。

「うわ！」

よく見ると私はきらびやかな純白のドレスを着ていた。
全体的にスパンコールが入っていて目が眩みそうなもの。ついで
に髪にはティアラが載っている。

本当にお姫様のような格好に変わっていた。

だが、客観的に自分の姿を想像してみると、かなり危ない人。テ
レビカメラもないし。

「それで良いか？」

おじいさんはやりとして得意そう。

で、何者？ 魔法使い？ 妖精？ 妖怪？

「これでわしを信用してくれるかな？」

「え、ええ」

条件をクリアしたからには信用せざるを得ない。

もつと難しいことを言えば良かったな。

「では参ろうか、金井澄香よ」

「は、はい」

どうしてあたしの名前を知ってるの？

そう尋ねたかったが、何故かあたしは氣を失ってしまった。

どれほどの時が経ったのだろうか？

あたしは目を覚ました。

ふと気づくと、服は中学の制服に戻っていた。

周囲を見るとそこは大広間。

遙か彼方に金ぴかの椅子があり、そこに女性が座っているのが見
えた。

多分、じいさんが言っていた女王様だろう。

遠目でわかりにくいのが、顔に比して大きな目をしている。奇麗な
人のようだ。

それに長いブロンドの巻き毛に首が折れそうなくらい大きな冠を
戴いている。

さっき私が着せてもらったドレスの何倍も豪華なお召し物。さす

が女王様ということか。

「目が覚めましたか、澄香。わらわがこの黄昏の国の女王レガソタです」

ずっと遠くにいるのに声がやけに近くで聞こえる。

随分大きな声の人だと思い、起き上がる。

「気をつけなさい、澄香。天井にぶつかりますよ」

レガソタ女王が言った。

「いやいや、あたしはそれほど大きくないですから」

あたしは苦笑いをしながら、立ち上がった。

ごきつと何かが当たる。

「え？」

ふとそちらに目をやると、あたしは天井すれすれまで背が伸びていた。

「何？どういう事？」

すると女王様が、

「だから申したではないか！ そなたはこの国の住人ではないのだ

！ 動く時は気をつけよ」

と怒鳴る。

下を見ると、女王様はあたしのすぐそばに座っているのがわかった。

てことは？

「ここは別の世界。そなたのからだはわが国の人間の十倍ほどあるのです」

「えええ？」

驚いて大声を出した。

すると城全体が揺れてしまった。

女王様は耳を塞いで、

「大きな声を出すでない！ そなたはわが国ではモンスターと同じ。静かにしてほしい」

「モンスター……」

その言葉は中学生女子にはきつい。
ブスとか言われるよりへこむ。

「わかりました、女王様」

あたしは周囲の物を壊さないように慎重に動き、正座した。
「思い人を探しに参ったそうですね？」

女王様が微笑んで尋ねる。

もうどうでもよくなったあたしは、

「はい」

と答えた。

「その思い人は真昼の国にあります」

「真昼の国ですか？」

「ここは黄昏の国。」

睦美がいるのは真昼の国。

ファンタジー全開なネーミングだ。

「はい」

女王様はにこにこしている。

何だか嫌な予感がする。

もしかして、その国はもの凄く遠かったりとかするのかな？

「その国はどこにあるのですか？」

私は恐る恐る尋ねた。

「わが国のとなりです。ここからであれば、馬車で半時ほどです」

「馬車で半時？」

よくわからない。

どれくらいかかるのだろう？

すると女王様は、

「ですが、そなたであれば数十歩でたどり着けましょう」

その言い方も何だか嫌だ。

自分が化け物みたいで落ち込む。

「但し」

「え？」

女王様の微笑みが顔から消えた。

「今は我が国と真昼の国は往来ができないのです。魔王が築きし壁によって」

「魔王？壁？」

さらにファンタジー。

どういうことだろう？

「神に追放された神官が邪な術を覚え、魔王を名乗りました。その者は天を操る術を使い、我が国と真昼の国の間に巨大な壁を築いてしまったのです」

女王様は深刻な顔で語ってくれているが、どうにも意味がよくわからない。

「その壁のせいで真昼の国は一日中真昼、黄昏の国は一日中黄昏になつてしまったのです」

「なるほど」

想像しにくいが、とても困ったことになっているのは理解できた。「城の外に出てごらんさい、澄香。我が国の空は一日中茜色なのです」

女王様に言われて、私は身をかめると大広間から廊下に出て、そのままほく前進の要領で城の外に出た。

「本当だ」

空は夕焼けで赤くなっている。

しかし反対の空を見ると、真つ黒になっていた。

夜ではない。星は見えないから。ただ黒い。

とても不気味。その壁はずっと上まで続いていて、果てが見えない。

「あれが魔王の壁です。あの壁のせいで我が国は……」

女王様が声をつまらせた。

「我が国はまだ良い。真昼の国は一日中照りつける日差しのおかげで作物が枯れ、水は干上がり、人々は飢え苦しんでいます」

女王様は涙を拭って語る。あたしも何だかうるつと来た。

「お隣の様子がわかるのはどうしてなんですか？」

疑問をぶつけてみた。すると女王様は、

「壁のそばまで行けば話はできるのです。中には真昼の国と黄昏の国で離れ離れになってしまった親子、夫婦や兄弟もあります」

何だかどこかで聞いたことがあるような状況。

「あの壁の向こうに睦美が……」

もう会えないような気がして来て、すごく悲しくなった。

「澄香、頼みがあります」

あたしは膝を着いて女王様に顔を近づけた。女王様は少しぎよつとしたよう。

「何でしょうか？」

答えは想像がつくが、一応聞いてみた。

「そなたのその力であの魔王の壁を破り、二つの国を救ってくれまいか？」

女王様は悲しそうな目であたしを見る。以前ペットショップで見たチワワの目に似ているなんて、絶対に言えないけど。

「わかりました。あたしも睦美に会いたいので、やってみます」

「そうですか。そなた達に祝福のあらんことを」

女王様は不思議な動作をした。

もしかすると、それは宗教的な意味があつたのかも知れない。

こうして、あたしは魔王の壁を壊すために出かけることになった。

「そなたにシカムを遣わします。わからぬことがあれば、何でもお聞きなさい」

女王様は言った。さっきの小憎らしいじいさんがまたあたしの前に現れた。

「では参ろつかの、澄香」

「はい、おじいちゃん」

まるで巨大口ボットにでもなった気分。

たくさんの兵士と市民の見守る中、城を出て魔王の壁を目指す。

あたしはそつと歩いているつもりなのだが、足を下ろすたびにそばにいる人達が倒れるのは、コントを見せられているようで切なかった。

「澄香」

城からしばらく進んだ辺りで、小さな馬に乗ったシカムじいさんが話しかけて来た。

「何？」

前を向いたままで尋ねる。

するとじいさんは、

「おぬしの世界のおなごは皆そのような服を着ておるのか？」

「みんなじゃないけど、あたし達は学校に行ってるからね。これは制服なの」

あたしはちらつとじいさんを見た。

「そうか。しかし不思議な服じゃのう。尻に何かの顔が書かれておるぞ」

光速で反応した。

「どこ見てんのよ、すけべじい！」

スカートを押さえ、じいさんを睨みつける。

しまった、今日はくまさんパンツはいてた、とか思っている場合ではない。

「何を言っておる？ すけべとは何じゃ？」

じいさんはきょとんとしている。

ああ、そうか、この世界には「パンチラ」とか「スカートめくり」とかは存在しないのか。

市民の中に女性もいたけど、誰もスカートはいてなかったしな。

「何でもない。気にしないで」

苦笑いして前を見た。

そんなつもりはないと言っても、あの背丈だとどうしても丸見えなわけだから……。

あきらめるしかないか。でも何となく手でスカートを押さええてしまう。

そんなことをしているうちに、あたし達は壁の前に着いた。遠くで見るのより圧迫感がある。

こりゃ、ベルリンの何とかよりすごいわ。何せ果てが見えないんだもん。

「伝令兵が先発して、壁の近くにいないように伝えてある。思う存分叩き壊してくれ」

じいさんの言葉にかちんと来たあたしは、

「おりゃああ！」

と黒い壁を殴った。

痛くはないがじんじん痺れる。

ぐおおおんと振動が伝わり、壁が大揺れする。

空全体が動いたような錯覚に囚われる。しかし崩れる様子はない。

「もつと強く叩くのだ、澄香」

「わかった！」

さらに殴る。

しかし壁は崩れない。手の痺れが強くなった。

「澄香、おぬし、本当に思い人に会いたいと思っておるのか？」

じいさんが嫌なことを思い出させてくれた。

睦美の間抜け面がイメージされるのを必死に消す。

「本当に思い人に会いたいと思わぬと、決してその壁は突き破れんぞ」

じいさんの嫌味な言葉は続く。

「うるさいなあ！」

いらついたあたしは今度は壁を蹴った。

しかし、壁は揺れることはあっても崩れはしない。

「無駄じゃ。やめよ、澄香。おぬしから本気を感じぬ。それ以上続けても仕方がない」

むかついてじいさんを睨んだ。するとじいさんは悲しそうな目を

していた。

「わしのたった一人の孫娘が真昼の国におるのだ。死ぬ前に一目会いたかったが、あきらめるしかない」

「……」

そんなことを言われてやめられるほどあたしは腐っていない。要するに単純なのだろう。そして壁を見る。

（睦美）

あいつがこの向こうにいる。

この壁を破ればまた会える。あたしは拳を握りしめた。

「おお！」

じいさんが叫ぶ。あたしの本気が伝わったようだ。

「ふうふうう！」

映画で観たワンシーンを思い出す。

自分は空手を習っているわけではない。

でも、この一撃にすべてをかける。集中。とにかく集中する。

「睦美ーっ！」

ありったけの声であいつの名を叫び、ありったけの力で魔王の壁を殴った。

壁は今までより激しく揺れ、大きな音を立てた。

拳が当たったところから亀裂が幾筋も走る。

「やったぞい！」

じいさんが叫んだ。あたしもつい口元が緩む。

世界が崩壊するような大きな音がして、がらがらと壁が崩れ始めた。

「澄香、離れよ。上から壁が落ちて来るぞ！」

じいさんの声がした。

「危ない！」

馬ごとじいさんを抱きかかえ、その場を離れた。

壁の崩壊は随分長い間続いた。それはそうだろう。

二つの国を完全に遮断していたのだから。

しばらく想像を絶するような土煙が巻き起こり、何も見えなくな
った。

やがて土煙が収まり、真昼の国が見えて来た。
それとともに日差しが降り注ぎ始め、黄昏の国に昼が訪れた。

二分されていた国の天が一つに戻ったのだ。

「澄香？」

真昼の国の向こうから、やはり巨大ロボットのよう存在の睦美
が現れた。

「睦美！」

顔を見てもそんな気持ちは絶対に湧き起らないと思っていたの
に、気がつくにあたしは駆け出していた。

「睦美！」

恥も外聞もなく、睦美に抱きついていた。

「す、澄香……」

あたしは泣いていた。

悔しいけど、こいつのことがどうしようもなく好きなんだと思い
知らされた。

「助けに来たよ」

「助けに？」

不思議そうな顔であたしを見る睦美。

「へ？」

涙を拭って睦美を見た。

そして真相がわかった。

真昼の国と黄昏の国。全部茶番だったのだ。

魔王なんて存在しない。

あの壁は、両国の先々代の王が争いの拳句、技師達に造らせたも
のだったのだ。

やがていがみ合っていた王達は死に、両国は和平を望んだ。

しかし壁を造った技師達もすでに他界し、解除方法がわからなくなってしまった。

それで、苦慮の末、異世界の住人に壁を壊してもらったのだという。

あまりにも身勝手な考えに腹が立つより呆れてしまい、何も言う気がしない。

「それで、たまたま最初に出会ったのがおぬしなのじゃ、澄香」
シカムじいさんは悪びれもせずと言った。

「そして、同じ時におぬしの思い人である睦美が真昼の国に呼び込まれたというわけじゃよ」

じいさんは英雄譚でも語っているつもりなのか、豪快に笑う。

「……」

あたしと睦美は顔を見合わせる。

「すまなかつたな、澄香。許してくれ」

じいさんはぺこりと頭を下げた。それを見てどうでもよくなった。
「もういいよ、おじいちゃん。許してあげる」

「そうか」

じいさんは嬉しそうに頭を上げた。そして、

「わしらの話は全部作り話じゃが、一つだけ真実があるぞ」

「え？ 何？」

あたしは睦美とともにじいさんを見る。じいさんはやりとして、
「好きな者への思いはどれほどの壁も突き破るということじゃよ」
その言葉に顔を赤くした。睦美は何のことかわからず、きょとんとしていた。

あたし達は女王様の待つ城に帰り、あたし達の世界に戻してもらうことになった。

「また会いたいわ、澄香」

女王様は何故か涙ぐんでいる。あたしまで泣けて来た。睦美はすでに泣いていたし。

「はい、女王様」

「元気でね」

「女王様も」

涙を拭って答えた。女王様は睦美とあたしを交互に見て、

「次に会う時はもう一人一緒に連れて参るが良い」

また顔が熱くなる。鈍感な睦美は、

「誰を連れて来ればいいのかな？」

と真剣に悩んでいる。馬鹿過ぎて悲しい。

「では参ろうか」

シカムじいさんの声が聞こえ、あたしと睦美は気を失った。

「うん……」

目を覚ますと、そこはじいさんに最初に会った路地だった。

空はまだ茜色のまま。

はつとして携帯を取り出すと、あれから五分も経っていなかった。

どういうこと？

「あ、澄香……」

となりで目を覚ました睦美が呟いた。お互い顔を見合わせ、思わず吹き出す。

「帰ろうか」

あたし達は立ち上がり、家路に着いた。

「それでさ」

と言ってみる。睦美があたしを見る。

「何？」

あたしはにこっとして、

「さっきの話、つつしんでお受けします」

と言うと、走り出す。睦美はきょとんとして、

「何のことだよ、澄香？」

限りなく鈍感な奴。

もう面倒見切れない。

間にいろいろあったけど、こつちの世界のさっきの話はあれしかないじゃん、睦美。

「教えなーい」

あたしは笑いながら走った。

睦美が追いかけて来る。

「待ってよ、澄香」

そのまま家まで走り続けた。

そうそう。

シカムじいさんや女王様がどうしてあたし達の名前を知っていたのか、こつちに戻って来てわかった。あの人達とは遠い昔に出会っていた。

睦美とあたしがまだ幼稚園に行っていた時、お母さんが買ってきてくれた童話の絵本。

その中に同じ名の登場人物がいた。

あの当時、あれほど仲が良かった睦美とあたしの今の関係を見かねて、本の世界から飛び出して来たのだろうか。

そんな風に思えた。

ありがとう、シカムじいさん、女王様。

あたし達また仲良しに戻るよ。これからずっと見守ってね。

嫁（前書き）

某企画勝手に参加作品です。ちなみにテーマは「憎悪」です。

嫁

私は所謂、姑。^{しゅういす}息子の嫁から見ればこの上ない邪魔者だろう。

決して嫁はそんな素振りを見せない。私に逆らうような事は言わないししない。

しかし、言いようのない怒りを抱いてしまう。炊事をさせれば鍋を煮溢し、掃除をさせれば塵や埃をあちらからこちらに移動させるだけ。洗濯物は皺だらけのままです。

息子は一体あの女のどこが良くて好き合ったのだろう。あの女はお世辞にも美人ではないし、スタイルも然程良い訳でもない。性格が穏やかなのは長所なのかも知れないが、それも度が過ぎれば短所だろう。あれは穏やかなのではなくて愚鈍なのだ。使う言葉が間違っている。

あの女の姿が見えない。台所にも居間にもいない。庭で洗濯物を干していたのはもう数時間前だから、そこにもいないだろう。買い物か？ あの女が買い物に行くのと八百屋や魚屋に言い包められて、必要のない物まで買い込んで来るのも腹が立つ。帰って来たら注意しようと思い、自分の部屋に歩き出した時、廊下の先にある手洗いから水が流れる音がした。ガチャツとドアが開き、あの女が顔を出した。

「お義母様^{かあ}」

何故か苦悶の表情を浮かべ、私を見る。どうしたのかと尋ねようと思ったが、要領を得ない話を聞かされるのが目に見えていたので何も言わずに顔を背け、あの女を押し退けるようにして自室へと歩き出す。

「お茶を淹れます」

頼んでもいない事をするのは何か目的があるのだろうか？ 今更私に媚を売っても何も変わらないというのに。私は立ち止まってチラツと振り返り、また歩き出した。あの女はそれを承諾と捉えたの

か、

「すぐに」

と言うと、台所へと走り出した。走るんじゃないよ、埃が立つから！ そう言いたいのを堪え、私は自分の部屋に入った。

「ふう」

一日中、あの女を見ていると私が精神的に参ってしまう。夫に先立たれて三年。あの女は夫の葬儀の時、号泣していた。あの頃はまだ今程あの女を嫌っていなかったから夫の死を悼んでくれた事に素直に感謝した。

しかしそうではなかったのだ。翌年、息子の提案で飼いだめた柴犬が家の前の道路で車に轢かれて死んでしまった。まだ飼ってから三ヶ月にもならなかった。私は小さな命が喪われた事を悲しんだ。その犬を選び、「リン」と名づけ、毎日朝の散歩に連れて行っていた息子も酷く落胆していた。リンが事故死したのは、あの女がうっかりリンのリードを放してしまったからだだった。もちろん、私も息子もその事であの女を責めたりはしなかった。息子はむしろ、あの女を慰めた。君のせいじゃないよと。その時は私もそう思った。あの女が泣き出すまでは。

あの女は夫の葬儀の時と全く同じ表情と声で泣いたのだ。私の思い過ごしではない。本当に最初から最後まで同じだった。恐ろしいくらい。私は、夫と犬を同列に扱われた気がした。

あの日以降、私はあの女に対する見方が変わった。可愛いと思えていた話し方も仕草も全てイラツきの元になった。それまでは鍋を噴き溢すと、

「火傷しなかった？」

とまずは気遣ったのだが、その時からは無言であの女を押しつけ、鍋を洗う。掃除が雑だと、

「こうすれば綺麗にできるのよ」

と見本を示したのだが、その時以降はあの女の手から掃除機を奪い取り何も言わずにやり直す。

そこまでされれば、普通の人間なら何か言うのだろうが、あの愚鈍な女は何も言い返さず、

「すみません、すみません」

と謝るだけだ。それが更に癢に障った。

「失礼します」

あの女がノックもせずには部屋に入ってきた。私は何も言わずに舌打ちだけする。しかし、鈍感なので気づかないようだ。あの女はテーブルの上に盆を置いて湯飲み茶碗を取り、私の前に置いた。

「あの人が出張で買って来てくれた宇治茶です」

あの女は不器用に微笑んで言い添えた。私は湯気が立ち上る茶碗を覗きこんだ。確かに美味しそうな香と色をしている。只、この手の高級茶葉は熱湯で淹れてはいけないのだ。その時点で失格だ。

「火傷しそうな温度ね」

そう言っただけようかと思ったがやめた。多分そんな皮肉も通じないのだ、この女には。私は茶碗の温度を指先で確かめ、そつと手取る。これ程熱い茶碗を平然と持ったこの女はどれ程手が鈍感なのだろう？ そつと茶碗を顔に近づけ、口元に運ぶ。む？ それ程熱くなかった。むしろ適温だ。私は一口飲み、茶碗を置いた。

「……………」

ふと気づくとあの女がにやりと笑っている。まさか……。そんな……………。

「う……………」

私は呻き声を上げる事もできず、畳の上に倒れた。毒？ 毒が入れられていたのか？

薄れ行く意識の中で私はある言葉を思い出していた。

あなたが嫌いな人はそれと同じくらいあなたの事が嫌いです。

嫌っていたのは、あの女も同じだったのだ。あの女が愛おしそうに腹を摩っているのが、私の見た最後の光景だった。

姑（前書き）

某企画勝手に参加作品です。ちなみにテーマは「不安」です。

姑

凍てつくような寒さがいくらか和らいだ日曜の午後。私は、夫の両親と同居する形で新築した二世帯住宅のささやかな庭で、花壇の手入れをしている。

「ふう」

何もしていなければ、寒くていられない外の空気も、庭弄りをして体温が上がっているとそれ程苦にならない。むしろ、やや冷たい風が、紅潮した頬に心地良いくらいだ。一息吐こうと立ち上がり、家の方に歩き出す。

「あ、こんなところにいたのか」

我が夫が居間の掃き出し窓を開けて言った。

「お袋の姿が見えないんだけど、どこに行ったか知らないか」

このマザコン。心の中で軽く罵る。夫は一流企業のサラリーマンで、真面目で仕事もできて私にも優しい。只一点、母親に過剰なまでに頼っている事を除けば、何も問題はない。

「どこに行っただろう」

私が知らないと答えると、夫はソワソワした様子で奥へと歩いて行く。忘れているのだろうか。義母は昨日から二泊三日で旅行に出かける事になっているのを。忘れているなら、その方がいい。私は教えるつもりはないし。

夫のマザコンが酷くなったのは、義父が亡くなってからだだった。義父が存命中は、義母は義父と仲睦まじい夫婦で、どこへ行くのも一緒だった。私はそんな二人を見て、私達もあなりたいと思った。しかし、夫が二人を見る目は違っていた。その目は、嫉妬に燃える者の目だった。私はおぞましい事を想像してしまった。夫は義母に親子以上の愛情を感じているのではないかと。

やがて義父の身体に癌が見つかり、病院に入院した。義母は毎日

のように病院に行き、身の回りの世話をした。夫が、

「完全看護の病院だから、そんなに行く必要はないよ」

と嫉妬心剥き出しで言っても、義母は通い続けた。

しかし、義母の献身も虚しく、義父は他界した。それが今から三年前。始めの数ヶ月は、魂の抜け殻のような状態だった義母も、夫の優しい慰めの言葉に癒されたのか、少しずつ明るさを取り戻して来た。そこまでは微笑ましかったのだが、二人の親密さはそれで止まらなかった。私に隠れて、二人きりで温泉旅行に行ったり、買い物に出かけたりしていたのだ。私は別に嫉妬はしなかった。只、夫と義母の関係が気持ち悪かった。

「おかしいな。親戚の家にも友人の家にもいないんだ。本当に知らないのか」

夫はあちこちに連絡したらしい。恥ずかしいとは思わないのだろうか。呆れ顔になる。

「お前、ちよつと冷たくないか」

私の態度にムツとしたのか、夫はそう捨て台詞のような言葉を吐き、また奥へと消える。以前の私なら慌てて夫を追いかけて、謝罪したろうが、今はそんな事はしない。その必要はないから。大きく伸びをして、もう一度庭弄りを始める。春には綺麗な花が咲く。楽しみだ。

「交番に行つて来る。何かあったのかも知れないから」

血相を変えた夫が、玄関から飛び出して来て、コートの袖を片方だけ通した状態で私に言った。ほんの少しだけドキツとした。交番に行くんだ。大袈裟ね。でも、大丈夫。警察が来れば、はつきりするから。お義母様は、旅行中だと。しかも、携帯電話を部屋に忘れたままでね。

「フフ」

思わず笑みが零れる。私は悪い女だろうか。花壇の土を入れ替えながら、ふとそんな事を考える。

しばらくすると、夫が息を切らせて戻って来た。

「お袋が行方不明だつていうのに、呑気に庭弄りなんかしてるなよ。お前も一緒に来てくれ」

夫の言葉に心拍数上がる。只、話が訊きたいだけよ。何かわかるはずなんてないわ。自分を落ち着かせる。

「早くしろよ。警察も忙しいんだ。待たせちゃ悪いだろ」

夫は私が軍手はずし、靴を履き替えるのをイライラして、見ている。私は別にわざとのろろ動いているのではない。動揺。何か知られているのではないかという思い。そんなはずはないのだが、否定し切れない弱い自分。心の中の葛藤が、身体を強張らせる。

「そのままでもいいよ。行こう」

業を煮やした夫が私に歩み寄り、右手を掴む。私は思わずその手を払いのけた。

「何だ、どうしたんだ、お前」

夫は不思議そうに私の顔を覗き込んだ。わたしの顔は紅潮していた。様々な思考が交錯して。

「外で汗掻いて、風邪引いたのか。顔が赤いぞ」

突然優しい言葉をかけられた。夫は私を気遣うように肩を抱いてくれた。

「怒鳴ったりして悪かったな。交番へは行かなくていいよ。部屋で寝ている」

その言葉に思わず安堵したが、悟られないようにしないといけな

い。夫は私を掃き出し窓まで連れて行ってくれた。そして交番へと走り出した。大丈夫だろうか？ 母親の姿が見えなくなっただけであの取り乱しよう。あんな男と今後も暮らしていけるのかしら？ 心配だわ。でもね。いくら探してもらっても誰に尋ねても、貴方の大好きなお母さんは見つからないよ。お母さんは今は、春に咲く花のために眠っているのだから。

ごめんね。
心の中で夫に詫びた。

髪の手

おや？

朝、顔を洗っていて、ふと洗面台を見ると、大量の髪の手が。

「う」

何だ？ こんな長い髪の手、女房のものじゃない。

俺は怖くなった。

何故なら以前、付き合ってた女が自殺した事を知ったからだ。

長い髪が傲慢の、細面の美人だった。

確かそいつは、三日前に死んだと聞いた。

「まさかな」

それでも信じなかった。

その夜。

今度は風呂で頭を洗っていた時だ。

「げっ！」

排水口にまた長い髪の手。

そんな！俺はあの女を捨てたが、殺した訳じゃない！

自殺だって、病気を苦にしているのはずだ！

俺は懸命に自分に言い訳しているのに気づいた。

それほど怖かった。

「う」

更に次の日の朝だ。味噌汁にも長い髪の毛。

「どうしたの？」

怪訝そうな顔で女房が俺を見ている。

「いや、味噌汁の中に髪の毛がさ」

俺はそれを引き出して女房に見せた。

長さは四十センチくらいあった。

女房は気味悪がるかと思ったが、何故か呆れた顔になった。

そして冷たい口調で言った。

「いい加減、床屋に行きなさいよ、貴方。まるで落ち武者よ」

タイムマシン

富田林博士は、時空跳躍を研究している若き科学者である。

彼の夢は「タイムマシン製作」であった。

誰もが無理だと言った。

しかし彼には確信があった。

何故ならまだ子供の頃、タイムマシンらしきものに乗って現れた男が残した設計図を今は亡き父親から譲り受けているのだ。

その男の顔も名前も父親は教えてくれなかった。

父親はそのことを尋ねると黙して語らなかった。

彼は諦めず、研究を続けた。

理論と実験のすり合わせをする。

そして遂に彼はタイムマシンを完成させた。

テストを試してみた。

一ヶ月前に戻ってみる。

成功した。

博士は競馬場に行き、大穴を連続して的中させ、巨万の富を得た。

ある地方へ行き、地震を予言し、多くの人を助けた。

彼はそうしたテストを繰り返し、遂に決断した。

父親が会った男が現れた時代に行く事にしたのだ。

今から50年前。

今までのテストでは一番古くて1年前への時間旅行だった。

緊張した。今までにない時間跳躍。

失敗するかも知れない。

そんな不安が、操作する手の動きを鈍らせる。

しかし博士は迷いを振り払い、タイムマシンを起動した。

50年前の日本。

男は自分が誰なのかもわからず、彷徨い歩いていた。

そんな男を見た小学生の富田林君は、男に声をかけた。

「おじさん、どうしたの？」

「私は、自分が誰かわからないんだ。誰かを探しに来たような気がするのだが、誰を探しに来たのか思い出せない」

男は白衣を着ていて、医者か科学者に見えた。

「これを渡したかったんだと思う。ここに書いてある住所が、その人のいる家なのかも知れない」

富田林君は、男から大きな茶封筒を受け取った。

中身は、機械の設計図だった。文字が書いてあった。

「たいむましん？」

富田林君は不思議そうな顔で男を見上げた。

「タイムマシン？ その言葉、何か関係があるような……。思い出せない……」

男はまもなく、通報を受けた警察官に連れられ、パトカーに乗せられて行ってしまった。

富田林君は近くの交番に保護され、両親が迎えに来るまで設計図を見ていた。

「これ、何だろう？」

富田林君はそれを自分の秘密の宝物にするつもりで、ズボンのポケットにねじ込んだ。

「あのね」

編集者の冷たい視線が突き刺さる。私は下を向いたままで、

「はい」

「結局、記憶喪失の男って、富田林博士でしょ？」

「はい」

「じゃあさ、その設計図は誰が書いたの？ タイムパラドックスじゃん」

「はあ」

そうは言われても、設計図を受け取ったのは、私なのだ。

そしてそれを科学者の息子に渡した。

で、息子はタイムトラベルをして記憶を失い、子供の頃の私の前に現れ、設計図を渡した。

現実にそうなのだ。

だから、

「タイムパラドックスじゃん」

とか批判されても、実話を元に再構成した小説なのだし、グダグダ言われたくないなあ。

きょうはうちそう

わたしのおうちは、びんぼうです。

なので、ごはんはあさとよるだけです。

おひるごはんは、こうえんでみずをのんではがまんします。

ときどき、おなががぐうってなってはずかしいです。

それで、きょうはおとうさんがいつもよりはやくかえってきました。

「今日は」馳走だぞ」

おとうさんがわらっていいました。わたしたちもわらいました。

「今日はお肉のお料理よ」

おかあさんも、うれしそうにいいました。

「わーい」

わたしともうとは、よろこんではしりまわりました。

でも、おなががへっているので、すぐにはしるのをやめました。

おかあさんはたくさんごちそうをつくってくれました。

わたしともうとは、どんだべました。

おながたぬきさんみたいにふくれて、ふたりでわらいました。

おとうさんとおかあさんもわらっています。

わたしはなんだかぬくくなって、いもうとおへやでねました。

うーん。くるしいよ。

わたしはくるしくて、めをさしました。

おとうさんが、わたしのくびをしめていました。

おとうさんはいっていました。

「おとうさん、くるしいよ。やめてよ。わたしがいいこでないから、おこってるの?」

「違う、違うんだ」

おとうさんはまだないています。わたしもなきました。

「ごめんなさい、ごめんなさい。いいこになるから、おこらないで、おとうさん」

わたしはなんかいいいました。それでおとうさんはわたしのくびをしめるのをやめました。

「ごめんよ、ごめんよ」

おとうさんはわたしをだきしめました。

「くるしいよ、おとうさん」

おとうさんはまだなっていました。

おかあさんもないています。もうとはまだなえています。

「ごめんな、ごめんな。お父さんとお母さんが悪かった。ごめんな」

「ごめんね、ごめんね。お母さんを許して」

おかあさんもわたしをだきしめてくれました。

「おとうさん、おかあさん、なかないで。わたし、いいこになるから」

「おまえはいいこだよ」

「そうよ、いいこよ」

おとうさんとおかあさんは、わたしをみてわらいました。

わたしもわらいました。

それであさになりました。

おとうさんは、しごとにいきました。

おかあさんもおにんぎょうをつくっています。

わたしともうとはおてつだいです。

おひるはまたみずかな？

おにくがたべたいな。

でもいいや。

おにくたべると、おとうさんとおかあさんがないちゃうから。
がまんしなくちゃ。

笑いこそ命

俺は売れない漫才師。相方が最悪だ。

突っ込みなのに噛みまくりだ。

俺がいくら絶妙のボケをかましても、奴が噛んで滑る。

だからどんなコンクールに出ても、大会にエントリーしても、予選敗退。

ネタ合わせの時は完璧なのに、本番で悉くしくじるのは、故意にやっているのではないかと思ってしまうほどだ。

コンビを解消しようかと真剣に考えた事は幾度となくあった。

しかし、代わりの相方がいない。

それで諦めていた。

そんな俺の前に、まさしく天から遣わされたのではないかという相方候補が現れた。

突っ込みの達人だ。

どんなボケでも拾い、完璧に突っ込む。

是非コンビを組みたい。

しかし一つ問題がある。

そいつにも相方がいるのだ。

但し、ボケ切れないボケ役。

そいつの中途半端なボケすら、奴は拾って「モノ」にしていた。

もうこいつ以外考えられなかった。

俺は思い切って、そいつに話しかけた。

「俺とコンビを組まないか？」

俺は心臓が高鳴っていた。断わられるのを覚悟で言ったからだ。

だが、そいつの答えは意外だった。

「もう少し待ってくれ。相方がもうすぐ死ぬんだ」

「えっ？」

俺はギクツとした。ネタか？ 最初はそう思った。

よくよく聞いてみると、奴の相方は、ガンなのだそうだ。

余命一ヶ月。それまでコンビを続けたいと言う。

そんな話を聞いたら、俺は誘えなくなった。

「相方が死ぬのを待って、コンビ組むなんて、あまりにも非常識じゃないか？」

俺はそいつに言った。するとそいつは、

「あのヤロウにはウンザリなんだ。解散したかったんだけど、その矢先にガンになってさ。それを理由に解散したら、俺の評判が悪くなるだろ？ それも将来的にまずいからさ」

と言った。俺は虫酸が走った。

こいつ、相方を何だと思っているんだ？

消耗品だとも思っているのか？

こんな奴とコンビを組んだら、どんな目に遭うかわからない。

俺はそう思って、そいつとのコンビを諦めた。

そして一ヶ月後。

そいつの相方は、話の通り、ガンで死んだ。まだ二十代だった。

葬儀に参列し、相方の遺体に縋^{すが}り付いて泣いている奴の姿を見て、俺は奴が強がりと言っていたのだと気づいた。

俺はふと自分の相方を見た。

そして自分自身を省みた。

俺は奴より酷い奴だ。

相方を切ろうとしていた。自分のために。

だが、奴は最後まで相方を見捨てなかった。

俺は理解した。

まだ俺達は生きている。

生きているなら、先はある。

まだ頑張る余地はあるはずだ。

俺は相方を誘い、ネタ合わせをするため、劇場の稽古場に向かった。

まだだ。まだ終われない。

笑いこそ俺の進む道。

笑いこそ我が人生。

笑いこそ、我が命。

覆面作家の憂鬱

私は趣味で小説を書いている自称小説家。

公募に何度か投稿しているが、まさしく「かすりもしない」が続いている。

もうそろそろバカな夢を追うのはやめようと思いかけていた。

そんな矢先、ある投稿サイトで、「覆面小説フェア」を開催していると掲示があった。

特に参加資格はなく、サイトのメンバーであれば誰でもOKらしい。

私はこの参加を最後に小説を書くのをやめようと思い、参加申し込みをした。

そして私は一編の短編小説を書き上げた。

仮名を考え、投稿する。

参加者は全部で二十名。あまり他のメンバーと交流がない私は、他の作者の作品を推理するなんてできず、全く普通に読者として読み、感想を寄せた。

推理サイトにアクセスし、他の人達の分析を読んでみる。

なるほど。読点の癖とか、言い回しの癖とか、いろいろあるものなのね。

今まで自分の癖など全く意識した事がないので、それはそれで勉強になった。

そんな他人の推理を読み進めているうちに、私も分析をしてみようと思えるようになった。

この作品はあの人かな？ でも、成り済ましの可能性がある。

これは間違いなくあの人だ。癖を隠そうとしているけど、語尾の「のだ」が頻繁に使われている。

そして改行をあまりしていない。

そんな事に気づき始めると、推理が楽しくなってきた。

そんな中、ある事に気づいた。

私の作品だけ、誰も推理してくれていない。感想も寄せられていない。

何だか悲しくなった。

確かに他の人達の作品は、どれも練り上げられたもので、とても太刀打ちできないものだけだ。

酷評でもいいから、何か言葉が欲しい。

そんな思いを抱いた。

そして数日後。

私の作品をようやく推理してくれた人がいた。

全然わからないらしい。しかも、全く別の人と判断している。

これは喜んで良いのだろうか？ 何となく落ち込む。

その人は感想欄にも書き込みをしてくれていた。

うーん。私の思い描いたのとは違う解釈だ。

仕方ないと思うけど、残念だな。

でも、評価は良かった。酷評じゃないだけマシだと思った。

更に数日後、遂に推理の締め切り日が来た。

私の作品は最後まで誰も当ててはいなかった。

これは凄い事なのだろうか？

寂しかった。私の事を皆知らないだけなのだ。

だからわからなかった。

今回のフェアで覆面を被り通したのは、私ともう一人だけだった。

もう一人の人は、この企画の常連で、いつも意外な作品を書いて逃げ切っている人だった。

彼は皆の賞賛を浴びていた。

えっ？

その時、初めて気づいた。

「あのファンタジーを書いている人とはとても思えないくらい強烈なホラーでした」

そういう感想が、私を賞賛する言葉の中にあっただ。

「そうそう、全然わからなかった。文章も全く雰囲気が違うし。凄い人です」

そんな……。

今までマイナスな事ばかり考えていた私が、初めて抱いた感情。

「小説書いていて良かった……」

本当に怖い映画館

俺は人生に絶望していた。

会社をクビになった。彼女に婚約を解消された。

友人に貸していた金を踏み倒され、逃げられてしまった。

残されたのは住宅ローンと自動車ローン。

要するに借金苦だ。しかも返せる当てがない。

死ぬしかない。直感的にそう思ってしまった。

両親共既にこの世にはいないし、親戚は全く付き合いがない。

友人も少ないから、俺が死んでもさして影響はないだろう。

人間は、悪い事を考え始めると、次々に更に悪い事を思いついてしまうようだ。

「その貴方」

トボトボと道を歩いていると、後ろから声をかけられた。

振り返ると、そこにはまるで映画に出て来る執事のような風体の老人が立っていた。

「何ですか？」

俺は面倒臭そうに言った。するとその老人はニッコリして、

「映画を見ませんか？」

「は？」

何だ、気が狂っているジイさんか？ 俺は咄嗟にそう判断し、逃げようとした。

「貴方のためになる映画です。是非、ご覧下さい」

老人は微笑んでいるが、何とも言えない威圧感を漂わせていた。

「は、はい」

俺はその迫力に負けてしまい、老人の導くままに目の前にある映画館に入った。

こんなところに映画館あったかな？ 少しだけ不思議に思った。

映画館の中は、とても古い造りで、子供の頃に行った映画館によく似ていた。

何となく懐かしい感じがする。

「入場料は？」

俺は財布が空なのを思い出し、老人に尋ねた。

「いえ、お代は頂きません。どうぞ、中へ」

老人はまたニツコリして言った。

「そ、そうですか」

俺は安心すると同時に、妙な話だとも思った。

座席は五十くらいしかない、こじんまりしたものだ。

他に観客は一人もいない。

「上映開始します」

老人の声が映写室の中から聞こえた。

たちまち場内は暗くなった。俺は慌てて近くの座席に腰を下ろした。

「うん？」

映画は、俺と同年代くらいの男が、崖つぶちを歩くところから始まった。

「俺なんか生きていても仕方ないんだ」

男はそう呟くと、崖から飛び降りてしまった。

うお。他人事とは思えない話だ。

しかし、凄いスタントだな。

カメラの切り替えなしで崖から飛び降りるなんて、危険過ぎるぞ。
シーンが変わった。

男は死んであの世に行ったようだ。

男はまた崖を歩いている。あの世はこんなところなのだろうか？

あつ、落ちた！ また落ちたぞ。

あれ？

また男は崖を歩いている。あつ、また落ちた。

何だ、これは？ ああ、まち崖から落ちた。

そんなシーンがずっと続き、俺は気持ちが悪くなって来た。

「うっ……」

思わず席を立ち、外に出た。

「どうされました、お客様？」

老人が声をかけて来た。俺は吐き気を堪えながら、

「何なんですか、あの映画は？ 男が何度も崖から落ちて、それが
ずっと続いて……」

「気分が悪くなりましたか？」

老人は何だか嬉しそうに尋ねる。俺はそれが癪に障り、

「ええ、気分が悪くなりましたよ。当たり前でしょう！」

「そうですか。あれはこれから貴方が体験する事をお見せしたものの
なのですね」

「何だつて？」

俺はギョツとした。この老人、俺が死のうとしている事を知っているのか？

どういう事だ？

「わかりませんか？ 自ら命を絶つ者は、あの世でも苦しみ続ける
のですよ。そして、永遠にそれを繰り返すのです」

「そ、そんな……。何でそんな事がわかるんですか？」

「わかりますよ。私は死神ですから」

「！」

俺は老人の威圧感が何となく納得できた。そうか、そういう事だったのか……。

「生きなさい。死んではいけません」

老人は威圧ではなく、優しい眼差しで俺を見ていた。

「人は、生きる事が死を選ぶより辛い時に自らの命を絶つんです！
生きて行く事が辛いから、死を選ぶんですよ！」

俺は俺の事を何も知らないくせにと思い、反論した。

「本当に死ぬ事で貴方が救われるのなら、私は貴方に生きなさいな
どとは言いません」

死神は優しさの中に厳しさを込めた目で俺を見た。

「貴方はこの世に生を受けて、今まで何一つ良い事がありませんで
したか？」

「えっ？」

俺はその質問にハッとした。

「貴方はずっと不幸でしたか？」

「……」

違つともそうだと答えられない。

「死神が死のうとしている者を助けていいのか？ それでは職務怠
慢ではないのか？」

俺はまだそんな減らず口を叩いた。すると死神はまた微笑んで、

「私達の仕事は、生きている者を殺す事ではありません。死んだ者をあの世に案内するのが仕事なのです。貴方はまだ、死んではいけない。死ぬべき人ではないのです」

「そんなのは詭弁だ！」

俺は映画館を飛び出した。

「死ぬ！ 俺は死ぬ！ 死んでやるウツ！」

俺はそのまま大通りに飛び出し、トラックに跳ねられて死んだ。

そして……。

俺はふと気づくと、歩道を歩いていた。

前方から大型トラックが走って来る。

俺は不意に走り出し、そのトラックに跳ねられた。

跳ね上げられながら、俺は大通りの向こうに映画館の客席を見た。

見知らぬ男が、俺が跳ね飛ばされるのを不快な顔をして見ていた。

多分あの男も自殺しようとしているのだ。

だから俺を見ている。でも気づかないんだ。

結局あいつも次の出演者なのか？

何て恐ろしい映画館なんだ……。

日本それほど昔ではない話（平成残酷版）

あるところにおじいさんとおばあさんが住んでいました。

おじいさんは山へ芝刈りに、おばあさんは川へ洗濯に行きました。

そしておじいさんは山の中で一本の光り輝く竹を見つけました。

「あからさまに怪しい竹じゃな。そのままにしておいた方が良さそうじゃ」

おじいさんは必死にアピールしている竹を無視して、そのまま家に帰ってしまいました。

おばあさんが川で洗濯をしていると、大きな桃がドンブラコ、ドンブラコと流れて来ました。

「おお、こりやまた大きな桃じゃこと。市場で売って金儲けじゃ」

意地汚いおばあさんは、桃を拾って市場に持って行き、それを高値で売ってしまいました。

そして、おばあさんは家に帰っておじいさんと儲けた金で飲めや歌えのドンチャン騒ぎをしました。

翌日のことです。

庭で犬のポチがけたたましく鳴くので、おじいさんはポチを叱りました。

「うるさい、このバカ犬！ 静かにせんか！」

ポチは叱られてしょげてしまいました。

午後になりました。

おじいさんはいつものように山に芝刈りに出かけようとしてました。

「行つてらっしゃい、おじいさん」

意地汚いおばあさんが言いました。するとその時です。

「柄^{がら}巢^{すだか}阪^{しげ}月子^ちさんのお宅ですね？」

刑事が現れました。

「はい、そうですが」

「保護責任者遺棄致死の疑いで逮捕状が出ています」

刑事は凄みのある顔で言いました。おばあさんはびっくりして、

「何の事ですか？」

「貴女が市場で売った桃の中から生後間もない乳児の遺体が出て来たんです。知らないとは言わせませんよ」

「ええ！？」

おばあさんはいろいろ言い訳をしましたが、

「話は署で聞きます」

とパトカーで連行されてしまいました。

おじいさんは呆然としていましたが、やがてにんまりとしました。

「これで大手を振って浮気できるぞ」

おじいさんはその日若い女をたくさん集めて夜通し遊びました。

ところがおじいさんの酒池肉林の生活も長くは続きませんでした。

ある日、おじいさんが山へ芝刈りに出かけると、長い髪の美しい女性に出会いました。

その女性はおじいさんが今まで会った女性の誰よりも美しく、魅力的でした。

「わしと暮らさんか？」

即実行のおじいさんはいきなり言いました。

「はい」

その女性はニツコリ微笑んで言いました。

おじいさんは喜んで、芝を刈るのも忘れてその女性を家に連れて帰りました。

その夜です。

おじいさんは生気を吸い取られたように痩せ細り、泥のように眠っていました。

相当激しい夜だったようです。

「起きろ、ジジイ」

「む？」

おじいさんはゾツとするような声に目を覚ましました。

「ひっ！」

そこには雪女が立っていました。あの美しい女性の正体は雪女だったのです。

「お前は私の友達を見殺しにした。その報いを受けよ」

「見殺し？ 何のことじゃ？」

おじいさんは意味がわからず、尋ねました。すると雪女は、

「竹の中にいたかぐや姫だよ！ お前が竹を切って出してくれなかったから、あの子はそのまま死んでしまったんだ！」

「知らん、そんなこと！」

おじいさんはとんだ濡れ衣だと思いました。

「うるさい！ お前のような奴は、ずっとこうしているがいい！」

雪女は猛吹雪を起こし、おじいさんを氷漬けにしていきました。

「かぐや、仇は討ったよ」

雪女は涙ぐんで山へと帰って行きました。

そして次の日の朝です。

「ふあーあ」

家の奥から目ヤニだらけの男が起きて来ました。

「いやあ、三年寝たら、気分爽快だな」

男は菌糞だらけの口で言いました。

「お？」

男は見知らぬ老人が氷漬けになっているのに気づきました。

「また、俺が寝ている間に、勝手に住み着いた奴がいたのか」

男はおじいさんが凍っていることにはまるで関心がないようです。

「わんわん！」

外でポチが鳴いています。

「おお、ポチ、元気だったか？ どうした？」

どうやらポチはこの男の飼い犬のようです。

「わんわん！」

ポチは庭の土を掘り返しました。

「何かあるのか？」

男は庭をスコップで掘り返しました。

すると土の中から大きな葛籠くわろうが出て来ました。

「おお、これはすごい」

中には金銀財宝がたくさん入っていました。

しかし、財産に興味がない男は、警察に遺失物として届けてしまいました。

「さてと。旅にでも出るか、ポチ」

「わんわん！」

ポチは嬉しそうに答えました。

男は一本のわらを手に持ち、家を出ました。

ポチは男と幸せに暮らしました。

めでたし、めでたし。

眺める男（前書き）

某企画勝手に参加作品です。ちなみにテーマは「歓喜」です。
更に禁則事項は「心理描写」。

そのため、余計に意味不明な作品に仕上がりました。

眺める男

時代は昭和。消費税も携帯電話もない頃のお話です。

ある小さな町に六郎という男が一人で住んでおりました。六郎は見るからに不潔で、髪は伸び放題、髭は生やし放題。それがため、彼が何歳なのか見た目ではわかりません。その上服は一年中黒いＴシャツと藍色のジーパン。どちらも薄汚れています。近所の人達も全く付き合いません。六郎の方も近所の人と顔を合わせても挨拶もしませんし、町会にも入らず、ゴミも出しません。周囲の人々は六郎がどうやって生活しているのか噂し合いましたが、関わり合いになりたくないのです、誰も尋ねたりしないし、彼自身や家に近づく事はありませんでした。

近所の人々が六郎の姿を見かけるのは、決まって町の真ん中を通り抜けている片側三車線の幹線道路の舗道です。彼は何をするでもなく、舗道に直に腰を下ろして、行き交う車や自転車や歩行者を眺めていました。中には、薄汚い格好の六郎のいる舗道を通らないようにしている子供や、若い女性達もあり、見かねた町会長が地べたに座っている六郎に意見した事があります。しかし、六郎はその時はヘコヘコして頭を下げるのですが、次の日になると、同じ服、同じ顔、同じ態勢で、同じ場所に座っているのです。小学生達は六郎について、

「あいつは妖怪だ」

という噂をしました。昼間は舗道に座って大人しくしているが、夜になると町を徘徊して、夜道を歩く人を襲って食っているのだと。しかし、実際には、六郎の姿を夜見かけた者はおらず、それは小学生の間だけの「伝説」で止まっていました。

それでも、毎日舗道にベッタリと腰を下ろし、車両の流れをジッと眺めている六郎の奇異な行動は、町会の会合でも取り上げられま

した。とりわけ婦人部の声が強く、町会長も動かない訳にはいかなくなりました。

そんな中、遂に町の青年団の有志達が、舗道にいる六郎を力ずくで排除しようとなりました。すると六郎は涙を流しながら言いました。「あと三日、あと三日だけ、待ってくれ。そうしたら、この町から出て行くから」

そう言われてしまうと、青年団の有志達もそれ以上の事はできず、三日だけ猶予する事を認め、その場を立ち去りました。あまり強硬な姿勢に出られなかったのは、六郎が何かを仕出かした訳ではないからです。中には、

「何もしていないのに、実力行使はやり過ぎではないか」

という意見もありました。しかし町内の最終的な結論は、「要注意人物」でした。

次の日、六郎はまた舗道に座り、走り去る車や自動二輪、自転車を眺めています。幹線道路沿いの住民達は、遠巻きに六郎の様子を眺めています。もし何か行動を起こしたら、すぐに警察を呼ぶ段取りです。しかし、六郎は朝から晩までそこに座っているだけで、何をする訳でもなく、日が暮れる頃になると家へと帰って行きます。青年団の有志達は、交代で六郎を見張る事にしました。

「三日で出て行くというのは、三日目に何か仕出かすつもりに違いない」

それが有志達の最終意見です。六郎の家の玄関の前、裏木戸の前の二箇所には有志達が陣取り、見張りをしました。ところが、一晩中見張ったのですが、六郎は外に出て来るどころか、自分の部屋からも出ないまま、夜が明けました。そして朝食をすませた様子の六郎が出て来るのを確認して、青年団の有志達はその場を去りました。

六郎はまた幹線道路に行き、いつもの場所に腰を下ろし、道行く車を眺め出します。何も起こりはしないのでは、と言い出す者もいましたが、別の者達は、

「出て行くまでは気を緩めちゃいかん」

と言ひ、見張りを続ける事を決めました。

六郎は日暮れ時になると立ち上がり、家路に着きます。有志達はそれを遠巻きに見て、彼が家に入ると同時に監視体制が敷かれます。しかし、結局その夜も何事もなく明けました。

六郎はまたいつものように幹線道路に行き、彼が座っているのを見かけてから、誰もそばに寄らなくなつた場所に腰を下ろします。

ここまで来るとさすがに脱落する者が増えて来ました。すると強硬派の一人が、

「それこそ奴の思う壺だ。気を抜くのは奴が本当にここから出て行つてからだ」

「そこまで付き合いたくないよ」

そついう意見の人々は監視団から次々に抜けて行きました。

「今夜だ。今夜が危ないぞ」

強硬派の人達は今宵こそと鼻息を荒くし、バットや竹刀を手に六郎の家を見張りました。しかし、その夜も何事もなく明けました。

六郎は何もしませんでした。

「ご迷惑をおかけしました」

六郎は朝、町会長の家を訪れ、町を出て行く事を告げました。町会長は引きつった顔で彼を送り出しました。

「ようやく町が落ち着く」

町会長からの連絡で、六郎が町を出て行つた事を知つた住民達は顔を見合わせて溜息を吐きました。

彼らは知りません。その日の午前零時で、ある銀行強盗事件が時効を迎えた事を。

クライミライ

いつの頃からか、結婚は義務とされた。

それと言つのも、国が崩壊するくらい人口が激減してしまったからだ。

私はもうすぐ30代後半。同級生の大半が結婚している。

40歳までに結婚して出産しないと懲役刑だ。何と恐ろしい世の中なのか。

しかし結婚は1人でできるものではない。いくら義務とは言え、全く好きでもない相手と結婚し、その上子供まで作る事は、懲役刑以上に苦痛である。

いつその事、刑務所に行こうかとも思ったが、それも茨の道だ。

刑務所では、「強制出産」をさせられる。強姦されるわけではないが、強制的に人工授精させられ、妊娠するまで出所できないのである。

ある意味好きでもない男と結婚するよりはマシかとも思えたが、そうでもない。

妊娠した子のDNAを調べて「父親」を割り出し、その「父親」と結婚させられるのだ。

出産能力があり、結婚しない女（できない女も含まれる）には過

酷な世の中だ。

中には服役を免れるために偽装結婚し、子供を育てられない夫婦から養子を取る者もいた。

一見合法的に見えるが、実質的な人口増加に繋がらない為「国家詐欺罪」になり、懲役である。

この法制度が施行されてから、若い女性の自殺が激増した。

若い女性を子に持つ親達は、子供が自殺すると刑務所行きなので、細心の注意を払っていた。しかし防ぎ切れるものではない。

こうして刑務所は許容量を超え、機能しなくなってしまった。

しかし政府は方針転換をせず、とうとう国外脱出組まで現れた。

ここに至り、ようやく政府は方針を変えた。しかしそれは更なる悪夢となった。

「結婚はしなくても良い。夫婦として生活しなくても良い。とにかく子供を生むのが義務」

もはや女性は人間ではなく、「出産装置」でしかなくなってしまった。

政府は優れたDNAデータを持つ男をリストアップし、出産経験のない女性を対象に人工授精の募集をした。

募集とは名ばかりで、実際は強制的に出頭させられ、強制的に妊

娠させられ、強制的に出産させられた。

今私の目の前に「人工授精応募要項」という通知がある。

幸い私は両親をすでに亡くし、自殺しても迷惑をかける人がいない。

しかし自殺は敗北を意味する気がし、したくなかった。

考えあぐねていると、携帯電話が鳴った。私は政府の出産関係の部署からの連絡だと思い、ギョツとしたが、番号は非通知で、誰からの電話かわからない。

私はおかしいな電話だったらすぐに切ろうと思い、出た。

「私達は反政府組織の者です。女性を装置として扱う今の法制度と戦うための集まりです。貴女も参加しませんか？」

私は混乱した。そんな組織があるのも驚きだが、政府と戦う事などできるのだろうか？

「貴女が躊躇するのはわかります。しかし政府は次の手立てを考えているのです。今はまだ強制妊娠ですが、やがては強姦同然になるのです。早く家を出て、私達のところに来て下さい。ともに戦うかどうかは、それから考えて下さって結構です」

私は決心し、家を出た。

教えられた住所は、昔飲み屋街だったところの一角で、地下にあるフロアらしかった。

重々しい大きな扉を押し開いた。そこには白衣を着た医師らしき男が三人立っていた。

「ようこそ。さあ、そこに座って。大丈夫、出産は怖い事ではありませんから、安心して下さい」

飛翔

いつの時代であろうか？　そして、どこの星の事であろうか？
誰も知らない。

目の前に広がる果てしなく続く雲の海。昇り行く恵の象徴の朝日に照らされ、輝いている。

少女はその雲の上を滑空していた。頬を撫でる風が心地良く、少女は微かに笑う。

「ほんの少し前までは、こんな事できなかった」

少女は時折雲間から覗く地上を見下ろし、感慨に耽る。かつて死の世界と隣り合わせの生活をしていた頃。毎日が地獄だった。それでも己の信念を曲げず、戦い続けた。そして、彼女はその宿願を果たし、今こうして鳥になって空を飛んでいる。

「このまま、あのお日様に向かって飛び続けていられたらいいのね」

少女は、彼女の服の中で震える小さな友人に声をかける。その友人はモゾモゾ動いて応じた。

やがて朝日はその姿を全て雲の海の上に出し、より強い輝きで少女を照らす。

「優しい暖かさだ。気持ちいい」

少女は目を閉じ、日の光と風を感じた。瞼の裏に浮かぶのは、あの戦いの日々。

少女はそれを目を開き、その思い出を過去へと押しやる。忘れてはいけませんが、思い出したくもない。

命を落とした人達の事は覚えていたが、その人達が命を落とす瞬間を思い出したくはない。それはあまりに辛い事だから。

「みんな……」

悲しみに包まれ、少女は呟く。

「それでも私は進まなければならない。まだ全てが終わった訳ではないから」

雲の海が途切れ、眼下には本物の海が見えて来た。

「来た。とうとう、来た」

少女の目に涙が光る。それは真珠の粒となって、大空に消えて行く。

「これが、海」

死ぬまで見る事ができないと思っていたものが自分の目の前に広がっているのを、少女は瞼に刻んだ。

「奇麗……。想像していたより、ずっとずっと奇麗」

彼女の目から、また真珠の粒が零れ落ちる。真珠の粒は海へと落ちながら、消える。その海は、朝日の輝きを反射し、光の道を生み出していた。

「広い。広いのね、海って」

少女は高度を下げ、海に接近した。波間を泳ぐ小魚、そしてそれを餌とする大きな魚、更にそれを食そうと追いすがる巨大魚。命の連鎖を目の当たりにし、少女は感動した。

「生きている。海は生きている！」

少女は大声で叫んだ。彼女の声を聞きつけ、大きな生物が海から半身を現し、背中から水飛沫を上げる。少女はその生物を回避し、上空へと舞い上がる。ふと周囲を見渡すと、その生物達が群れをなし、漁をしていた。尾びれを動かし、獲物を追い込む。水飛沫を上げ、仲間に合図を送る。合図に答え、回り込むものがある。海に大きなうねりが生じる。その躍動感に少女は魅了される。

「また会えるといいね！」

少女は彼らに大きく手を振り、そこから離れる。目的の地はもうすぐなのだ。更に高度を上げ、少女は急いだ。

輝く海原を進んで行くと、どこからか、飛行艇のエンジンの音が聞こえて来る。

「？」

少女は辺りを見渡した。しかしまだ肉眼ではその姿を確認できない。

「こっち？」

風が少女に教えてくれた。少女はエンジン音のする方向へと進路を取る。

「いた」

少女は飛行艇を視認した。あの男の駆る飛行艇だ。飛行艇は少女に気づき、大きく旋回する。

「相変わらず、心配性ね」

少女は男の事を思い、苦笑する。飛行艇は爆音を轟かせて、少女の横についた。

「姫様あ！」

飛行艇のキャノピーを開き、隻眼の男が身を乗り出す。

「どうしたの？」

少女は微笑んで尋ねる。隻眼の男は、

「どうしたのではありませんぞ！ 何も仰らずにお出かけになっっては困ります！」

そんな大声を出さなくても聞こえるのに。少女はまた苦笑する。

「笑い事ではありませんぞ、姫様！ いくら世界が平和になったからと言って、供を一人も連れずにこのように遠くまで！」

男は少女の反応に怒っている。

「今すぐお戻り下さい！」

「はいはい」

少女は肩を竦めて男に返事をした。

「先に行つて。すぐに行くから」

「ダメです！ 私もそれほどお人好しではありませんぞ、姫様！ 曳航えいこうしますので、こちらにお移り下さい！」

男は怒鳴り続けたせいで顔が真っ赤である。少女はそれがおかしくてまた笑った。

「何がおかしいのですか、姫様！ 早くして下さい！」

男は尚も怒鳴り続ける。そのせいで顔が更に赤くなった。

「フックを出して」

「はい」

飛行艇の後部から曳航用のフックが放たれ、風で激しく揺れる。

少女はそれをいとも簡単に捕まえ、自分のグライダーに引っ掛けた。

「姫様！ 今回限りにして下さい。私も疲れます」

隻眼の男は少女に手を貸して後部席に誘導しながら言った。

「疲れるのなら、わざわざ迎えに来なくてもいいのよ」

少女は座席に沈み込んで言い返す。途端に彼女の服の襟から小さな動物が顔を覗かせた。

「姫様！ いい加減になさいませ！」

隻眼の男は更にヒートアップする。少女はまた肩を竦める。

二人の乗る飛行艇は朝日を反射させて突き進んだ。

ホラーの達人

私はイベントプロデューサーである。

様々な催し物を企画立案し、クライアントの要望に的確に答えていくのが仕事だ。

ある夏の日。

恒例の「真夏のホラー夜話」の企画を請け負った。

私はすぐに怪談話では第一人者である有栖川由貴輝氏に講演を依頼した。

旧知の仲である有栖川氏は快く受諾してくれ、すぐに日程も決まった。

何度かの打ち合わせののち、本番の日が訪れた。

1000人は入るイベントホール。

満員の客席。

臨場感タップリの演出。

大道具も凝っており、電飾も張り込んだ。

しかし、肝心の有栖川氏の姿が見えない。

時間には厳しい氏の性格を知っている私は、何かあったのではないかと心配した。

事務所に連絡を入れた。

有栖川氏は会場に間違いなく向かっている。

ホッとして舞台袖で氏の到着を待った。

会場は、すでに開演時間を過ぎているにも関わらず、それも演出と想っているのか、騒ぐ客もおらず、まさに静まり返って、有栖川氏の登場を待っていた。

しかし、氏は現れない。

とうとう居ても立ってもいらなくなつた私は会場から飛び出し、ホールの正面玄関に走った。

「！」

すると、玄関の回転ドアを通り、有栖川氏が姿を見せた。

「遅れてすまなかつたね。お客様は怒っていないか？」

氏は私の姿を認めると、そう尋ねた。私は、

「大丈夫ですよ。どなたも騒いでいないです」

「そうか。それは良かった。安心したよ」

氏は微かに微笑むと、舞台袖へと向かった。

大成功だった。

ホールは有栖川氏の話に凍りつき、終焉と同時に万雷の拍手が沸き起こった。

氏は深々とお辞儀をして、舞台から降りた。

私は感動のあまり、有栖川氏にお礼を言おうと思い、楽屋を訪れた。

しかし、氏はすでに帰られたようで、そこには誰もいなかった。

私はまた後で礼を言おうと考え、楽屋を出た。

その時、携帯が鳴った。

開いてみると、有栖川氏からだった。

「ありがとうございます、先生」

私は開口一番そう告げた。すると、驚いた事に通話相手は有栖川

夫人だった。

「奥様でしたか、失礼致しました。ご主人はお隣にいらっしゃるのですか？」

私の言葉に夫人は一瞬沈黙した。

私にはその沈黙の意味が理解できず、

「どうしました？」

夫人の言葉は衝撃的だった。

「主人はたった今、息を引き取りました。そちらに向かう途中、交通事故に遭ったのです」

「えっ？」

私は呆然とした。

いや、さっきまで有栖川氏はここで怪談話をしていたのだ。

そんなはずはない。

「主人はずっとうわ言で怪談話をしていました。きっと魂だけはそちらに着いていたのですね」

夫人の言葉に私は号泣した。

まさしく、有栖川由貴輝氏は「ホラーの達人」だった。

呪いの人形

皆さんは「呪いの人形」の存在を信じますか？

私は信じざるを得ない事件に出会いました。

それをこれからお話ししよう。

私は霊能者の見習いです。高名な霊能者の先生の元で修行中でした。

そんなある日、先生のところにある大富豪の老人が訪れました。

先生はその富豪の老人が訪れるのを予期していたようで、何も尋ねずに奥の間に通しました。

老人は紫色の布に包まれた箱を持っていました。

箱は木製で、高さが30センチほどありました。

「中身は人形ですね」

先生は老人を見て言いました。老人も先生の力を聞き及んでいるのか、その問いに驚くでもなく、小さく頷くと、

「その通りです。この人形に私は悩まされています。何とかして頂けないかと思っていましたな」

「箱から出さなくてもその人形の強烈な波動がわかります。何故貴方はそれほどの魔性を吸っている人形をお持ちなのですか？」

先生は箱を見つめたままで尋ねました。老人も箱を見据えて、

「何度も手放そうとしたのですが、どうしたことが、私のところに舞い戻って来るのです」

「なるほど。相当な業を背負った人形のようにですな。それに貴方の守護霊が動揺されています」

「何と？ それほど危険なものですか？」

先生は老人を見て、

「このまま持ち続けなければいつかは貴方の命を吸い取る事になりますよう。私が何とか致します」

「ありがとうございます」

先生は人形を預かる事にし、老人は帰りました。

「これは私の術の間に置く。持って行っておいでくれ」

「は、はい」

私は2人の会話ですっかり萎縮してしまっていて、その箱を手にするのが怖かったが、そんな事は言えないので、震えながらその箱を持ちました。

「？」

私も霊能者の端くれです。しかし、この箱からは何にも感じ取れません。

不思議に思いながら、その箱を「術の間」に運びました。

最初はそんなつもりはなかったのですが、何となく中身を見たり、箱の蓋を取りました。

「こ、これは……」

私は驚愕しました。箱の中に入っていた人形に見覚えがありました。

先生の居室の押し入れの中にたくさん同じものが並んでいたのを思い出したのです。

「確かに呪いの人形ね」

私は溜息を吐き、蓋を戻しました。

私は理由を言わず、先生のところを辞めました。

皆さん、どうですか？ 確かに「呪いの人形」はあるのです。

落としの源さん

僕はまだ捜査一係所属を拝命して間もない新人刑事だ。

何しろ僕は、生来気が弱く、そんな性格を憂えた警察官の父が柔道を習わせたり、剣道を習わせたりして精神を鍛えようとしたほどで、その成果があったのか、高校を卒業する頃には随分と積極的な性格に変わり、警察官を目指すほどになった。

しかし問題があった。

僕には靈感がある。小さい頃から人には見えない物が見えてしまふのだ。

気が弱かったのはそれが一因していて、イジメの原因にもなったことがある。

刑事になれたのは嬉しかったが、殺人現場に出向くのは嫌だった。

被害者の霊が見え、しかもその事でその霊について来られ、一晚中枕元で泣かれた事もある。

本当にストレスと疲労が蓄積したが、まさか、

「霊が見えるので殺人事件は担当できません」

とも言えず、苦悩した。

父だけは僕の靈感を知っていたので何かと気遣ってくれた。そし

て、

「私が現役の時、落としの名人が後輩にいた。彼は今でも捜査の最前線にいる。彼についてみる。きっと道が開ける」

と話してくれた。

僕にはそんな事で何かが変わるとは思えなかったのだが、とにかくこのままではいけないとも思っていたので、その人についてみる事にした。

そのベテランの方の名前は磐木源蔵。いかにも「デカ」という風体の人だ。

磐木さんは僕の父に世話になった事を話してくれた。

そして僕が思い悩んでいる事も知っていた。

「親父さんからも連絡をもらってる。刑事^{デカ}としてやってけるか、俺についてよく考えてみる」

「はい」

磐木さんはニッコリして、

「じゃ、取調べの書記を頼む」

と言うと、先に取調室に行った。僕は刑事課に行き、準備を整えてから取調室に向かった。

僕が入室すると、丁度容疑者が椅子に座らされるところだった。

僕は先輩たちに目礼し、隅にある椅子に座って調書を広げた。

「さてと。始めようか」

磐木さんの凄みのある声が聞こえた。横目で見ると、容疑者は半笑いの顔で磐木さんを見ていた。

（どうやって落とすんだろう？）

僕は調書と容疑者の顔を交互に見ながら磐木さんの動向に興味を向けた。

「うわああああ！」

調書を取り始めてまもなく、容疑者が急に叫んだ。僕はギクツとしたが、

「お前なんだろ、殺したのは。全部吐いてすつきりしちまえよ」

と言う磐木さんの声に彼を見た。

まさしく腰が抜けた。

磐木さんの背後に、容疑者に殺された被害者の霊が立っていたのだ。

僕はまた見えてはいけないものが見えていると思い、調書に目を

戻した。

「わあああ！ やめてくれ！ そんな目で俺を見ないでくれ！」

容疑者の絶叫にも近い声。

えっ？ 容疑者にも霊が見えている？

僕は不思議に思い、もう一度勇気を振り絞って磐木さんの方を見た。

磐木さんは容疑者の手を握っていた。容疑者は必死に謝っている。

もしや？ しかしそんなことが可能なのか？

それからまもなくして、他の刑事がどれほど追求しても全く落ちなかった容疑者が全ての犯行を自供し、「落ちた」。

取調室を出て刑事課に戻る途中、僕は磐木さんに声をかけた。

「磐木さん、もしかして……」

「そうだよ。お前と同じ。霊が見えるのさ、俺にも」

「……」

僕は嬉しいような恐ろしいような思いで尋ねた。

「磐木さんには人に霊を見せる力があるんですか？」

磐木さんは僕を廊下の端まで連れて行き、

「そんな力なのかどうかかわらんが、容疑者に触れる事によって俺に見えてるモノを見せる事が出来るようだな」

「でも最初は霊はいなかったですよね？」

「呼んだのさ。容疑者を観念させるためにね」

「……」

僕は啞然とした。磐木さんはニヤリとして、

「俺が落としの源さんと呼ばれているのは靈感のおかげなのさ。どうだい、お前も道が開けたろ？」

確かにある意味道は開けたが、僕にできるかどうかは大いに疑問だった。

「俺も霊が見えて散々ストレスが溜まった時期があった。見えて困るという発想から見えるのだから互いに協力する、という発想に切り替えたんだ。そうすれば、見えることが煩わしくなくなる」

磐木さんの説得に僕は耳を傾けたが、首を縦に振る事はできなかった。すると磐木さんは、

「心配するなつて。この力を教えてくれたのは、お前の親父さんなんだからさ」

僕はそれを聞いてもうやるしかないと自分に言い聞かせた。

父に嵌められたのかな？

そんな風にも思えた。

俺の人生

俺は市川隼人^{いちかわ はやと}。地元で一番の進学校を出て、一流大学に見事合格し、更にその上一流企業に就職した。

人生は順風満帆だ。そう思っていた。しかし、違っていたのだ。俺の人生は全然イケてなかった。企業に入って、それがはつきりわかった。

元々田舎者の俺は、大学でも自分の訛りを気にするあまり、親しい友人を作る事もできず、サークル活動も部活動もなかった。その分を全て勉強に注ぎ込み、「一流企業に就職するために」と思い、行動した。自ら人との接触を極力断ち、只、自分の将来のためだけにその日その日を過ごしていた。

その甲斐もあつてか、俺は企業の面接を次々にこなし、内定を貰って行った。

「是非、我が社で」

そう言ってくれた面接官もいたほどだ。

でも、そんな扱いを受けていられたのも、入社するまでだった。三ヶ月の研修の間、俺は何度も恥を掻いた。一度しくじると、俺はミスを繰り返した。更に悪い事に、そんな時に限って、出ないようにと気をつけていた訛りが強くなり、同僚に失笑される。彼らの笑い声にまた動揺し、ミスをし、訛りを笑われる。その繰り返したった。

それでも決して諦めなかったのは、今までに費やした時間を考えたからだ。それを全て失ってしまうような事だけはしたくなかったのだ。

しかし、俺の努力は報われなかった。焦れば焦るほど俺は失敗を繰り返した。

ある日、俺は新人研修担当の営業課の係長に会議室に呼び出された。

（ああ、とうとう、来るべき時が来たな）

いくら自分で頑張っているつもりでも、周囲がそれを認めてくれないければ、企業では不要なのだ。

「失礼します」

俺は緊張してドアを開き、中に入った。係長は窓から外を眺めていたが、振り返って、

「来たか。まあ、かけたまえ」

「はい」

俺は背筋を伸ばして返事をし、すぐ前の椅子に座った。係長は俺の正面の椅子にゆっくりと腰を下ろした。

「何故呼ばれたか、わかるかね？」

係長が尋ねて来た。俺は何と答えるのがいいのか、必死になって今までの経験を思い出した。

「考えるような事ではないと思うが？」

係長の声が大きくなった。俺はビクツとして係長を見る。係長は哀れむように俺を見ていた。

「君の悪いところは、わからない事をわからないと言わない事なんだよ。しかも、それに気づいてすらいない。重大な欠点だ」

俺は係長の言葉を聞き、口の中がカラカラに渴いた。握りしめる拳が湿っぽい。

「君は確かに面接の印象も抜群に良かったし、入社試験の成績もトップクラスだった。しかし、他人との連携や協調となると酷いものだ」

「……」

他人との連携？ 協調？ 俺は心臓が凄まじい速さで動いているのを感じた。

「社会人としての適格性を君は著しく欠いている。これは由々しき

事だよ」

係長の言葉は更に続いていたが、俺は自分の心臓が心配で、それどころではなくなっていた。

「以上の事をよく考え、自分なりの対処法をまとめ、報告書にして提出する事。期限は来週の月曜の午前十時まで。いいね？」

途中から俺は係長の話を聞いていなかっただったので、返事はしたが、どうすればいいのかわかっていなかった。

会議室を退室し、誰もいない廊下を歩く。

（クビだ。俺はクビにされる……。終わりだ……）

そう思った瞬間、何も見えなくなった。誰もいなくなった。俺は一人きりだった。日本でもトップクラスの企業の社員だと思っていたが、そうではなかったのだ。俺は誰ともつながっていなかった。（今までして来た事は、何だったんだ？俺は何のためにこの会社に入ったんだ？）

突然、喉が渴き出した。さっきまでは緊張していて意識しなかったが、全身に大量の汗を掻いていた。俺は廊下の先にある自販機に向かった。

「どうしたの、怖い顔して？」

間延びした声が聞こえた。同期の鈴村早苗さんだった。彼女も俺と同じ地方出身者で、訛りが抜けていない。

「いや」

俺は何も話したくなかったので、彼女を見ないで自販機の前に立った。

「何よお、その態度。市川君、いつから大都会の住人になったの？」

「え？」

鈴村さんの妙な言葉に、俺は思わず振り返った。

「訛りを笑う人は笑わせておけばいい。そうやって私を励ましてくれたの、忘れたの？」

そんな事を言った気がする。人と関わるのを制御して来た俺が、只一人気を許したのが、鈴村さんだった。

「しかめっ面をするくらいだから、嫌な事があつたんだろうけど、そういう時は誰かに話すとすっきりするって、バツチャが言ってたよ」

笑顔で話す鈴村さんを見ていたら、何だかどうでもよくなってしまった。そして、思い切って言ってみる。

「鈴村さん、今度の日曜日、暇？」

「何よお、それ……」

顔が紅潮する鈴村さんを見て、俺はようやく居心地のいい緑地オアシスに辿り着けた気がした。

やっと見つけた

「何度同じミスをすれば気がすむんだ、眉村!？」

怒鳴り声がフロアに響き渡る。俺は身を竦め、額に幾筋もの血管を浮き上がらせているスダレ禿の課長を見た。入社当初は優しい先輩だったが、今は鬼に見える。

「新人の頃が嘘のようだな。それとも、お前は眉村によく似た別人なのか？」

課長は次に陰険な顔つきになり、俺を見る。

「あ、いえ、別人ではありません」

俺は恐る恐る答えた。

「だったら、今のお前は仕事を舐めているとしか思えんぞ、眉村！性根を入れ替える！」

「はい！」

俺は課長の大きな声に直立不動になった。

入社して十年。何事にも一生懸命だった俺は与えられた仕事を全力でこなし、できる事は全てするという姿勢で臨んでいた。その甲斐もあってか、五年前に係長補佐を拝命された。しかし、幾人かの部下と共に始めたプロジェクトは先方の手酷い裏切り行為でご破算となり、その責めを負って俺は係長補佐を辞し、平社員に戻ってしまった。

その頃からだった。優しかった女房の目が冷たくなったのは。無理をしてローンを組んで購入した一戸建ても、今は只重い足枷ではない。できれば売り払いたいくらいだが、女房が承知しないだろう。ボーナス加算月が迫ると、本当に逃げ出したくなる。いつその事、自殺でもするか。そうすれば、保険金でローンは精算され、女房も一安心だろう。どうせ俺なんかいてもいなくても良いのだろうし。

しかし、死ぬのが怖い俺には自殺なんてとてもできない。それに自殺すると成仏できないとか、自殺現場から離れられなくなるとか、妙な知識だけは持ち合わせていたので、尚更だ。

課長に叱責された数日後、すっかり閑職に追いやられた俺は「自主退職要員」になっていた。クビにすると面倒なので「辞職」させたいのが会社の本音だ。だが、今の俺にはその自主退職すら怖い。「会社を辞めた」

なんて女房に言ったら、何と言われるか。想像するだけで恐ろしい。「眉村さん、もう定時ですよ。帰りましょう」

俺より先に「自主退職要員」にされた一年先輩の植村さんが言った。気づくと、壁の掛け時計は五時を過ぎている。「はい」

俺は植村さんに苦笑いで応じ、机の上を片づけた。俺達が毎日している仕事は、古くなった書類の整理。OA化が進んでいるので、そんな仕事は必要ないのだが、俺達のような「要員」のためにあるらしい。植村さんの先輩の一人は、先月辞表を提出したそうだ。

「何で辞めちゃうんですかねえ。私なんか、天国ですよ、この部署」植村さんは本当に嬉しそうにそう言った。俺には理解し難い人だ。「周囲の目さえ気にならなければ、こんな楽な仕事はありませんよ。誰にも急かされないし、誰にも咎められないし」

「そうですね」

俺は鞆を手にしながら、植村さんに相槌を打つ。今、この部署は二人だけなので、植村さんとの会話は無碍にはできない。

「眉村さんは、元の部署に戻りたいのですか？」

植村さんが部屋のドアを開きながら尋ねて来た。

「はあ。できれば戻りたいです。確かにあそこはきつい課でしたが「そうですね。じゃあ、ここはつらいですね」

植村さんはニコツとして言う。いや、笑顔で言われる事ではないと思うが。

会社を出て駅に向かう。こんな毎日だ。俺は何をしているのだろう？ 急に悲しくなった。

（明日辞表を提出しよう）

突然、そう思い立った。俺は植村さんのようにはなりたくない。閑職に甘んじて、おめおめと仕事を続けるのは嫌だ。

ところが、電車を降り、家に近づくにしたがって、そんな勇ましい気持ちは急速に萎んでしまう。女房の激怒する顔が浮かび、背筋がゾツとする。やっぱり、会社を辞めるのはよそう。植村さんのように割り切るしかない。我ながら情けないがそれも生活のためだ。こんなご時勢、次の職がそれほど簡単に見つかるとも思えない。

それにしても、俺は何のために頑張っているのだろう？ 少なくとも女房のためではない。ましてや会社のためなんかではない。もちろん、自分のためでもない。

ふと目を上げると我が家の前だ。俺は門扉を押し開き、玄関へと進む。

「只今」

蚊の鳴くような声で告げる。女房からは応答はない。

「パパ、お帰り！」

その時、天使の声が聞こえた。一人娘の美菜。俺の命に代えても守りたい五年前に授かった愛しい存在。

「どーん！」

美菜が俺に抱きついて来て、

「お帰りのチュウ」

と頬にキスをする。それが俺にとって至上の喜びだ。

「只今、美菜」

美菜を抱き上げ、俺は気づいた。俺が頑張るのは全てはこの子のためだ。何があろうと美菜は守る。そして、美菜には幸せになってもらいたい。

「今日はパパの好きなシチューだよ」

「そうか、それは楽しみだな」

この子とのこんな他愛もない会話に俺はやっと見つける事ができた。俺の幸福を。

心霊写真（前書き）

皆さんは、誰かに虐められた事がありますか、誰かを虐めた事がありますか？

心霊写真

皆さんは「心霊写真」を信じますか？

私は信じます。

世の中には、科学では到底説明し切れない不可思議な現象がたくさんあるものなのです。

私がまだ小学生の時です。

クラスの人気者の男子が学校を休みました。

元気でみんなを笑わせてくれる子だったので、意外に思い、休んだ理由を先生に尋ねました。

「風邪だそうだ。すぐにまた元気になるさ」

しかし、そうはなりませんでした。

彼はそのまま、亡くなってしまったのです。

風邪と言うのは表向きで本当はもっと重い病気だったと知ったのは小学校を卒業してからでしたが。

クラスみんなは彼が死んでしまったとは思いませんでした。

何故なら、彼はいつもそばにいたからです。

修学旅行の記念写真にも、運動会の競技写真にも、彼は写っていました。

クラスみんなは誰も怖がりませんでした。

何故なら彼は仲間だからです。

死んでしまっても、クラスメートだからです。

そしてとうとう卒業式の日。

クラスみんなは、彼の卒業証書を手作りしました。

そして、彼の机の上に花瓶と共に飾りました。

きっと天国の彼も喜んでいるでしょう。

クラスのみんなの誰もが、彼の事を大好きだという事がわかって

卒業式の集合写真が出来上がりました。

そこにもやっぱり彼は写っていました。笑顔で。

そして四月。

私達は中学生になりました。

入学式の記念写真。

そこには何故か彼は写っていませんでした。

彼は春休みに本当に死んでしまったんです。

先生の話だと自殺だそうです。

心霊写真はないのかも知れません。

それ以降、彼は写真に写らなくなってしまったからです。

心霊写真（後書き）

わかりにくいオチで申し訳ありません。

俺は誰だ？

俺は走っていた。

誰か俺を知っている奴はいないのか？

人がいない砂漠ではない。

無人の荒野でもない。

昼尚暗いジャングルでもない。

ごく普通の、ありふれた街の大通りである。

たくさんの人が行き交っている。

車も走っている。

路面電車も走っている。

タクシーのクラクションが耳につく。

トラックの排気ガスが肺を刺激する。

老若男女、ありとあらゆる世代が歩いている。

俺は躊躇う事なく、次々に彼等彼女等に声をかけた。

「俺を知っているか？」

「俺を知っているだろう？」

「俺が誰だかわかるか？」

しかし、誰も知らない。

言葉が通じない訳ではない。

俺の言葉と町を歩く人々の言葉は同じだ。

通訳が必要な訳ではない。

なのに何故誰も俺の事を知らないのだ？

俺は気味が悪くなって来た。

吐き気がする。寒気もする。

熱が出そうだ。頭が重い。

あり得ない。この町で俺は生まれ、育った。

多くの友人がいて、多くの先輩がいて、多くの後輩もいるはず。

それなのに、今まで何百人もの人々に声をかけて、誰一人として俺の事を知っている者がいない。

どついう事なんだ？

何かの罰ゲームか？

俺はそんな酷い仕打ちを受けねばならないような事をしたのか？

わからない。

どうしてなんだ？

俺はその時ある事を思いついた。

そうだ。

市役所に行けばいい。

そこなら、俺の事を知っている人がいるはず。

俺は名案だと思い、市役所に行った。

しかし結果は同じだった。

誰も俺を知らない。

俺の事を調べるにしても、何もわからないので調べようがないと言っ

「何故何もわからないんです？」

俺は頭に来て大声で怒鳴った。すると市役所の人

「そちらをご覧ください。何故貴方が何者がわからないのか、その理

由が示されています」

と俺の右後ろを指差した。

俺はそちらに顔を向けた。

そこには、鏡があつた。

俺はその鏡に近づいた。

そして、全てを理解した。

そこに俺は写っていたが、顔がなかった。顔の部分は空洞で、向こうが見えていた。

「貴方は自分をどこかに忘れて来たのですよ。だから、誰にも貴方が誰なのか、わかりません」

俺は自分の顔を触った。確かに顔は存在する。

しかし、鏡に映らない。他人にも俺の顔は見えないのだ。

俺は一生自分が誰なのかわからないまま生きる事になったのを知った。

出られない

俺はある中堅企業の営業担当。

夏真っ盛りの炎天下、それでもスーツを着込み、汗だくになりながら取引先廻りをしていた。

お昼に差し掛かった頃、俺はあまり行きたくない取引先の近くにいた。

特に注文も売込みする新商品もなかったので、俺はそこをパスする事にし、次の取引先に向かうべく、駅を目指した。

その時携帯が鳴った。

「A社様から緊急のお電話で、どうしても今すぐに来て欲しいそうです」

事務の女の子の言葉に俺は顔を歪ませた。

A社というのが、あまり行きたくない取引先なのだ。

「困ったな。他のお客様にアポ取って向かってる途中なんだけど」

「そちらを変更して行っていただけませんか？ 先方様も興奮気味で」

女の子も対応に苦慮したらしい。

「わかったよ」

俺は仕方なくA社に向かった。

俺がその会社にあまり関わりたくないのは、とにかく汚くて薄気味悪い建物だからだ。

全くと言っていいほど掃除した形跡がなく、廊下や事務所のフロアはゴミだらけ。

かと言って支払いが悪い訳ではなく、事情を知らない上司達には「お得意様」だと思われている。

確かに取引額も大きく、俺が担当している顧客の中では売上ナンバーワンである。

あまり素っ気ない態度を取っているのがわかれば、確実に問題になる。

一体何の用だと思いながら、A社の敷地に足を踏み入れた。

何度見ても気持ちが悪くなる建物だ。

その敷地には事務所と工場があるのだが、工場は壁が穴だらけで倒壊寸前、事務所は社長の趣味なのか、壁一面を蔦が蔽っている。

「おかしいな？」

普段は工場には何人かの作業員がいて、鉄骨の溶接や切断をしているのに、今日は誰もいない。

事務所も明かりが点いている様子がない。

「悪戯か？」

俺はふとそう思ったが、そんな悪戯をして得をする奴はいない。

とにかく誰かいないか声をかけてみようと思い、事務所の玄関に近づいた。

「？」

窓の向こうに人影が動いた気がした。

「何だ、いるのか」

俺はホッとしてドアに手をかけ、開いた。

「お世話になります。お電話ただいて参りました」

事務所は玄関を入るとすぐにフロア全体が見渡せる構造だ。し字に並んだカウンターが玄関と事務フロアの境界線になっている。

「あれ？」

誰もいない。返事もない。

「留守かな？」

俺は帰ろうと思ってドアの方を向いた。

その時だった。俺は人の動く気配を感じて振り返った。

カウンターの向こうから黒ずくめの男が飛び出して来た。

（空き巣か？）

俺は咄嗟に身構えたが、男は俺には目もくれず、ドアを乱暴に開くと外に飛び出して行った。

「何だ？」

俺はそいつを追いかけようとドアに手をかけたが、何かが外からドアを押しているかのように、全く開かなかった。

「ど、どういう事だ？」

俺はパニックになりかけた。するとさっきの空き巣がドアの向こうから、

「誰かが外から来ないとドアは開かない。誰かを中に入れないと、外に出られない。騙して悪かったが、俺も騙されてここに入ったんでね」

「何？」

「あんたも早く誰かを呼んで中に入れないと、ずっとそこにいる事になるぜ」

「会社の人はどうしたんだ？ その人達が来れば……」

「俺は3日もここに閉じ込められていて、机の引き出しにあった名刺ホルダーの名刺の電話をかけまくってやっとあんたが来てくれたんだよ。この会社の人間は誰もいないよ」

「何だつて!？」

「俺にできるアドバイスはそのくらいだ。じゃあな」

「おい!」

しかし俺の呼びかけも虚しく、空き巣男は走り去った。

「出られないだつて? そんなバカなことがあるものか!」

俺は窓に近づき、ロックを解除し、開けようとした。しかし開かない。ドアと同じで、反対側から何者かが押し留めているような感じだ。

「後で弁償しますから」

俺はそう呟いてドアの脇に立てかけてあったハンマーを持ち、窓ガラス目掛けて振り下ろした。

「うわっ!」

窓ガラスは割れるどころか俺ごとハンマーを弾き飛ばした。

「?」

俺は啞然とした。

（本当に出られないのか？）

全く訳がわからない。

「そうだ」

俺は会社に電話して誰かに来てもらおうと思い、携帯を開いた。

しかし何故か圏外になっている。

すかさず事務机に駆け寄り、固定電話から会社にかけて。

しかし繋がらない。

「あいつは俺の会社にかけられた……。どうして今はかからないんだ？」

「お前で……。最後……」

どこからか、そんな声が聞こえた。

「だ、誰だ？ 俺で最後？ どういう意味だよ！？」

俺は大声で叫んだ。

「代わりはいない……。お前で最後……」

「……」

俺は全身から信じられないくらいの汗が噴き出すのを感じた。

（こんなところで俺は……）

絶望が脳内を支配するのにそれほど時間はかからなかった。

俺は考えるのをやめた。

（理解を超えた何かが俺をここに閉じ込めたのなら、もう何をして
も無駄だな）

俺はソファにドスンと腰を下ろし、目を閉じた。

（短い人生だった……）

いつの間にか俺は眠っていた。

空を飛んでいた。

まさか天国？

しかしその思索は、人の声で破られた。

「須田さん、どうしてここで寝てるのよ？」

俺が目を開けると、そこにはA社の事務員の女性が立っていた。

「あれ？ え？」

女性は呆れ顔で、

「あんたもからかわれたのね？」

「え？」

女性はフロアの隅にある神棚に近づいて倒れている狐の置物を元に戻した。

「この子は時々悪戯するのよね」

女性は陽気に言った。

「誰かがこの子を倒したのよ、きっと。それで悪戯が始まったのね」

俺は眩暈がしそうだったが、

「工場の人達と他の事務の人達はどうしたんです？」

「社員旅行。私は旦那が入院して不参加で、昨日退院のはずが今朝にずれたのよ。それで今会社に来たところ」

「はあ」

俺はドツと疲れが出た。

「何にしても良かったわね、大した事なさそうで」

「まあ……」

俺はお茶を頂き、A社を出た。

俺は知らなかった。その事務員の尻に大きな「尻尾」がはえている事を。

究極の雨男

私は俗に言う「雨男」だ。

運動会、各種イベントと、ありとあらゆるアウトドア関係で雨に降られている。

社会人になってからもその傾向は消えなかった。

「お前は式典には来なくていい」

高層ビル建築のプロジェクトを任され、成功させた時に上司に言われた言葉だ。

悲し過ぎて涙も出なかった。

しかし、仕方がないのだ。

私が参加する式典で雨になる確率は100パーセントなのだから。

参加しない方が、式典の進行に都合がいい。

今に始まった事ではない。

そう自分に言い聞かせた。

そんなある日、私は海外担当本部長に呼び出された。

何の用だろう？

全く面識がない人からの呼び出しに戸惑いながら、私はドアをノックした。

「入りなさい」

本部長の声に応じて、私はドアノブを回して中に入った。

「？」

そこには、恐らくアフリカの方と思われる外国人が本部長と相対してソファに座っていた。

本部長は私を見ると、満面の笑みで、

「君か、わが社期待の雨男は？」

「は？」

私は本部長の意味不明な言葉に一瞬唖然とした。

「こちらはアフリカのある国の政府高官の方だ」

「はい」

私は型どおりの挨拶をして、本部長の隣に座った。

「その国では、雨が長い間降らず、非常にお困りなのだ」

「え？」

まさか？ 嫌な予感がする。

「そこでだ、君に行ってもらって、恵みの雨を降らせてもらいたいのだ」

そのまさかだった。

「わが社で進行しているダム建設計画のためにも、是非行って欲しい」

本部長は何を考えているんだ？

「雨男」の力は、そんな凄いものではない。

「そ、それは・・・」

私が断ろうとすると、アフリカの方がそれを察したのか、片言の日本語で喋りだした。

「オネガイデス、タスケテクダサイ。オネガイシマス」

その目は真剣そのもので、私は断わる気持ちを喪失してしまった。

「わかりました」

私の返事を聞き、その政府高官は躍り上がって喜んだ。

「出発は1週間後。期待しているぞ」

「はい」

気乗りしない私を他所に、本部長とアフリカの方は大盛り上がりしていた。

そして1週間後。

私は成田空港の出発ロビーにいた。

私の直接の上司である営業課長と本部長は仏頂面をして私を見ていた。

「誰がここに台風を呼べと言った!？」

本部長は怒鳴り散らした。

外は突如進路を変えた台風による大雨と暴風で、旅客機のフライトができない状態になっていた。

「いや、そうおっしゃいまして・・・」

私に責任があるというのか？

まあ、あるのかも知れないが。

「とにかく、先方には予定を変更してくれるように連絡しておく。」

出直すしかない」

本部長も私に当たっても仕方ないと思ったのか、そう言いつと歩き出した。

「私にあまり恥をかかせないでくれ」

課長は、自分で勝手に私の事を本部長に報告したくせに、今になつてこれだ。

酷い人である。

私は小さく溜息を吐き、課長の後に続いた。

本部長は一計を案じ、成田ではなく関西国際空港から出発する事を提案した。

しかし甘かった。

天気予報で台風は完全に東の海上にそれるというのを確認し、大阪に向かった。

羽田も大雨でフライトの見通しが立たず、新幹線で移動になったが、その間中大雨に追いかけられた。

関西国際空港に到着すると、一瞬晴れ間が見えたのだが、東にそれたはずの台風が大阪に向かい始めたという情報が入った。

またフライトは中止。いつ飛べるかわからないと言われた。

その後、何度も私達は挑戦したのだが、全く無駄だった。

しかも私が空港を後にするとたちまち晴れるのだ。

これには本部長も完全に呆れてしまった。

「確かに君は雨男だな」

嫌味とも賞賛ともとれる言葉を残して、本部長は立ち去った。

そしてある日の午後。

また私は本部長に呼び出された。

「悪いな、呼び立てて。例の国から連絡があった」

「はい」

私はあの人私が私を殺しに来るのかも知れないと思い、目を瞑った。

「干ばつのせいで暴動が起こり、大統領が追放されたそうだ」

「え？」

話の方向が違う。どういうことだ？

「すると不思議な事に雨が降り始めたそうだ。国民は歓喜しているとのことだ」

「？」

私は一瞬どういふことなのか考えた。

そうか、そういうことか。

大統領が晴れ男だったのだ。

それも究極の。

ふと思った。

私とその元大統領が同じ場所にいたら、天候はどうなるのだろうか。

どうでもいいか。

私は何故か、嬉しくなっている自分に気づき、苦笑いした。

インターネットホラーショー

俺は三度の飯よりネットが好きな男。

PCから離れられなくなり、高校も休学している。

両親もすでに呆れ果て、何も言わなくなった。

俺は幸せだった。

何よりも全ての束縛から開放されたからだ。

高校に行っても、クラスメートにはシカトされるか虐められるかだ。

先生にまで味方してもらえない程だしがないし、勉強もできない。

しかし、PCの前では違う。

俺は別人になる。

世界一頭のいい男に変身するのだ。

そして世界一強い男にも変身できる。

PCは俺の親友。

そして誰よりも身近な家族。

俺はPCなしでは生きられなくなっていた。

そんなある日、メールが来た。

耐久レースの参加依頼だった。

どれほど長い間PCの前にいられるかというレースだ。

そんな簡単な事でいいのかと、俺はすぐに参加を選び、返信した。

何日かして、レースの開催日の通知が来た。

明日からだと言う。

俺はいつでもPCの前にいるので、絶対に勝つ自信があった。

そしてレース当日。

俺はいつも通りPCの前にいた。

楽勝だ。

優勝賞金は百万円。

それが手に入れば、もっと高性能のPCを買い、もっと楽しむ。

俺は既に優勝後の事を思い描いていた。

レースは簡単。

レース主催のサイトにアクセスし、表示される文章を入力して行くだけだ。

こんな事はまさしく朝飯前。

全然負ける気がしない。

開始から十数時間が経過し、次々に脱落者が出始めた。

何しろ、トイレ休憩もNGなのだ。

俺はその対策として、大人用の紙オムツとおまるを用意していた。

準備は万全だ。

ほとんどの参加者達が脱落して行く中、俺は勝ち残った。

何としても優勝賞金を手に入れる。

俺は燃えた。

こんなに頑張ったのは生まれて初めてかも知れない。

サイトの参加者カウンターは既に「あと三名」になっていた。

もう少しだ。

もう少しで優勝だ。

俺はアンモニア臭と戦いながら、表示される文章を入力し続けた。

そして開始から七十二時間後。

遂に「あと一名」になった。

やった。やったぞ。俺が勝ち残ったんだ。

サイトに俺のハンドルネームが出て、優勝の文字が流れた。

「やった！」

俺はガッツポーズをして飛び跳ねた。

更にサイトには「優勝賞金を今すぐ取りに来て下さい」の文字が出た。

「今すぐ？」

俺はキョトンとした。

次の瞬間、PCのモニターから真っ黒な腕が伸び、俺をモニターの中に引きずり込んでしまった。

「それほどPCが好きなら、いつそこの中で暮らしなさい」

どこからかそんな声が聞こえた。

普通の人間なら、仰天してパニックになるだろう。

しかし俺は違った。

「喜んで」

PCの中で暮らす。

俺は至福の時を迎えた。

ああ、何て幸せなんだ。

私達は抗議します

私の名前は佐脇覧子。

新進気鋭のホラー小説家である。

最近ようやく執筆した小説が売れるようになり、生活も安定して来た。

私のホラーは私自身が登場するという変わった感じのもので、賛否両論がある。

しかし、人気は次第に上昇し、常に上位にランクインする程になっていた。

ところが、である。

どういう訳か、ファンレターに混じって抗議文が送られて来た。

何かまずい事書いたかな、と思いながら、封を切った。

便箋にビッシリと細かい字で書かれていたのは、私の小説に登場する人物への怒りの声だった。

まずは在日外国人の方。アメリカ国籍のようだ。

リッキー・テックスさん。

私はこの人と同じ名前で連続殺人鬼を登場させ、たくさん人を殺させた。

彼は英語の講師をしているらしく、生徒の父兄から、

「辞めさせてくれ」

とたくさん要望書が勤務先である駅前留学の英会話教室に来ていると言っ。

確かに由々しき問題だが、それと私の小説と結びつけるのはどうだろう？

どちらかと言うと、そんな事で辞めさせようとする父兄の側に問題があると思うのだが。

そして次に書かれていたのは、御徒町のアメ横の方々の連名。

私は御徒町樹里という悪逆非道な殺し屋を登場させ、対立するヤクザを次々に殺させた。

御徒町という町のイメージも悪くなるし、御徒町がヤクザの町というイメージが付くのでそういう話はやめて欲しいという抗議だ。

しかしこれものを射ていない。

樹里は御徒町のためにヤクザと戦っているのだ。彼女は御徒町が大好きなのだ。

だから御徒町樹里と名乗っているのだ。

私だって、決して御徒町を蔑むために書いている訳ではない。

酷い誤解である。

そしてもう1つ。

これは少し困った。

お笑い芸人であるハリンボンからの抗議だ。

靈感少女というホラー小説に登場する箕輪まどかが、ハリセボンの箕輪はかのマネだというのである。

そんなつもりはないのだが、ネタとして名前の似ている事をギャグにしているので訴えられたらまずい。

私は対策に困り、編集者に相談した。

すると編集者は溜息を吐いてこう言った。

「先生、この話自体が危ないですよ。訴えられても知らないですからね」

犯行目的

私はG県警の刑事。

県内は犯罪史上稀に見る猟奇殺人事件で騒然としている。

被害者はごく普通の人達。

殺され方が尋常ではない。

十代の男子高校生は鼻にイヤフォンを入れられ、耳に錐きりを突き刺されて失血死。

二十代の若い女性は、携帯電話を喉の奥に突っ込まれて気管損傷で死亡。

三十代の男性は自宅のブロック塀と自分の車に挟まれて圧死。

四十代の女性は、自分の自転車の下敷きになり内臓破裂で死亡。

五十代の男性は、耳、鼻、口に火の点いたタバコを入れられ、顔を粘着テープでグルグル巻きにされて窒息死。

六十代の男性は携帯カラオケのマイクで何度も殴打され、頭骨陥没で死亡。

七十代の女性は舌を抉り取られ、目を潰されて失血死。

全ての殺人現場には、「天誅」と墨で書かれた半紙が置かれてい

た。

被害者は全員それぞれ全く面識がなく、何一つ共通点がない。

只一つ同じなのは、全員G県在住という事だけ。

捜査は難航するかに思われた。

しかし、事件は犯人の自首という、実に呆気ない終結を迎えた。

ある意味で言うと、本当の「猟奇事件」はここから始まる。

犯人（と思われる人物としか現段階では言えない）は、四十代の男性。

自首した時対応した関係で、取り調べは私が担当した。

そして私はその男の心の内を知り、震えた。

以下、男の供述。

「動機ですか？ 正義感ですよ、正義感。誰にでもあるでしょ、こいつ許せないって。私はそれが他の人達に比べて強いんですね」

男は自首はしたが、自分の犯行は正当なものだと考えていた。異常だ。

「高校生ですか？ あのバカ、バスの中でイヤフォンで音楽聞いていて、音が大きくて、凄く耳障りだったんです。で、注意したら逆ギレですよ。バスを降りてから後をつけて、人がいないのを見計らって殺しました。あんな奴、生かしておいてもどうせ口く大な人間にならないでしょう？」

そんな事をお前が決めるな。

「若い女ですか？ 携帯電話で話すのに夢中で、歩道の真ん中に立ったままなんです。他の人も迷惑そうに通り過ぎてました。あまりにも目に余るので、注意したら、『はあ？ キモいオヤジ』とか言いまして、そのまま無視されたので、一度そこから離れ、そいつが歩き出したのをつけて、人気のないところで羽交い絞めにして持っていた携帯電話をそのバカでかい口の中に突き立ててやりました。死んで当然ですよ、あんな迷惑女は」

もう完全に狂っている。

「三十代の男？ ああ、あの路駐ヤロウね。あいつ、家に駐車場があるのに、いつも路上駐車してるんです。しかも近くの交番の警官とは顔馴染みみたいで、路上駐車を通報しても取り合ってもらえないんです。で、直接注意に行ったら、逆ギレですよ。『何か迷惑かけたのかよ』って。私は周囲に人がいなかったたので、そいつの車に乗り込み、そのバカ男をそいつの家の塀に挟み込んでやったんです。すっきりしましたよ、いい事をしたので」

正義感とか言っていたが、どこに正義があるんだ？

「自転車？ 歩道を我が物顔で自転車に乗っているババアね。あい

つ、自分が邪魔なのに、歩行者が並んで歩いているとすぐに大声で怒鳴るんですよ。『ここはみんなの歩道なのよ』って。何言ってるんですかね。この前、それを私に言ったんです。だから後をつけて自転車ごと蹴倒し、喚くババアの腹の上に自転車を叩きつけてやりましたよ。爽快でしたね」

確かに苛つく自転車は存在するが、殺すのはやり過ぎだろう。

この男はそんな調子で犯行を自供し、一切裁判では争わないと言った。

こいつの目的は何だったのだろうか？

私は無駄と思いつつ、尋ねてみた。

「君の目的は何だ？」

男はニツと笑った。

「私の目的ですか？ それは、世の中には犯罪にはならないがとも有害な人間がたくさんいるのを世間の人達に知ってもらう事です。刑事さんもそう思いませんか？」

お前もその有害な人間の一人だろう。

そう言いたいのをグツと堪え、私は男を哀れんだ。

そして同時に、人間はある箍^{たが}が外れてしまうとたちどころに犯罪者になってしまう弱い存在なのだという事を痛感した。

僕の夏休み

嫌だ。

何故こんなことになったのか？

僕はあるホラー作家の担当編集者。

今、その作家の別荘に向かう途中だ。

その作家の「ご命令」で、急遽夏休みを取らされ、馳せ参じた次第である。

何が嫌なのかと言うと、その作家があまりにも悪趣味なのだ。

作品もエログロものばかりで、僕は彼女のホラーを「嘔吐モノ」と呼称している。

そんな作風だから、恐らく別荘も気色の悪い化け物屋敷風だろう（いや、化け物屋敷そのものかも知れない）と思っていた。

ところが、だ。

着いてみて、別の意味で嘔吐しそうになった。

彼女の顔はお世辞にも綺麗ではない。

むしろ職業にピッタリの顔をしている。

だからこそ、「化け物屋敷」を想定していたのだ。

でも別荘は「お姫様」風だった。

どこかの国の城をイメージしたのか、ニョキニョキと伸びた塔がいくつも見える。

そんな別荘の二階のバルコニーに、彼女はいた。

「いらっしやーい。待ってたわよ、大木君」

その怖い顔を笑顔でいっぱいにして、彼女は手を振った。

しかもフリルのたくさん着いたドレスを着ている。

恐らく、「お姫様気分」なのだろう。

「ど、どうも。お招きに預かり、光栄です」

僕までおかしい。まるでしもべのような言葉遣いだ。

「今、そっちに行くわね」

いや、その距離で十分怖いですから、それ以上近づかないで下さい。

そう言いたかった。

でも言えない。

まずい。

噂は本当だったのかも知れない。

彼女は「若い編集者好き」で、別荘に招き「頂いて」「しまつらしいのだ。

今からでも逃げようかと思っていると、ご本人が到着してしまつた。

「お待ちせエ。さ、入って頂戴」

僕は彼女に手を捕まれ、全身総毛立つのを感じた。

僕は半分失神したような状態で、それからの何時間かを過ごした。

彼女の料理は豪華で、全部自分で作ったとか言っていたが、味もわからないまま、口に運んだ。

やがて食事も終わり、メイドや執事達が姿を消した。

まずい。

完璧に2人きりだ。

僕はある意味死を覚悟した。

「ねえ。私の秘密、知りたい？」

彼女が小首を傾げて尋ねた。

全然可愛くない。むしろ怖い。

「は、はい」

そう答えなければ殺されると思った僕。情けない。

「そう。だったら、教えてあげる」

そう言つと、彼女は自分のアゴを掴み、グイッと引き上げた。

「ヒィッ！」

僕は腰を抜かして、椅子から転げ落ちてしまった。

彼女の顔がベロンと剥けてしまったのだ。

「どう？　これが本当の私よ」

もつと驚いた。

その下から現れたのは、映画女優も真つ青の美女だった。

「私はホラー作家デビューする時、この特殊メイクで醜い顔になったの。その方が話題作りになると思ったから」

「はア」

僕は転がり落ちたままの態勢で話を聞いた。

「どう？ 私の素顔は？」

「き、綺麗です」

「ありがとう」

僕は彼女に誘われるままに寝室に行った。

そして夢のような一夜を楽しんだ。

彼女は最高だった。

僕は知らなかった。

彼女の昔の写真が寝室の書棚にあるのを……。

それさえ見ていれば、一夜を共にする事はなかったらう……。

特殊メイクの顔こそが、彼女の本当の素顔だったのだから。

真夜中のプール

蒸し暑い。

もう午後十一時を過ぎているというのに、部屋の温度計は三十度を超えている。

エアコンは故障し、熱風しか吐き出さない。

私はガマンできなくなり、アシスタント達に声をかけた。

「こんな状態じゃ、仕事が捗らない。ちょっと息抜きに出ようか」

「ええーッ!? 大丈夫なんすか、先生？」

チーフの木下が言った。私は木下を見て、

「君が一番限界来てる顔だよ。とにかく、今のまま続けても皆参ってしまふ。ここから出よう」

「はあ。先生がそうおっしゃるのなら……」

木下は他のアシスタント達に目配せして答えた。

「なに、そんな長時間抜けようと言ってるんじゃないよ。小一時間で戻るのさ」

私はさっさと席を立ち、ペンを置いた。

「明かりはつけたままでいいよ。すぐ戻るんだから」

私はアシスタント五人を引き連れ、蒸し風呂のような通称「アトリエ」を出た。

最初はただブラブラしてコンビニで冷たいものでも買うつもりだったのだが、予定が変わった。

コンビニに行く途中に小学校があり、校庭の一角にプールがあるのが見えたのだ。

「おい、涼まないか、あそこで？」

私は悪戯心を起こして提案した。木下は、

「まずいつすよ。警備員がいますって。見つかったら大変ですよ」

「大丈夫だよ」

私は全く気にも留めずにサツとフェンスを乗り越え、プールサイドに侵入した。

木下達も顔を見合わせていたが、次々にフェンスを乗り越えた。

「そーれっ！」

私はトランクス一枚になり、プールに飛び込んだ。

「やっほーっ！」

アシスタント達も飛び込んだ。私はすぐに水から上がり、スタート台に上った。

その時、誰かがドンと私の背中を突いた。

私はバランスを崩して、ドボンとプールに落ちた。

「こら、誰だ、背中を押したのは!？」

私の言葉に木下達は蒼ざめ、

「自分らは全員、プールに入っていましたよ、先生」

「えっ？」

次の瞬間、私達は何者かに足を引っ張られて、水没した。

もがいた。しかし、水中に引き込む力は壮絶なほど強く、抵抗虚しく全員水底に沈んだ。

どれほど時が経過したのだろう。

「そんなところで何をしている!」

という怒鳴り声で、私は目を覚ました。

慌てて周囲を見回す。木下達も起き上がっていた。

「ここは……？」

私達は水のないプールに寝ていたのだ。

「誰なんだ、あんた達は？」

懐中電灯で私達を順番に照らしながら、警備員らしき男が尋ねた。

「す、すみません。あまり暑かったので、プールで涼もうと思って、つい……」

私がそう言い訳すると、警備員は首を傾げて、

「水のないプールに入っても涼めないだろう？ 何を考えているんだ、あんた達は？」

「ええ？」

私は木下達と顔を見合わせた。プールの水は抜かれたわけではなかった。

私達の誰も水に濡れていないし、プールの底も湿ってもいない。

「このプールはもう取り壊すんだよ。この小学校も今年で廃校なんですね」

「……」

私達は身震いした。

水は確かにあった。

しかし私達には全く濡れた痕跡がない。

そして私を突き落とした何者かの存在……。

私は警備員に平謝りし、小学校から出た。

「何だったんすかね？」

木下がぼそりと言った。しかし誰も答えなかった。

私はアトリエの鍵を取り出し、ドアを開いた。

そして腰を抜かした。

中は洪水でもあったかのように水浸しだったのだ。

終わっていない……。

ここにいるんだ、あいつが……。

携帯電話の怪

皆さんは「携帯電話」をお持ちですか？

もしお持ちなら、このお話を読む前に電源を切る事をお勧めします。

律子は携帯依存症とも言つべき状態で、片時も携帯を手放せないでいた。

その理由。

「いつ、出版社から受賞の連絡があるかわからないから」

あり得ない。

彼女は小説の公募に投稿した事がないのだ。

それなのに、毎日のように出版社からの連絡を待っている。

彼女が携帯を手放せない理由。

実はもう一つある。

それは誰にも言っていない事なのだが、彼からのメールを待つて

いるのだ。

いや、はっきり言ってしまえば、「彼」ではない。

只の同好会仲間。

小説家を目指している仲間同士の集まりで、一目惚れした年下の男。

相手は全く恋愛感情などない。

もし愛情があるとすれば、それは「お母さん」のような存在。

それほど歳は離れていないが、男の方はそういう気持ちだ。

律子はそれに全く気づいていない。

傍目には哀れにさえ見えてしまう。

彼女はその2つの連絡相手のために、寝る時さえも携帯を手放さなかった。

家族も彼女の行動を心配し、心療内科の受診を考えたりした。

しかし、元来医者嫌いの律子は、どんなに家族が説得しても、病院に行ったりしなかった。

また、過酷な減量をさせられると思っているのだ。

今ではリバウンドし、着られる服がほとんどなくなってしまっている。

そんな状態でも、彼女は携帯を放さなかった。

しかし律子の携帯は鳴らなかった。

彼女は携帯ショップに行き、携帯が壊れていると騒いだ。

携帯はどこも異常がなく、どうしても納得しない律子に困り果てた店は警察に通報した。

律子は警官にも食ってかかり、支離滅裂な事を言い続けた。

彼女は公務執行妨害で緊急逮捕され、警察に連行された。

留置所に入れられる時、彼女は携帯を没収された。

律子は泣いて嫌がったが、警官は携帯を取り上げ、律子は留置された。

「私は携帯がないと生きて行けないの！　お願いだから返して！」

彼女は叫び続けた。

しかしその願いは聞き入れられなかった。

翌朝、律子は遺体となっていた。

彼女の姿は、携帯で話しているようだったという。

生まれ変わり

皆さんは生まれ変わりを信じますか？

私は信じます。

と言うより、私自身が生まれ変わりを「記憶」しているのです。

私は30年程前にある男に乱暴された拳句、絞殺されました。

その記憶が今の私の脳に鮮明に残っているのです。

男の名前も年齢もわかっていたので、インターネットで検索し、当時の記事を読みました。

そして、男が仮出所している事も突き止めました。

私は会社に長期休暇願いを出し、男がいる町に行きました。

復讐してやろうと思ったのです。

前世の私の仇を討つ。

バカな考えかも知れませんが、その時の私にはそれが全てでした。

私は男の家を見つけ、男が帰るのを待ちました。

夜も更け、人通りもまばらになった頃、男は姿を見せました。

男が家の鍵を開け、中に入った瞬間を狙い、私は男の背中に突進しました。

「ぐ……」

私は果物ナイフで男の背中を刺しました。

男は何が起こったのかわからない顔で、私を見ました。

「だ、誰だ？」

「貴方に乱暴されて殺された女の生まれ変わりよ！ 仇を討たせてもらうわ！」

私は積年の恨みを晴らすように叫びました。

男は驚愕していました。

「30年も前の仇、だと……？」

「そうよ！」

何故か男はニヤリとしました。そして、血にむせ返りながら言いました。

「俺はその更に30年前にお前の前世の女のそのまた前世の女に殺された男の生まれ変わりさ」

受験勉強

智仁は大学受験を控えた高校三年生である。

部活動も終わり、本格的に勉強に集中する事にした。

しかし、周りの友人達は、全くそんな気配がない。

皆遊び呆けている。

智仁はそんな友人達の事を羨ましく思ったが、一緒に遊ぶとは思わなかった。

友人達は智仁の考えを知っているのか、誰も誘いに来ない。

おかげで智仁は勉強に集中できた。

彼は部活に明け暮れた3ヶ月の遅れを取り戻すため、睡眠時間を削って取り組んだ。

苦手科目の克服。

ケアレスミス防止のためのテクニック。

時間配分の仕方。

わからない問題は後回しにし、できるところから解いて行く。

とにかく集中した。

何が何でも志望大学に合格する。

遊ぶのはそれからでも遅くはない。

智仁を知っている人が今の彼を見たら、仰天するだろう。

そのくらい彼は変わった。

そして夏休み最後の日。

智仁は休み前に立てた計画をやり遂げ、充実していた。

「ふっ」

彼は伸びをして天井を仰いだ。

「今日で夏休みも終わるか。早かったな」

彼は不意に背後に人の気配を感じて振り返った。

そこには見た事もない男が立っていた。

服装は上下黒のスーツで、黒のネクタイ。

葬式の帰りなのだろうか？

それとも今から行くところ？

「あの、どちら様ですか？」

智仁は探るような目で尋ねた。すると男は、

「もう満足したかね、智仁君？」

「え？」

自分の名前を知っている？ 遠い親戚のおじさんだろうか？

「さあ、行こうか」

男の言葉で、周りの風景が一変した。闇の中、無数に浮かぶ蠟燭の火。

「うわああああ！」

そこはたくさんの亡者が歩く黄泉への道だった。

「君は高校時代遊びに夢中になり、拳句やクザの世界に入り、抗争の中で銃弾に倒れ、今意識不明状態だ」

「嘘だ、嘘だ、嘘だ！」

智仁は絶叫した。男は冷静に続けた。

「もうすぐ君は命が尽きる。君は地獄に行かねばならない。私はその水先案内人だ」

「死神……」

智仁は男の正体を知り、息を呑んだ。

「人生は一度。君はその一度きりの人生を無駄に生きた。今からその報いを受ける事になる」

「嫌だ、嫌だ、嫌だ！」

智仁は必死に拒絶した。

「嫌だ、絶対に嫌だ！ まだ死にたくない！ 俺の人生は無駄な人生なんかじゃない！」

智仁は亡者達に囲まれ、その列に飲み込まれて行った。

「俺はまだ死にたくない！！」

智仁の叫び声が、虚しく響いた。黒スーツの男が小さく一礼し、

「ご愁傷様です」

と呟いた。

適齡期

私は所謂「深窓の令嬢」と呼ばれる存在でした。

生まれた時から沢山の使用人達に傳かれ、

「お嬢様」

と呼ばれて育ちました。

他人には我儘と言われました。

確かに兄弟姉妹がない分、利己的に育ってしまったかも知れませんが。

でも私は、その身分故に様々な人達に持て囃され、媚び諂われませんでした。

それを当然と感じ、もっとそうして欲しいと思う自分。

誰も窘めてくれない。

私の傲慢さは年を追う毎に酷くなっていきました。

ある日、今までの振舞が全く通用しない時が訪れました。

あまりにも突然過ぎる父の会社の倒産。

何も聞かされていなかった私にとって、まさに「寝耳に水」でした。

父は自殺し、母は失踪しました。

何不自由なく生活して来た私にとって、一瞬にして漆黒の闇に突き落とされた心境でした。

でも私は死を選んだり、姿をくらませたりはしませんでした。

「一つだけ私の性格で良い所があるとすれば、それは「絶対に諦めない」所だと思います。

私は懸命に生きる術を探しました。

今まで私に阿っていた人達が、仕返しとばかりに意地悪をして来た事もありました。

それでも私は負けませんでした。

何時か必ず見返してみせる。

そう心に誓い、日々を送りました。

そうした生活をしていた私にも、遂にその日が訪れました。

「適齢期」です。

まだ早い。

そう思っていました。

でも人それぞれ違うモノですから、仕方のない事かも知れません。

私は震える手で市役所からの通知を開き、読みました。

「貴女の今までの生活データから試算した結果、貴女の死亡適齢期は今年の十一月三日と決定致しました事をお知らせします」

その日は私の六十歳の誕生日でした。

梅雨の時期の憂鬱

ジトジト降る雨。

私は雨降りが続くと心配になる。

家の裏は道路を隔てて切り立った崖。

十年前に落石があつてから、補強工事がなされた。

一見心配なさそうな強度に見えるが、不安だ。

何にしてもあと5年は崩れないで欲しい。五年崩れなければもう大丈夫。

私はこの家売り、引っ越すつもりだ。だが、まだ資金が足りない。

もつしばらくはここにいないといけない。

そんな私の不安を他所に雨が三日も降り続けている。憂鬱になる。

傘を差して崖の様子を見に行った。コロコロと小さな石の破片が落ちて来る。

手抜き工事がたくさん発覚している事件を見聞きするたびに、こもそうではないかと考えてしまう。

思わず駆け出し、家に戻る。電話に近づき、受話器を手にした。

しかし戻ってしまう。

連絡していいものかと。騒ぎ過ぎだと言われるのがオチか？

私は二階に上がり、窓から崖を眺めた。滝のような雨がコンクリートに打ちつけている。

十年保ったのだ。一日二日で崩れたりしないだろう。

しかし十年間の蓄積があるとも考えられる。

明日にも崩れるかも知れないのだ。

そんな妄想を繰り返す日々が続いた。

何日か経ったある日。

私が仕事から帰ると、裏の崖が崩れ、私の家が押し潰されているのが見えた。

私は驚愕した。よりによって何故留守の時に……。近所の人、

「家にいない時で良かったね」

と言ってくれた。私は家が潰れたのはどうでも良かった。その後の事が気になった。

私は県の土木課の人に謝罪を受け、県営の住宅に無料で入居した。職員はしきりに謝罪と言い訳を繰り返していたが、私は疲れたからと言って彼を追い返し、支給された布団に包まって眠った。

私はその日から別の不安に悩まされた。崩れた崖。押し潰された家。

これからどうなってしまうのだろうか？

それから一カ月が過ぎた。

崖の修復工事が始まった。私はますます不安になっていた。

何故誰も聞いて来ないのだろうか？ 誰も気づいていないのだろうか？

日曜の朝、誰かがドアフォンを押した。私は眠い目を擦りながらドアを開いた。

「警察です。がけ崩れで押し潰された貴方の家の床下から、毛布に包まれた白骨死体が見つかりました。お話をお聞かせ願えませんか？」

私の引越しは無期延期になった。

こちらお客様相談室です

私はある通販会社のお客様担当。

日々、理不尽な理由で「クレーム」を言ってくる「モンスター」達の相手をするのが主な仕事だ。

今日も憂鬱な1日が始まる。

「お宅で買った掃除機なんだけど、全然吸い込みが悪くてどうにも使えないわ」

「申し訳ございません。不良品はお取替えいたしますので」

私は見えない相手に深々と何度も頭を下げて応じた。

「居間の鉢植えを移動しようとしたら、落として割っちゃったのよ。その土も植木鉢のかけらも全然吸い込まないってどういう事よ？返品させて頂戴」

もう言いがかりだ。酷過ぎる。

でもこの程度は可愛い方だ。

「お宅で買った懐中電灯、電池が入っていないじゃないの？どうしてよ？」

「電池は別売りと書いてありますので、ご容赦下さい」

「そんなこと、どこにも書いてないわよ！ 書いてあっても私が見ていないって言ってるんだから、電池送りなさいよ！」

「それは致しかねます。返品はお受けいたしますので、それでご容赦下さい」

「もう二度とあんたのどこから買わないからね！」

そのお客様は、そう言いながら月に何度もご注文され、その度に同様のクレームをつけて来るのだ。

さらに最悪なのはこんなケース。

「お宅で買った洗剤、子供が飲んじゃって救急車呼んだわ。ご近所にとでも恥ずかしい思いをしたから、代わりに謝って頂戴！」

もう子供の心配より世間体なのがモンスターだ。

わが社に何も非がない事までイチャモンをつけて来る。

そんないつもの電話応対をしていた時、私の隣の女の子が泣き出してしまった。

声こそ出していないが、目が真っ赤で、涙が溢れている。

「どうしたの？」

私は小声で尋ねた。その子はメモ帳に、

「大丈夫です」

と記したが、全く大丈夫そうではない。

「私が代わるわ」

女の子は相手にその事を告げ、保留ボタンを押すと、嗚咽を上げて机に伏せてしまった。

「お電話代わりました、責任者の内藤です」

「おお、女か？ 男はおらんのか、お前んとは？」

「おりますが、こちらの責任者は私ですので、私が承ります」

相手は中年の男。もしかして卑猥な事を言ったのか？

最初に応対した子も、決して気が弱い子ではない。

原因は何か？

私は気持ちを落ち着かせながら、ゆつくりと言った。

「係りの者が何か失礼な事を申し上げたのでしょうか？」

「そうじゃねえよ。俺は何も失礼な事はされてねえよ」

「そうですか。お客様、大変申し訳ありませんが、もう一度お話を聞かせ願えませんか？」

「かまわねえよ」

男は話を始めた。

そして10分程経った頃。

「課長、大丈夫ですか？」

私は1班の班長に声をかけられ、ハッと我に返った。

知らない間に泣いていた。机の上にある小さな手鏡に真つ赤な目をした私の顔が写っていた。

「だから言っただろ？ 並みの神経じゃ、俺の話は堪えられないって」

相手の男は哀れむような声で言った。

私は男の生い立ちを聴かされていたのだ。

そのあまりの壮絶さに、知らないうちに泣いていた。

クレームではなかったが、これも迷惑電話なのだろうか？

「もうかけないよ。もっと我慢強い奴がいるところに電話するさ」

男はそう言って電話を切った。

私はしばらく受話器を持ったまま呆然としていた。

クレーム

私は数多くのホラー小説を世に送り出している作家だ。

今日は新しいホラー小説の企画会議と言う名目で、料亭で酒宴を開いていた。

私の担当の編集者が、お酌をしながら、

「先生、今度の小説は、人類存亡を賭けたSFホラーにしませんか？」

「SFホラーか。今まで書いた事がない分野ね。いいかも」

私はほろ酔い気分で応じた。

「こんなのはどう？ 死の国で落ちこぼれた死神が、その腹いせで人類を次々に殺し始める」

「おお、いいですねえ」

担当編集者が赤い顔で同意した。

「死神は世界の主要国の元首に憑依し、核ミサイルの発射ボタンを押す。人類は絶滅」

「いやあ、滅んじゃうんですか？ 何とか反撃しましょうよ」

編集長まで話に加わって来た。私はヘラヘラ笑って、

「だって、相手は死神よ？　生きている者を殺すのが彼の仕事でしょ？　絶滅でいいの！」

酔いかなり廻って来た私は、支離滅裂になっていた。

「最終的には、その辺は読者の想像に任せるべきではないですかね？」

編集者が生意気にも意見した。私はキツとして、

「うるさい！　絶滅したら絶滅なの！　人類は滅びるべきなのだあ！」

と叫び、そのまま酔いつぶれてしまった。

記憶が途切れたようだ。

私は何故か一人で暗い夜道を歩いていた。

「？」

私は外灯の下で手招きしている執事のような風体の老人に気づいた。

「私に何か用ですか？」

きつと、ファンだろう。サインでも欲しいのかな？　老人は満面

の笑みで、

「私、実は死神なんです」

「へ？」

私はこの老人が危ない人なのだと思って後ずさりした。

「ご心配なく。貴女をお迎えに来たわけではありません。実は、あの世を代表して抗議に参りました」

「は？ 抗議？」

「はい」

私はマジマジとその自称死神の老人を見た。

どちらかと言うと、死神よりは神様のような気品がある。

「死神の仕事は、人を殺す事ではありません。亡くなった方をあの世にお連れする事です」

「はあ」

私は何でこの人、企画会議の内容を知っているのだらうと思った。

「貴女は私共の仕事を誤解されています。その事を伝えたくて、ここまで越しいただいたのです」

「は？ ここまで？ ここってどこ？」

「生の国と死の国の境界です。日本では黄泉比良坂と呼ばれています」

その名前、私も小説で使った事がある……。

「私共の抗議、ご理解いただけましたか？」

老人は微笑んだままだったが、急に威圧感を漂わせて来た。

返答次第ではこのまま「お連れする」という事か？

「は、はい。理解しました。以後気をつけます」

私は震えながら頭を下げた。

「それは良かった。ありがとうございます。これからよろしくお付き合いの程を」

老人はそう言つと霧のように消えてしまった。

「先生、先生！」

担当編集者の怒鳴り声で、私は目を覚ました。

料亭の中だ。

帰り道ではなかった。

まずい。

私は今まで随分と出鱈目な死の世界を描いて来た。

とうとうあの世が怒り出して、死神が抗議に来たのだ。

私は決意した。

「さっきの話、全部白紙ね。違うストーリーにするから」

「ええ？」

編集者と編集長は、突然の私の心変わりに仰天していた。

数カ月後、私の新作が出版された。

死神とのほのぼのとしたやり取りを描いた感動的なホラー。

大成功だった。

ダブルミリオン。

私の著作で1番のヒット作となった。

ある日、ファンレターに目を通していると、妙に懐かしい感じの

する葉書を見つけた。

差出人の名前は書いていない。

筆跡にも見覚えがない。

でも知っている。わかるのだ。

あの死神からだ。

私の著作への賛辞と、死神の優しさを描いてくれた事への感謝の
気持ちが書かれていた。

最後の一言に私は困惑した。

「貴女が亡くなった時には、死の国の一同でお迎えにあがります。
それまでお元気で」

アイスクリームの女とバツイチの男

私はバツイチ子なしの中年サラリーマン。

妻に離婚届を突きつけられ、売り言葉に買い言葉で判を押した。

そして、妻が出て行って一週間と経たないうちに後悔した。

箆笥のどこに何が入っているのか、全くわからない。

洗濯機の動かし方がわからないし、風呂の沸かし方も謎だ。

自分でも情けない男だと思う。

しかし、だからと言って、元妻（すでに法律上はそうだ）に頭を下げて、

「やり直したい」

などとは、口が裂けても言いたくはない。その程度のプライドは心の片隅にあるのだ。

更に悪い事に、何も考えずに離婚してしまったため、元妻の住所すらわからない。

当然、携帯は番号を変えられ、勤務先も変わっていた。

ごく丁寧な事に、

「教えないで欲しいと言われています」

と前の勤務先の事務員に言われた。癪に障ったが、どうする事もできない。

「くそ」

私は携帯に毒づき、キッチンのテーブルの上に投げ出した。

床にはカップめんの容器の残骸がこれでもかという具合に散乱している。

少し臭い始めているものもあるようだ。

今気づいたが、ゴミの日もわからなかった。自分の生活能力の低さに啞然としてしまう。

イライラしたのでタバコを探したが、ズボンのポケットには空箱が入っているだけ。

買い溜めしておいたのはわかってはいるが、それをどこにしまったのかわからない。

「何だってんだよ！」

更にイラつき、ゴミ箱に空箱を叩きつけた。

するとそのせいでゴミ箱が倒れ、中にあったものが溢れ出てしまった。

それを片づけるなんて考えもせず、私は家を出た。

「寒いな、これじゃあ」

私はＴシャツ一枚で出てしまったのに気づいた。

いくら桜の開花が始まっているとは言え、こんな薄着で外を歩いているバカはいない。

「タバコを買うだけだから、いいか」

戻って服を着るのも面倒だったので、そのまま歩き出す。

ところが、その日はとことんついていなかった。

いつも使っている自動販売機が故障中なのだ。

私は仕方なく、そこから一番近いコンビニを目指した。

段々、体温が奪われていく気がする。

若い時なら、これくらいの薄着はどうという事はなかったのだが、歳をとるとはこういう事なのか、と妙な感慨に耽ってしまう。

コンビニに入る。

私の薄着は奇異なのか、それとも自意識過剰なのか、客の視線が集まっている気がしてしまう。

ついでに飲み物を買おうと思い、店の奥へと歩き出す。

その時、若い女性が買い物籠いっぱいアイスクリームを入れているのを見かけた。

数が尋常ではない。十個どころではないだろう。カップのもの、棒のもの、モナカ系と様々。

三十個はあるのではないだろうか？

よく見ると、綺麗な女だ。大きくて黒目がちな瞳、高い鼻、魅惑的な厚い唇。

アイスクリームを好む女性が多い。

元妻も、夏は毎日食っていた。

そのせいかどうかかわからないが、あいつは夏太りしていた。

それにしてもだ。数が多過ぎる。まさか、彼女一人で食べるのではないだろう。

もしそうだとしたら、あの細い身体は凄い。何故太らないのかと訊きたくなる。

それとも、大家族なのだろうか？ 家族全員がアイスクリーム大好き人間で、大量に買い込まないといけないとか。

そんな事を空想しながら、私はあるメーカーの缶ビールを一本だけ冷蔵庫から取り出した。

レジに進むと、さっきの美人が買い物籠を台の上に載せていた。

重そうだ。店員が思わず手を貸した程だった。

彼女の後ろにつくと長くなりそうなので、私は隣のレジを選んだ。

缶ビールを台の上に置き、タバコの番号を告げる。

そして、ズボンの尻のポケットに手を伸ばす。

血の気が引いた。財布を忘れた事に気づいたのだ。

いい大人が、財布を忘れたので商品を戻して帰るのか？

今度は恥ずかしさで顔がドンドン紅潮して行くのを感じた。

「お客様？」

レジの店員は不思議そうに私を見ている。

私は苦笑いして、頭を掻き、

「その、財布を落としたみたいで」

店員の顔が一瞬だけ、不機嫌そうになった。

「私が立て替えましょうか？」

まだレジが終わらない「アイスの君」が言った。

私と店員はほぼ同時に、

「え？」

と彼女を見た。彼女は微笑んで、

「困った時はお互い様ですわ。どうぞ」

と千円札を私に差し出す。

「さ、遠慮なさらずに。レジがつかえていますよ」

ハッとして後ろを見ると、二人の客がムツとした顔でこちらを見ていた。

「あ、はい、ありがとうございます」

私は「アイスの君」が貸してくれた千円で支払をすませ、脇にどいた。

そして、「アイスの君」のレジが終わるのを待った。

しばらくして、ようやく支払をすませた「アイスの君」が大きくて重そうなレジ袋を二つ提げて私に近づいて来た。

「どうもありがとうございました。お金をお返ししたいので、連絡

先を……」

私は恐縮しきりで尋ねた。すると「アイスの君」は、

「それなら、このアイスを私の家まで運んで下さいな」

「あ、はい」

貴方は昔から美人に弱い。

元妻の言葉だ。

確かにそうかも知れない。

お近づきになりたいとは思わなかったが、どこの誰なのかくらいは知りたかったので、二つ返事だった。

彼女の家は高層マンションだった。二十階建てだ。

「それにしても、たくさん買われましたね」

レジ袋の重さで、肩が悲鳴を上げそうだったが、何とか作り笑顔で言った。

「ええ。これから暑くなりますから、たくさん買っておかないと」

「アイスの君」の名前は、東海林慧璃茄^{しやうじ えりな}。随分と難しい字を書く名だが、何となくエキゾチックな彼女の雰囲気似合っている。

「なるほど」

暑くなる？　まだ春先だぞ。随分気の早い人だな。

玄関で袋を渡して帰ろうと思ったが、

「是非、お茶でも」

と言われ、さも申し訳なさそうに中に入った。

「突き当りがキッチンですから、そのテーブルの上に置いて下さい」

私は奥へと歩いて行き、テーブルの上にレジ袋を放り出すように置いた。

これで住んでいる場所がわかったから、すぐにも財布を取りに行つて、借りた金を返そう。

そう思つてキッチンを出ようとした時、

「ねえ」

と慧璃茄さんに後ろから抱きつかれた。

「貸したお金の返済方法、私が決めていいですか？」

むにゅうと何かが押しつけられる。彼女、細身の割には胸が大きいようだ。

鼓動が高鳴る。呼吸も荒くなる。汗が噴き出す。

「は、はい」

嫌ですなどという返事はありませんでした。

「お風呂、先に入って下さい。後から行きますから」

耳元で囁かれ、身も心も蕩けそつだ。

私は言われるがままに行動した。

キッチンを出て、バスルームに行く。

真昼の情事か。顔がにやける。

我が家のユニットバスとは大違いで、浴室は広々としている。

脱衣所でそそくさと服を脱ぎ、浴室に入る。

「あれ？」

風呂が沸いているにしては、中はヒンヤリしていた。

「沸いてないのか？」

私は浴槽の蓋をどけた。

「え？」

そこには、大量のアイスクリームに埋もれるように、完全に息をしている様子がない裸の男が目を見開いて寝かされていた。

「ぐー！」

後頭部に硬いものが振り下ろされた。一瞬、意識が飛びそうになる。

私はよろけて、浴槽に倒れ込んだ。

背中に当たる冷たい塊。

「ほら、さっき貴方が運んでくれたアイスクリームよ。これで貴方の身体を冷やすの」

慧璃茄さんの声がした。

「夏が来る前に、よく冷やして頂くわ」

頂く？ 食べるのか、私を……？

大量のアイスクリームに埋もれたせいか、頭が働かない。

いずれにしても私はもう……。

献血しませんか？

暇だ。

突然会社の厚生部から「有給休暇を消化して下さい」と言われ、取りたくもない休みを取った。

俗に言う仕事人間に分類される俺は、急に休んでも何もすることはない。

女房とは半年前から別居していて、五歳の娘も「ママ」のところだ。

俺は家にいても何も面白いことがないので、散歩に出た。

普段は忙しく通り抜ける町の風景も、こうしてゆっくりと歩きながら見ると、何故か新鮮だった。

へえ。あんなところにアイスクリーム屋があったのか。

売り子のコスチューム、なかなか色っぽいぞ……。

今度じっくりアイスを選んでみよう。

そんな感じで、何をするわけでもなく、何を買うわけでもなしに、俺は町をぶらついた。

随分と家から離れたところまで来たな、と思った時、広場の片隅に献血の車が停まっているのに気づいた。

「暇だから、してみるか」

俺はスタスタとそこに歩を進め、行列に並んだ。

行列と言うと大袈裟だが、並んでいるのは俺を含めて5人。

普通、献血の行列はもう少し多いと思う。

献血した事のない俺には、何とも判断がつかなかったが。

しかも、俺の前に並んでいるのは、どう見ても献血より輸血が必要そうな人ばかりだ。

先頭にいるジイさんは、どう若く見積もっても70代だ。

その後ろの学生らしき男は、身長は高いが、あまりにも細く、栄養失調に見える。

三番目の中年のおばさんは、健康そうな体格だが、顔色が悪い。今にも倒れそうだ。

四番目、つまり俺のすぐ前にいるのは、OLらしき若い女性だが、学生風の男と同じで、痩せ過ぎだ。

違和感。

俺はそれを感じた。

しかし、遅かった。

手遅れだったのだ。

一体あれからどれほどの時間が経ったのだろうか？

俺はまだ行列に並んでいる。

俺の後ろには3人いる。

ジイさん、学生、おばさん。

前にはOLの女性。

俺はあれから何度も献血された。

逃げ出そうとしたが、どうした事が、献血車から離れられない。

俺達5人はもう何回も血を抜かれていた。

この先どうなるのか？

俺は眩暈がして倒れかけた。

すると看護師らしき服装の若い女が現れて言った。

「大丈夫ですか？ 少し休んだら、また並んで下さいね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7580i/>

神村律子自選短編集

2011年11月12日12時23分発行